

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

X - 5 - 2

1982

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

# ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

X - 5 - 2

1984

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

## 序

滋賀県下のほ場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、はや10年目を迎えることになりました。この間はほ場整備事業の拡大に伴い発掘調査件数も年々増加してきました。

このような状況のもとで発掘調査と開発事業との間で大きな問題が生じることなく発掘調査が円滑に実施出来ておことは関係機関の御理解の賜ものと感謝いたします。

発掘調査で得られた資料や成果を公開し、広く県民に資料提供するため、ここに昭和57年度に実施しました発掘調査の報告書を刊行することにいたしました。

この報告書が、滋賀の埋蔵文化財に関する理解を深めていただく一助になれば幸いです。

最後にこの調査に御協力をいただきました地元関係者および関係諸機関の方々に対し厚くお礼申し上げます。

昭和58年3月

滋賀県教育委員会事務局  
文化部文化財保護課長  
外 池 忠 雄

## 例 言

1. 本報告書は、昭和57年度県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、県農林部の費用負担にかかる調査成果を収載した。
2. 本報告書は、昭和57年度事業の第5分冊にあたり、湖東地区（日野町・蒲生町）の7遺跡を収録した。
3. 調査にあたっては、県農林部耕池建設課、八日市県事務所土地改良2課、日野川東部土地改良事務所、地元日野町・蒲生町役場、両町教育委員会をはじめ、地元役員等多くの方々から種々の協力を得た。
4. 調査は県教育委員会文化財保護課主査近藤滋が担当し、現地調査は日野町関係遺跡を日野町教育委員会技師日永伊久男、蒲生町関係遺跡を蒲生町教育委員会技師北川浩の協力を得て実施した。
5. 調査に協力を得た諸氏については、各遺跡ごとに記した。厚く感謝の意を表する次第である。
6. 本報告書は、日野町教育委員会技師日永伊久男、蒲生町教育委員会技師北川浩が編集した。

# 目 次

はじめに

例 言

## 第 1 章 蒲生郡日野町小御門城遺跡

1	はじめに	1
2	位置と環境	1
3	調査結果	4
	(1) 遺 構	4
	(2) 遺 物	13
4	ま と め	15

## 第 2 章 蒲生郡日野町十禅師遺跡

1	はじめに	17
2	位置と環境	17
3	調査結果	20
	(1) 遺 構	20
	(2) 遺 物	23
4	ま と め	24

## 第 3 章 蒲生郡日野町内池遺跡

1	はじめに	27
2	位置と環境	27
3	調査結果	30
	(1) 遺 構	30

(2) 遺物	49
4 ま と め	50

#### 第 4 章 蒲生町七ツ塚遺跡

1 はじめに	53
2 位置と環境	53
3 調査の結果	56
(1) 遺構	56
(2) 遺物	61
4 おわりに	63

#### 第 5 章 蒲生町石塔十一遺跡

1 はじめに	65
2 位置と環境	67
3 調査の結果	67
4 ま と め	70

#### 第 6 章 蒲生町大塚城遺跡

1 はじめに	71
2 位置と環境	71
3 調査の結果	71
(1) 遺構	75
(2) 遺物	75
3 おわりに	76

#### 第 7 章 蒲生町法教寺遺跡

1 はじめに	77
2 位 置	79
3 調査の結果	79
4 ま と め	79

# 插图目次

## 蒲生郡日野町小御門城遺跡

第1図	遺跡位置図	2
第2図	トレンチ配置図	3
第3図	64-1 T・4 C-4 T土層図	4
第4図	64-1 T・4 C-4 T実測図	4・5
第5図	64-2 T実測図	5
第6図	64-3 <sup>*</sup> T・井戸実測図	6
第7図	5 C-1 NT実測図	7
第8図	5 C-3 T・5 B-2 T実測図	8
第9図	4 C-2 T・4 C-1 T実測図	8・9
第10図	4 B-1 T・4 B-1 T SK-1・4 B-1 T SK-2・4 B-3 T実測図	9
第11図	3 B-8 T・3 B-12 T実測図	10
第12図	1-3 T実測図	12
第13図	1-4 T実測図	12
第14図	1-9 T実測図	13

## 蒲生郡日野町十禅師遺跡

第1図	遺跡位置図	18
第2図	トレンチ配置図	19
第3図	1-1 T・T1実測図	20
第4図	4-1 T・6-1 T実測図	21
第5図	4-1 T・H1実測図	22
第6図	6-3 T・6-4 T・6-5 T・6-6 T実測図	22・23
第7図	6-6 T・ピット53実測図	23
第8図	6-7 T土層図	23

## 蒲生郡日野町内池遺跡

第1図	遺跡位置図	28
第2図	調査区域図	29
第3図	遺構全体図	30・31
第4図	SX-1-5実測図	31
第5図	T1・T2実測図	32
第6図	T3・T4実測図	33
第7図	T5・T6実測図	34
第8図	T7実測図	35
第9図	T8・T9実測図	36

第10図	T10・14実測図	37
第11図	T11・T12実測図	38
第12図	T13・T15実測図	39
第13図	T16実測図	40
第14図	H1・H2実測図	41
第15図	H3・H4実測図	42
第16図	H5実測図	44
第17図	H6・H7実測図	45
第18図	H8・H9・SK-6実測図	46
第19図	H10実測図	47
第20図	屋外カマド実測図	48
<b>蒲生町七ツ塚遺跡</b>		
第1図	遺跡周辺図	54
第2図	トレンチ配置図	55
第3図	遺構図	56・57
第4図	トレンチ断面図	57
第5図	SBO1平面図	58
第6図	SBO2・SBO5平面図	59
第7図	SBO6平面図	60
第8図	SRO1出土遺物	62
<b>蒲生町石塔十一遺跡</b>		
第1図	遺跡周辺図	65
第2図	トレンチ配置図	66
第3図	トレンチ断面図	66・67
第4図	石塔寺三重石塔	67
第5図	調査地周辺より出土した石遺物	67
第6図	出土遺物実測図	69
<b>蒲生町大塚城遺跡</b>		
第1図	遺跡周辺図	72
第2図	トレンチ配置図	73
第3図	T-1・T-2断面図	74
第4図	現況測量図	76・77
第5図	調査地測量図・断面図	76・77
<b>蒲生町法教寺遺跡</b>		
第1図	遺跡周辺図	77
第2図	トレンチ配置図	78

## 図版目次

### 蒲生郡日野町小御門城遺跡

- 図版1. 1. 調査前全景(小御門古墳群より望む)  
2. 土壘及び堀(南西より)
- 図版2. 1. 64-1 T (北東より)  
2. 4 C-2 T (北東より)
- 図版3. 1. 64-1 T 土器出土状況  
2. 64-1 T 断面(南西より)
- 図版4. 1. 4 C-3 T (南東より)  
2. 5 C-1 N T (北西より)
- 図版5. 1. 4 C-2 T 升A  
2. 4 C-2 T 升B
- 図版6. 1. 4 C-2 T 升C  
2. 4 C-2 T 升D
- 図版7. 1. 4 C-2 T 升E  
2. 4 C-2 T 升F
- 図版8. 1. 4 C-2 T 升G  
2. 4 C-2 T 断面(北東より)
- 図版9. 1. 4 C-1 T S D-1 (北東より)  
2. 4 C-1 T S D-1 升
- 図版10. 1. 64-3<sup>※</sup>T 井戸(南西より)  
2. 64-3<sup>※</sup>T (南より)
- 図版11. 1. 5 C-3 T (北東より)  
2. 5 B-2 T (北西より)
- 図版12. 1. 4 B-1 T (北東より)  
2. 4 B-1 T S K-1 (北東より)
- 図版13. 1. 4 B-1 T S K-2 (北東より)  
2. 4 B-3 T (北より)
- 図版14. 1. 3 B-8 T (南東より)  
2. 3 B-12 T (北東より)

- 図版15. 1. 1-4 T (南西より)  
2. 1-4 T 断面(南西より)
- 図版16. 1. 1-9 T (北西より)  
2. 1-9 T 土器出土状況
- 図版17. 1. 1-3 T (南東より)  
2. 1-6 T S D-1 土器出土状況
- 図版18. 出土遺物
- 図版19. 出土遺物
- 図版20. 出土遺物
- 図版21. 出土遺物
- 図版22. 出土遺物
- 図版23. 出土遺物
- 図版24. 出土遺物
- 図版25. 出土遺物実測図(1)
- 図版26. 出土遺物実測図(2)
- 図版27. 出土遺物実測図(3)
- 図版28. 出土遺物実測図(4)
- 図版29. 出土遺物実測図(5)
- 図版30. 出土遺物実測図(6)
- 図版31. 出土遺物実測図(7)

### 蒲生郡日野町十禅師遺跡

- 図版32. 1. 調査前全景(東より)  
2. 1-1 T T 1 (東より)
- 図版33. 1. 4-1 T (西より)  
2. 6-1 T (北西より)
- 図版34. 1. 6-3 T (北東より)  
2. 6-6 T (北東より)
- 図版35. 1. 6-6 T S K-1 (西より)  
2. 6-6 T S K-5 (南東より)

図版36. 1. 6-6T SD-10 (南東より)  
2. 6-6T ビット53

図版37. 出土遺物

図版38. 出土遺物

図版39. 出土遺物

図版40. 出土遺物実測図(1)

図版41. 出土遺物実測図(2)

図版42. 出土遺物実測図(3)

#### 蒲生郡日野町内池遺跡

図版43. 1. SX-1 (西より)

2. SX-1 土器出土状況

図版44. 1. SX-2~5 (北西より)

2. SX-2~5 (北東より)

図版45. 1. SX-2 土器出土状況

2. SX-2・3 周溝 断面(北西より)

図版46. 1. SX-4 土器出土状況

2. SX-2・4 周溝 断面(南西より)

図版47. 1. T1 (北東より)

2. T1 カマド (南西より)

図版48. 1. T2 (東より)

2. T2 カマド (西より)

図版49. 1. T3 (南東より)

2. T4 (東より)

図版50. 1. T5 (東より)

2. T5 カマド (南東より)

図版51. 1. T6 (南東より)

2. T7 (北東より)

図版52. 1. T8 (東より)

2. T9 (東より)

図版53. 1. T10・T14 (北東より)

2. T11 (北東より)

図版54. 1. T13・T16 (南東より)

2. T16 カマド (南東より)

図版55. 1. T15 (南東より)

2. T15 土器出土状況

図版56. 1. T12 (北東より)

2. H1 (東より)

図版57. 1. H2 (南東より)

2. H3 (北東より)

図版58. 1. H4・H5 (南東より)

2. H6 (北東より)

図版59. 1. H7 (東より)

2. H8 (北東より)

図版60. 1. H10 (南東より)

2. 屋外カマド (南東より)

図版61. 1. SK-6 (北東より)

2. SK-12 (東より)

図版62. 出土遺物

図版63. 出土遺物

図版64. 出土遺物

図版65. 出土遺物

図版66. 出土遺物

図版67. 出土遺物実測図(1)

図版68. 出土遺物実測図(2)

図版69. 出土遺物実測図(3)

図版70. 出土遺物実測図(4)

#### 蒲生町七ツ塚遺跡

図版71. 1. 遺跡近景 (南から)

2. 遺跡近景 (東から)

図版72. 1. 道 標

2. 道 標 (右; 鶴田・左; 寺村)

図版73. 1. 第1地区1・Aトレンチ全景(南から)

2. 第1地区1・Bトレンチ全景(西から)
- 図版74. 1. 第1地区SR 1 (自然流水路)  
2. 第1地区西拡張部全景(北から)
- 図版75. 1. 第1地区SB 1西半(南から)  
2. 第1地区SB 1全景(右; 拡張部)
- 図版76. 1. 第1地区SB 2 (西から)  
2. 第1地区SB 2 (北から)
- 図版77. 1. 第2地区SB 5検出状況(南から)  
2. 第2地区SB 6検出状況(東から)
- 図版78. 1. T15トレンチ(北から)  
2. T5トレンチ(南から)
- 図版79. 出土遺物(須恵器)
- 図版80. 1. 出土遺物(須恵器)  
2. 出土遺物(須恵器)
- 図版81. 1. 出土遺物(須恵器)  
2. 出土遺物(須恵器・土師器)
- 図版82. 出土遺物実測図(1)
- 図版83. 出土遺物実測図(2)
- 図版84. 出土遺物実測図(3)
- 図版85. 出土遺物実測図(4)
- 図版86. 出土遺物実測図(5)
- 図版92. 1. 調査後 全景(北から)  
2. 調査後 全景(北東から)
- 図版93. 1. 調査後 全景(北から)  
2. 調査後 北部(東から)
- 図版94. 1. 土塁1 B断面  
2. 土塁1 C断面
- 図版95. 1. 土塁2 A断面  
2. 土塁3 B断面
- 図版96. 1. T-2 南壁断面  
2. T-7 南壁断面
- 図版97. 出土遺物
- 図版98. 出土遺物実測図

#### 蒲生町石塔十一遺跡

- 図版87. 1. T-1 トレンチ(東から)  
2. T-6 トレンチ(東から)
- 図版88. 出土遺物
- 図版89. 出土遺物実測図

#### 蒲生町大塚城遺跡

- 図版90. 1. 調査前全景(北から)  
2. 調査前北部(西から)
- 図版91. 1. 水晶工房跡(南から)  
2. 水晶工房跡出土遺物

# 第 1 章 小御門城遺跡

## 1、はじめに

小御門城遺跡は蒲生郡日野町大字小御門字城屋敷に所在する。現在では家屋が建て込んでいるが、東側には基礎部幅約3m、高さ約1.6mの土塁と、その外側に堀と推定される小川がめぐる。また、その西側は、東側の土塁や小川と連続するような状態で、L字状に区画された水田がある。

調査は、昭和57年度県営ほ場整備事業に先立ち行ったもので、昭和57年5月より同年10月までの約6ヶ月を要した。主要部である城内はほ場整備地区外であるが、城外にそれに付属する施設や集落が想定されるため、ほ場整備計画の排水路敷及び道路敷を中心とし、削平される水田部分を調査した。調査方法は、排水路敷・道路敷には幅約3m、長さ約10m～80mの細長いトレンチを、削平される水田部分には約3m四方のトレンチを適宜設定し、バックホーにより堆積土を掘削した後、手作業で遺構を掘り込んだ。調査面積は合計約4400㎡にのぼる。

本調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課主査近藤滋氏の指導をうけ、日野町教育委員会技師日永久男が担当した。

現地調査及び整理にあたっては、以下の諸氏の協力を得た。

足立泰子・植田由美子・内田信夫・大野隆行・奥村ふみ子・河副 勉・木田武生・木村由美・熊捕恵美子・谷 一志・谷口 操・馬場行雄・福原みゆき・満田妃登美・山田宏美

(財) 滋賀県文化財保護協会 大谷 巖・岡本隆子・坂本秀樹(現 高月町教育委員会技師)・中川正人(敬称略)  
また、地元小御門、山本の方々には多大な協力を得た。

本章の執筆は日永があたり、遺物の実測・図面の整理等は、熊捕・奥村・満田があたった。遺物写真については、中島写真店の協力を得た。

## 2、位置と環境

本町は鈴鹿山脈の西麓に位置し、同山脈より北西方向に派生する3つの丘陵(北より布引丘陵・桜谷丘陵・水口丘陵)と、その間を流れる2河川(佐久良川・日野川)により形成された平野部とからなる。この2河川は、隣接の蒲生町内で合流し、湖東平野を経て琵琶湖へと注ぐ。日野川の支流である出雲川は、桜谷丘陵の南縁を西流し、蒲生町との町境付近で本流へと合流する。この2河川にはさまれた平野部は、本町の中心部にあたる。

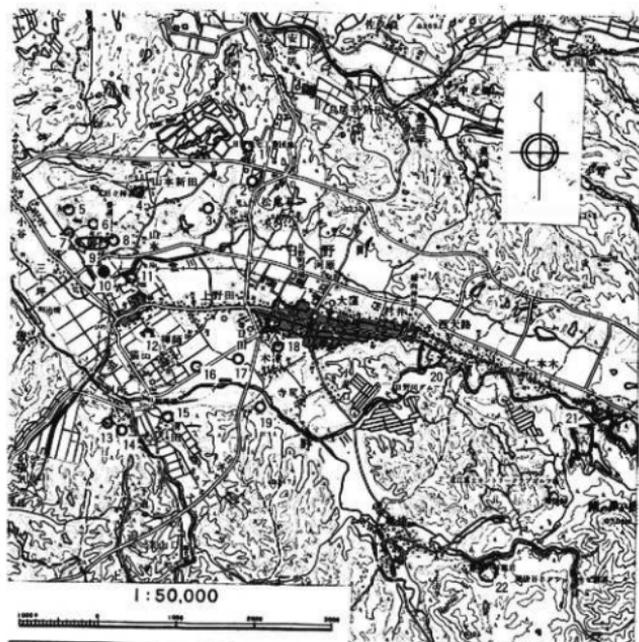
本遺跡は、琵琶湖より日野川を遡流した場合、この平野部の西端入口部分にあたり、出雲川と桜谷丘陵とはさまれた平野部に位置する。このため、本遺跡の周辺は、比較的に早くから開かれていたと思われる。本遺跡の南縁を出雲川が流れており、その南側対岸一帯は内池遺跡で、縄文時代早期や弥生時代中期の遺物が採集されている。<sup>(注1)</sup> このことから、出雲川の氾濫原であるこの付近は、古代より生活に適した地域であることがわかるであろう。

時代は降り古墳時代になると、本遺跡の北方桜谷丘陵より派生する小支丘上に、古墳が形成されるようになる。<sup>(注2)</sup> <sup>(注3)</sup> 小御門古墳群や小谷古墳がそれで、前者は小支丘の南縁に10数基の小円墳が連続的に存在することが確認されている。<sup>(注4)</sup>

奈良・平安時代の遺跡は少なく、大谷北遺跡をはじめとする須恵器窯が数基存在するとされる。<sup>(注5)</sup>

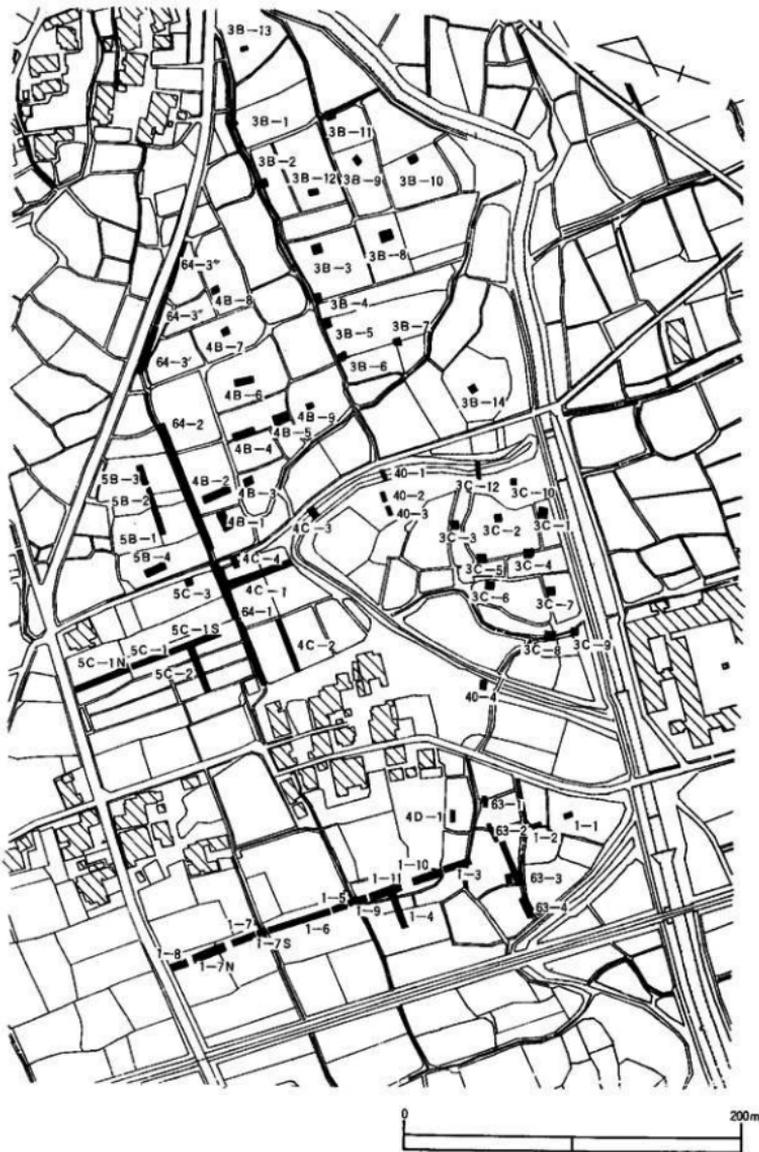
中世以降になると、この支丘上には、小御門A遺跡や正明寺遺跡のような寺院跡や大谷古窯などの、宗教的性格をもつ遺跡が多くなる。<sup>(注6)</sup> <sup>(注7)</sup>

また、日野町の西側の入り口となる地形上の理由から、交通、ひいては軍事上の要衝となり、蒲生氏が小谷城



- |           |          |
|-----------|----------|
| 1 大谷北遺跡   | 12 篠田遺跡  |
| 2 大谷古墓    | 13 成願寺遺跡 |
| 3 正明寺遺跡   | 14 別所遺跡  |
| 4 月夕岡遺跡   | 15 瀬田遺跡  |
| 5 小谷城跡    | 16 十輝跡遺跡 |
| 6 小御門A遺跡  | 17 狐塚遺跡  |
| 7 小谷古墳    | 18 日枝社遺跡 |
| 8 小御門C遺跡  | 19 木津遺跡  |
| 9 小御門古墳群  | 20 中野城跡  |
| 10 小御門城遺跡 | 21 青羽城跡  |
| 11 内港遺跡   | 22 貝掛城跡  |

第1図 遺跡位置図



第2図 トレンチ配置図

を築成する。

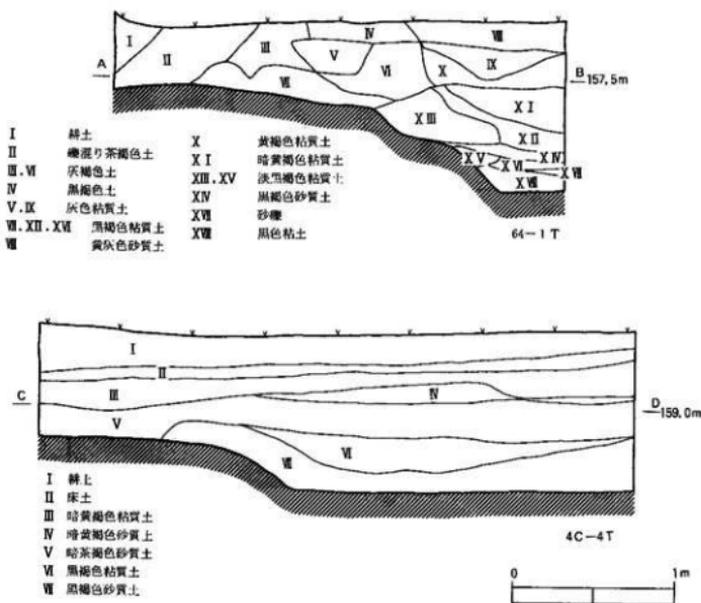
以上のように、今回調査を実施した小御門城遺跡は、人間の生活基盤である土地の肥沃さと、交通軍事上の要であるという地の利をあわせもつ位置を占めている。

### 3、調査結果

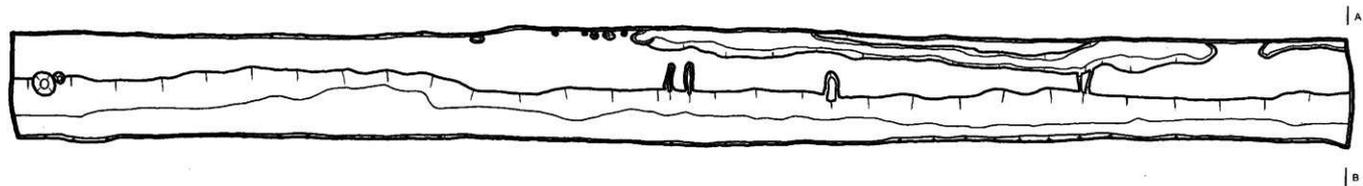
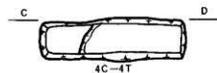
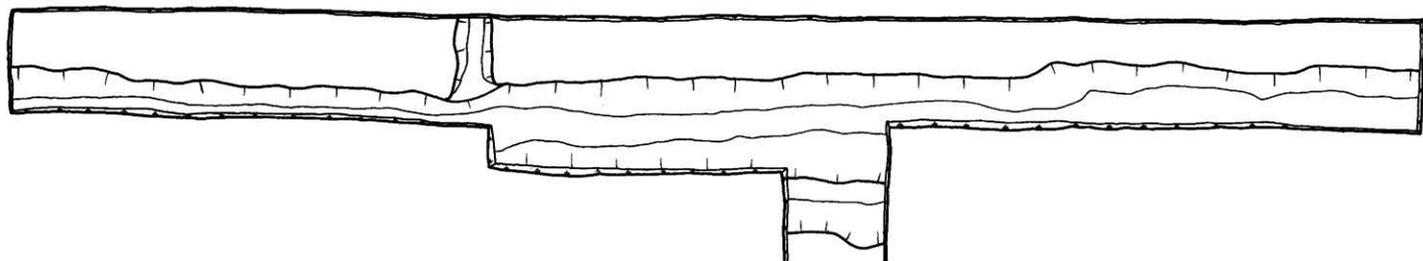
#### (1) 遺構

##### (64-1 T) (第4図)

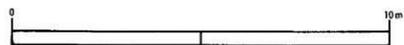
地表下約1mで、幅約3m、深さ約50cmの溝が約76mにわたり検出された。西端は小川となっており不明である。また、東方は道路を隔てて64-2 Tとなっているが、この溝と続くような遺構は検出できなかった。そこで、道路部分で屈曲すると推定されたため、南側に4 C-4 Tを特設した。ここでは64-1 Tの溝と直交する方向の、深さ約30cmの溝が検出された。したがって64-1 Tの溝は、南東方向に屈曲していることが推定される。64-1 Tには、18層(I~XVIII)の堆積が認められ(第3図)、溝の埋土はXI~XVIIIの8層となっている。VI層から1・2、X層から26、XI層から3~8、XII層から9・10、XIV層から11~15、XVI層から16~25、XVIII層から27がそれぞれ出土している。したがって、この溝は鎌倉時代初頭に作られ、桃山時代には完全に埋没したようである。溝の中軸線は、およそN-50°-Eとなる。

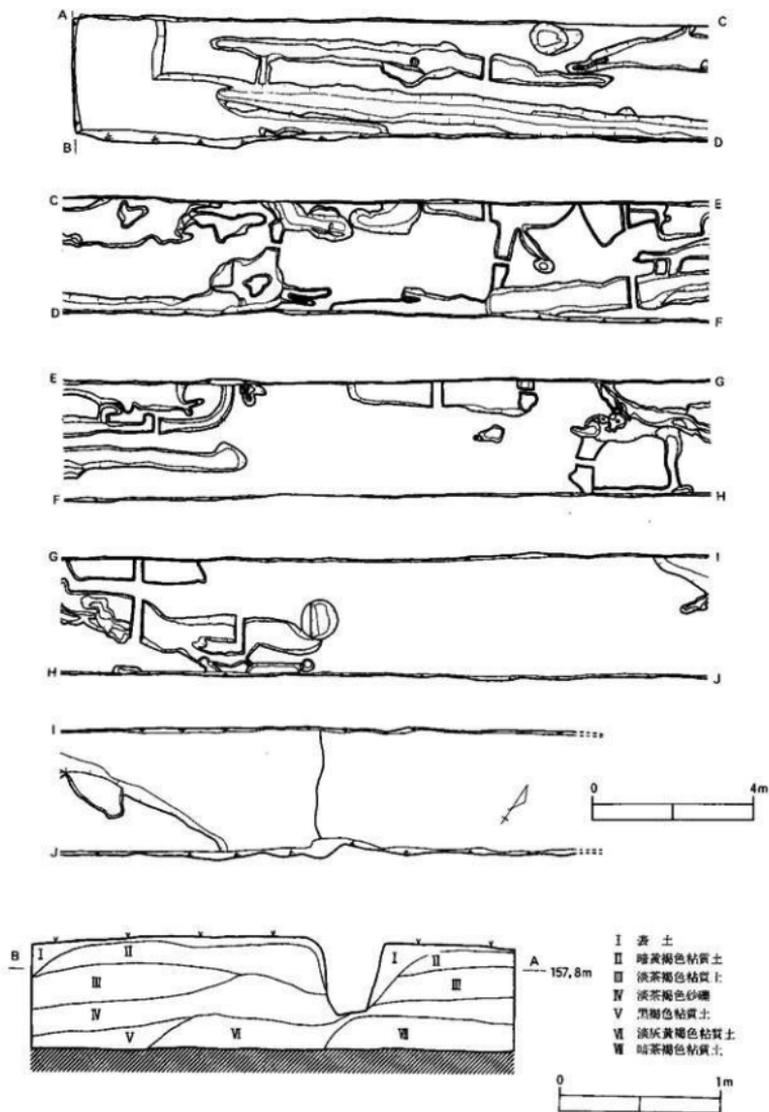


第3図 64-1 T, 4 C-4 T土層図



第4图 64-1T·4C-4T实测图





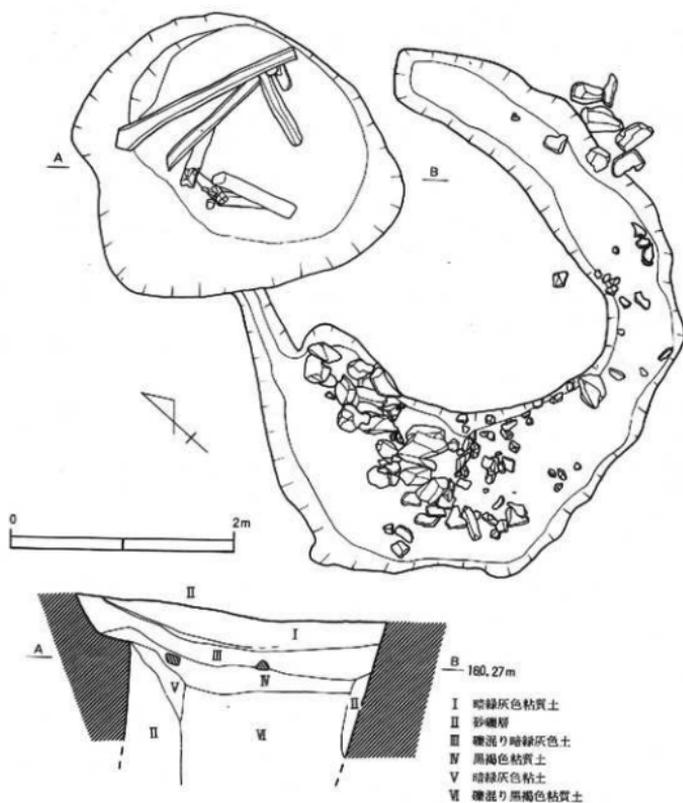
第5圖 64-2 T 実測図

〈64-2 T〉 (第5図)

不定方向の浅い数条の溝が不規則に検出された。東方に進むにつれて低湿地となっていた。64-2 Tには7層 (I~VII) の堆積が認められ、II層より28、III層より29~32、VI層より33、溝内より34が出土した。

〈64-3<sup>o</sup> T〉 (第6図)

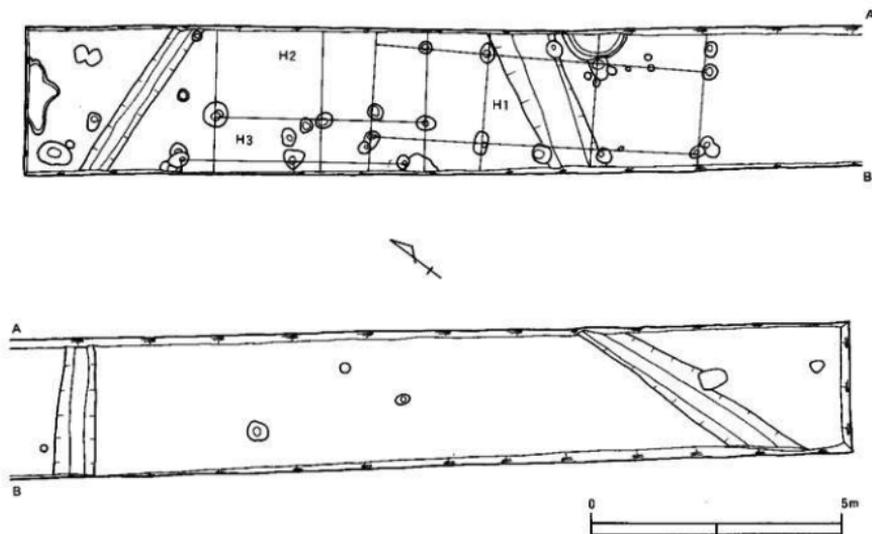
東端で径約2.5m~3.0m、深さ2m以上の井戸が検出された。井戸枠は、径15cm前後の丸太が井桁に組まれていた。湧水と崩落が著しいため2m以上の掘下げは不可能であった。また、井戸の南方には、井戸の掘方と続く溝が弧状に検出され、溝内には大小多数の礫があった。この溝内より35・36の土器が出土した。



第6図 64-3<sup>o</sup> T、井戸実測図

〈5C区〉

5C-1NT (第7図)では、3棟の掘立柱建物跡(H1~3)が検出された。H1は、3間×1間以上の掘立柱建物跡と思われる。建物方位はN-34°-Wである。南北の柱間寸法は約2.2mで、東西方向は1.8m前後である。H2及びH3は、いずれも南北方向は2間であるが、東西方向は不明である。柱間寸法は、前者が約2.1m、後者が約2.2mである。建物方位は、いずれもN-37°-Wである。



第7図 5C-1NT実測図

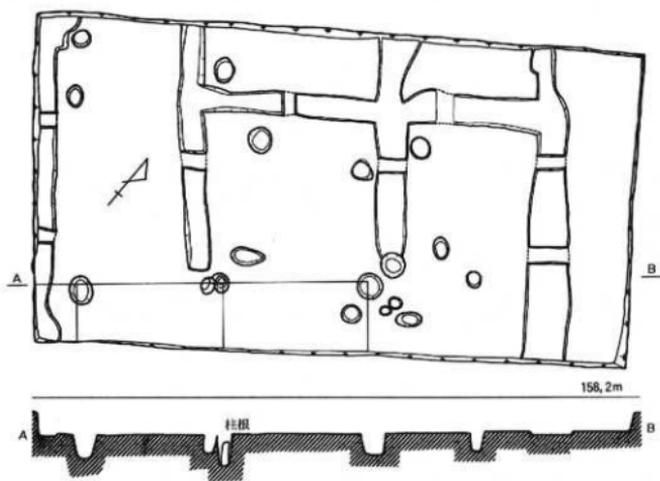
5C-3T (第8図)では、東西2間以上、南北不明の掘立柱建物跡が検出された。柱間寸法は約1.8mで、方位は東西列でN-50°-Eである。柱穴は径約20~30cmの円形で、1ヶ所からは径約10cmの柱根が検出された。

〈5B区〉

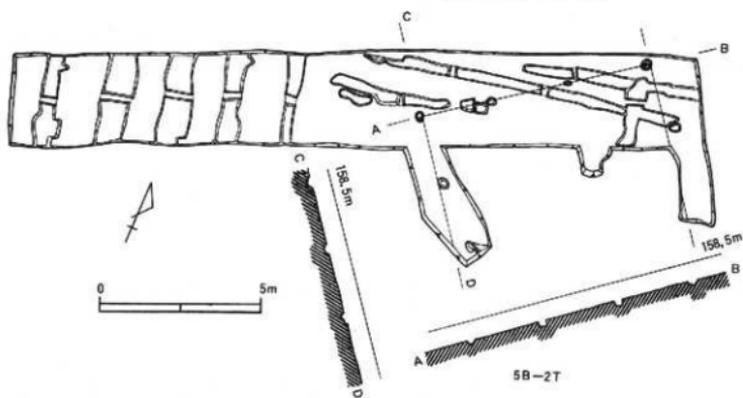
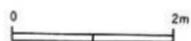
5B-2Tより3間×1間以上の掘立柱建物(第8図)が1棟確認された。東西棟で、建物方位はN-54°-Eである。柱間寸法は東西列で約2.4m、南北列で約2.1mである。

〈4C区〉

4C-2Tでは、現地表下約60cmより幅約35cm、深さ約50cmの溝状の掘方が認められた。溝状掘方内では、長さ約4.2~4.6mの竹管を、約14cm×27cmの木製の升で連結した道水施設が検出された(第9図)。この道水施設は約33m分確認され、升は7ヶ所で検出された。升には墨付けが施され、また各升には番号や、番号間の寸法を

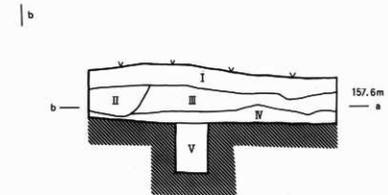
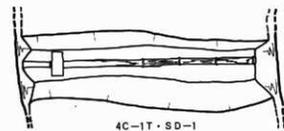
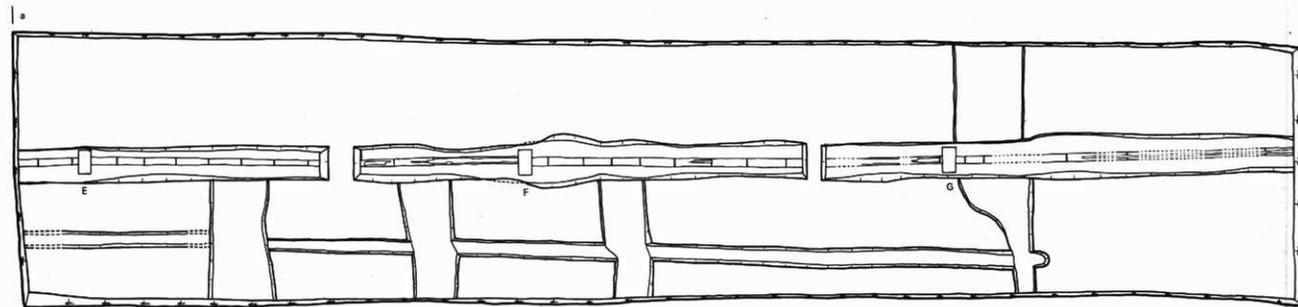
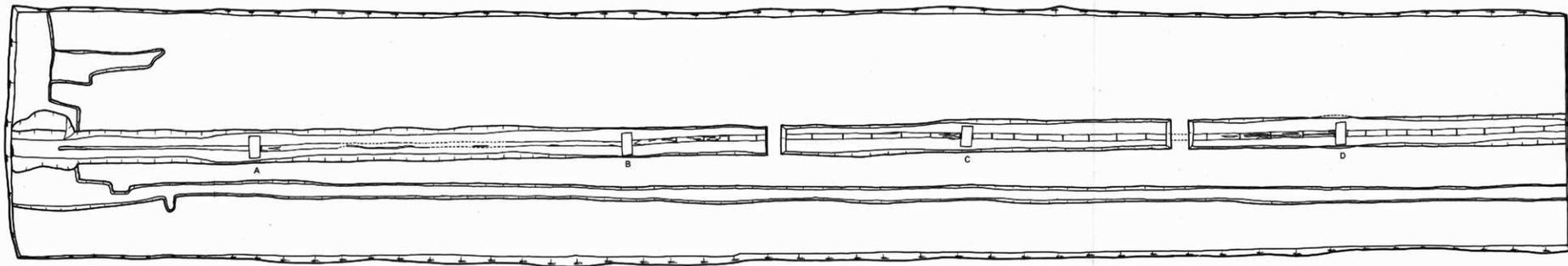


5C-3T

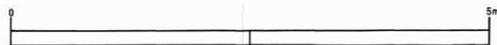


5B-2T

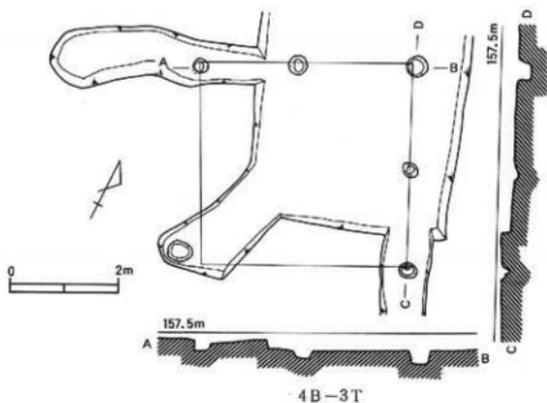
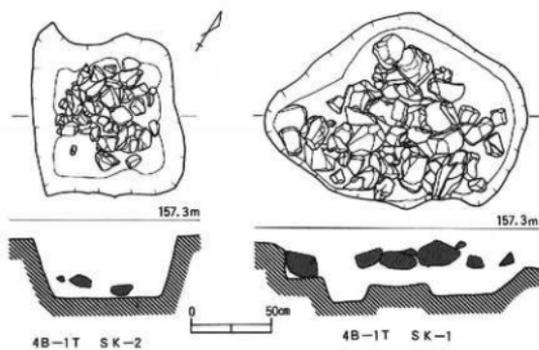
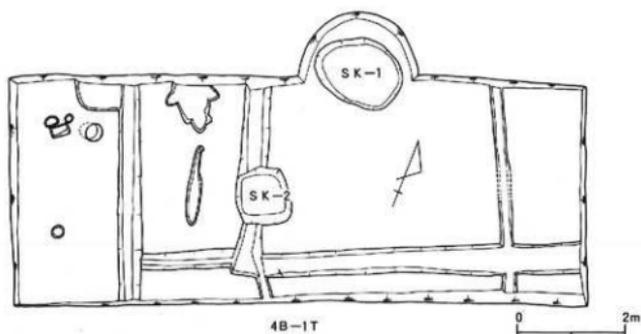
第8圖 5C-3T・5B-2T実測図



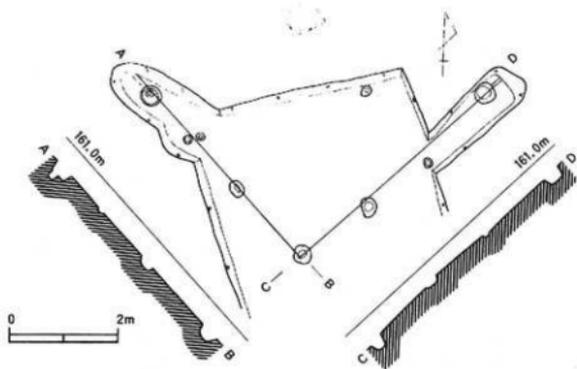
- I 表土
- II 灰黄色砂質土
- III 黒褐色粘質土
- IV 黄色粘土
- V フロク状の黒褐色粘土を含む黄色粘土



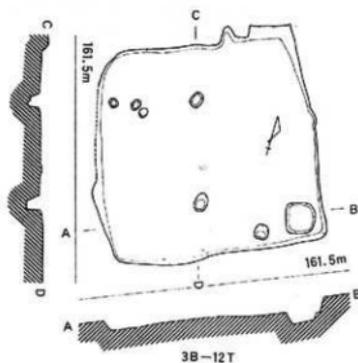
第9図 4C-2T 4C-1T実測図



第10図 4B-1T . 4B-1T SK-1 . 4B-1T SK-2  
4B-3T 実測図



3B-8T



3B-12T

第11図 3B-8T・3B-12T 実測図

表わす次のような墨書があった。

A	廿九の卅迄 卷 <input type="text"/> 尺 (丈)	B	廿八の <input type="text"/> 迄 (山) 卷丈 <input type="text"/> 尺 <input type="text"/>	C	廿七の八迄 卷丈三尺 七寸	D	廿六の七迄 卷丈 <input type="text"/>
E	二拾 <input type="text"/> の六迄 (山) 卷丈五尺	F	二拾四の五迄 (山) 卷丈六尺 <input type="text"/>	G	二拾三の四迄 卷丈四尺 <input type="text"/>		

墨書番号は少なくとも30番まであり、西方に起点がおかれている。道水施設が西方に一直線にのびていると仮定して、升の番号と升間の平均寸法より起点位置を推定すると、推定小御門城内の中央あたりとなる。この道水施設は、升の墨付けや墨書などからかなり計画性をもって埋設されているので、上水道施設と考えられる。両端のA及びGの升のレベル差は約0.8cmでA側の方が低く、東方より水を引いたのであろう。方向はN-55°-Eとなっている。4C-2Tの東方延長線上約27m地点に4C-1Tを設定したところ、升一つを含む約2.5m分の竹管が検出され、道水施設は約62m連続していることが確認できた(第9図)。しかし、さらに約50m延長した地点に設定した4B-2Tでは検出されず、64-1Tの溝と同様、南方に屈曲するものと思われる。

#### (4B区)

4B-1Tでは集石土壇(SK-1・2)が2基検出された(第10図)。SK-1は約1.3m×1.7mの楕円形で、深さは約20~30cmである。土壇内には、こぶし大から人頭大の礫がぎっしり詰まっていた。43の罫鉢が出土した。SK-2は、一辺約90cmの隅丸方形で、深さは約40cmである。礫はこぶし大である。

4B-3Tでは、2間×2間の独立柱建物跡が検出された(第10図)。建物方位は南北列でN-27°-Wをとり東西列約4m、南北列約3.9mの規模である。柱穴掘方は径約30cmである。

#### (3C区)

明確な遺構は検出されなかった。

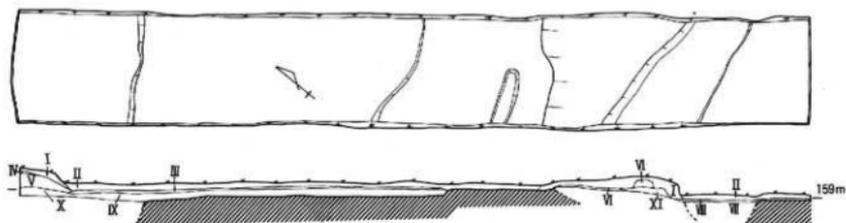
#### (3B区)

3B-8Tでは、2間×2間以上の独立柱建物跡が検出された(第11図)。建物方位は、東側柱列でN-45°-Eである。

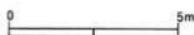
3B-12Tでは、一辺約4mの隅丸方形のプランをもつ堅穴住居跡が検出された(第11図)。床面中央部には径約20cmの範囲で焼土が認められ、炉跡と考えられる。炉跡をはさんで南北方向に、1対の柱穴が確認できた。この柱穴を建物方位とすると、北で西へ約17度振っている。東南隅に一辺約50cmの隅丸方形の土壇があり、貯蔵穴と考えられる。壁溝は確認できなかった。

#### (1-3T) (第12図)

城域西南部の堀跡と推定した水田に設定したトレンチである。しかし、堀推定部分は地表下約20cmで地山となっており、堀跡は認められなかった。ただし、その南北両側に堰状の溝跡が検出された。南側の溝跡は推定地域の外側にあたり、幅約6m、深さ75cm以上であり、北側の溝跡は幅3.8m以上、深さ60cm以上である。



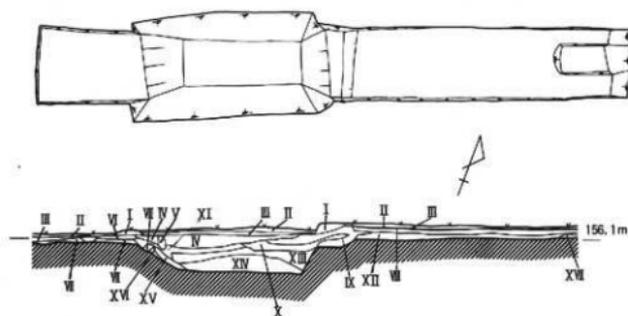
- |        |             |                |             |
|--------|-------------|----------------|-------------|
| I 表土   | IV 礫混り暗黄褐色土 | VII 礫混り暗灰褐色土   | X 暗灰褐色粘質土   |
| II 耕土  | V 暗黄褐色砂質土   | VIII 礫混り暗灰茶褐色土 | XI 暗灰茶褐色粘質土 |
| III 床土 | VI 暗黄褐色粘質土  | IX 淡暗灰褐色粘質土    |             |



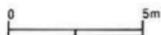
(1-4 T) (第13図)

第12図 1-3 T実測図

城域西部の堀跡推定地に設定したトレンチで、幅約8.1m、深さ約1.8mの堀跡が検出された。東側、すなわち城内側には幅約60cmの犬走り状の平担部が認められた。



- |              |             |
|--------------|-------------|
| I 表土 (あぜ)    | IX 礫        |
| II 耕土        | X 礫混り淡暗黒褐色土 |
| III 床土       | XI 暗黄褐色粘土   |
| IV 淡暗青黄褐色粘質土 | XII 黒褐色粘質土  |
| V 淡暗青黄褐色粘質土  | XIII 暗青灰色砂泥 |
| VI 淡黒褐色粘質土   | XIV 暗青灰色砂泥  |
| VII 淡暗黄褐色粘土  | XV 暗青褐色粘土   |
| VIII 淡茶褐色粘質土 | XVI 青褐色粘土   |
|              | XVII 砂      |

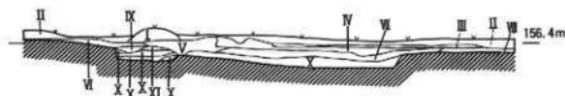
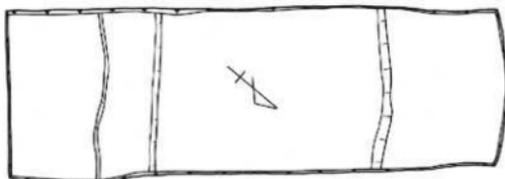


第13図 1-4 T実測図

(1-9 T) (第14図)

このトレンチも推定堀跡部分に設定したもので、幅約7.2m、深さ約35cmの堀跡らしき溝を検出した。しかし、深さが約35cmと、1-4 Tのものと比較してかなり浅いものである。この溝の南端から約1.7m北で深さが約20

cmと浅くなっており、それより南側がまた約35cmと深くになっており、黒褐色粘質土と黒褐色砂質土の互層となり、49～55をはじめとする多数の土器が集中して出土した。



I 表土	VI 暗青灰色粘質土
II 耕土	VII 礫混り黒褐色土
III 床土	VIII 暗黄褐色粘質土
IV 暗茶褐色粘質土	IX 黒褐色粘質土
V 暗黄褐色砂礫	XI 黒褐色砂質土
VI 淡暗茶褐色粘質土	XII 暗青黄褐色粘質土

第14図 1-9 T実測図

## (2) 遺物

小野門城遺跡では、瓦器・土師器・陶器・磁器・黒色土器・須恵器等の土器類のほか、曲物・ゲタ等の木製品が多数出土している。大半が64-1 T及び1-9 Tから出土したもので、それ以外では、遺構に伴うものは少ない。そして、ほとんどの遺物が中世以降のものである。

### 1) 瓦器 (12・14・19・23・25・31・37・49)

ほとんどが甕で、皿・小壺・鍋・羽釜・火舎も若干出土している。甕 (12・13・24・25) は、口径15cm前後、器高5cm前後の法量をもち、器高指数は31～33となる。口縁部はわずかに内弯しながら立ち上がり、端部内面には一条の沈線が施される。体部内面の暗文は荒く粗雑であり、見込み部では2～3回程度のラセン状になっている。外面には暗文が認められず、指頭圧痕が顕著に認められる。高台は貼付けで断面は三角形を呈している。高台としての機能を果たしていないものがある。胎土は灰白色で、焼成は良好である。白石編年による7型式に相当する。<sup>(注8)</sup> 皿 (23・49) は口径9～9.5cm、器高約2cmの法量である。内面の暗文は、太く、ジグザグ状に荒く施されている。口縁部外面は横ナゲ調整で、底部は指頭圧痕が残る。小壺 (37) は、口径9.5cm、器高3.2cmを測る。高台は断面三角形であるが、比較的しっかりしている。暗文は粗雑であるが、口縁部外面にも認められる。19は鍋で、体部は内弯し、口縁部は「く」の字状に屈曲して受け口状を呈する。体部はおそらく球形であろう。体部

外面に、指頭圧痕が残る。31の羽釜は、口縁部が直立し、端部に面をもつ。鈔は約2cmを測る。14は火舎である。外面は丁寧なヘラミガキがされ、内面上半はハケ、下半はナデ調整されている。

#### 2) 土師器(4・5・9~11・16~18・20・21・33・34・38・41・42・45・53~55)

出土したのは皿と羽釜が大半で、皿には大小2種類が認められる。小皿(16~18・33・38・53・54)は口径8~9cm、器高1~2.5cmのものである。口縁部は内弯して、端部は丸くおさまる。調整は横ナデであるが、底部外面に指頭圧痕を残すものがある。18では、口縁部に粘土継ぎ目が認められる。大皿(10・11・34・42・55)は口径12~14cmのものである。総体的に焼成が不良であるため、調整が不明瞭である。10では、口縁部外面を強く横ナデするため、外弯気味になっている。羽釜(4・5・9・20・21)にも口径が16cm前後のもの、25cmを越えるものの大小2種類がある。調整は総じて外面横ナデ、内面ハケである。5は内面も横ナデ調整されている。鈔は貼付けで約1cmのかなり狭いものである。41は半球形の埴である。45は口径27.2cmの焙烙である。

#### 3) 陶器(1~3・6~8・15・26・28~30・32・35・36・40・43・46・56)

甕(2・3・15・28・36)・権鉢(7・8・26・29・30・43・46・56)・焙烙(35)等の出土が見られる。2は「N」字状口縁の退化したもので、口縁端部下方が肥厚する。信楽産。3・36は口縁部でほぼ直角に屈曲して立ち上がるものである。15は口縁部が頸部より直立し、外弯しつつ尖り気味になる。28は「N」字状口縁をもつもので、口縁部が垂下している。7・8は常滑産のこね鉢である。高台は径約14cmを測る貼付けである。高台には2形態がある。体部下半はヘラ削りされている。胎土は灰白色を呈し、堅緻である。26・29・30・46・56は信楽産で、体部内面に4~5条単位の描目をつける。色調は赤褐色ないし乳褐色を呈す。43も信楽産で、一条痕の片口権鉢である。35の焙烙は、口径30cmのものである。体部の調整は、外面が横方向のヘラ削りで、内面はハケである。1・6は瀬戸美濃系の灰釉陶器である。32は瀬戸系。40は灰釉系山茶碗である。

#### 4) 磁器(22・27・39・47・48・51・52)

27は白磁皿で、淡緑白色の釉がかけられる。見込み部に帯描文が施される。底部外面は釉がカキ取られ、高台状に残る。また、底部外面には墨書が認められる。横田・森田編年のⅢ類に相当する<sup>(註9)</sup>。51・52は白磁碗で、口縁部に玉縁を有するものである。釉は淡青灰白色に発色する。体部外面下半は露胎である。Ⅵ類に相当。22は南方青磁で、緑灰色の釉がかけられる。見込み部には放射状のヘラ描き文様がある。39は体部外面に片切り形の蓮弁をもつ青磁である。釉は淡緑灰色に発色する。47・48は外面に退化した雷文を施す青磁である。釉は淡緑灰色である。

#### 5) その他の土器類(44・50)

44は須恵器坏蓋で、口径12.6cmを測る。50は黒色土器碗の底部である。高台は径5.5cmで、断面は三角形を呈する。見込み部のヘラミガキは比較的密である。

#### 6) 木製品

ゲタ(図版24-57)は、現存長約17.5cm、幅約7.5cmの小型のものである。3ヶ所に鼻緒穴があげられており、つま先の一ヶ所は中央にある。歯は2枚である。

曲物(図版24-58)は楕円形に弯曲しており、長径約17.5cm、短径約13.5cm、高さ約6cmを測る。側板は、厚さ0.3~0.4cmで、内側に曲げやすくするために、約2.5cm間隔で刃物の切り目が入れている。側板は二重に巻かれている。とじ目は縦に2ヶ所あり、板の樹皮でとじられる。とじ目に対応する反対位置の中央には、径約0.6cmの穴がかけられる。底板は欠損している。

#### 4、ま と め

調査を実施した面積は約4400㎡であるが、小規模なトレンチ調査であったため、断片的にしか資料を得られなかった。数少ない資料より今回の調査をまとめてみることにする。

直接小御門城跡に関連すると思われる遺構は、1-3T・1-4T・1-9Tで検出された堀や溝である。1-4Tは、堀の幅や深さを確認するために設定したトレンチであるため、1-3Tや1-9Tとの関連は今一つ明確でない。1-3T・1-9Tで検出できた堀と思われる溝は、1-4Tのものと比較するとかなり浅いため、1-4Tと連続する堀とするには少し疑問が残る。ただし、堀や溝から出土した土器はいずれも同時代で、平安時代末～鎌倉時代初頭のものである。したがって、小御門城跡はこの時期に築城されたことが判明した。これら以外に、64-1Tでも同時期の溝が検出されている。この溝は、城内と想定される区域の東端から延びるもので、城と関連がある可能性が大である。城の外郭施設を区切る溝であるかもしれない。これらの堀や溝以外には、堀立柱建物跡や竪穴住居跡が数棟確認された。遺物の出土がないものが多く、年代の判明するものは限られている。年代の判明したものは、前述の堀や溝と同時期の所産であり、小御門城跡の周辺には集落ができていたことが判明した。

ただ1棟、3B-12Tで検出された竪穴住居跡は、調査区域の東端出雲川沿岸に位置する。時期は古墳時代前前期であり、対岸の内池遺跡との関連がうかがわれる。

4C-1T・4C-2Tで検出された上水道施設は墨書の書体等から、江戸時代末期に埋設されたと思われる。この小御門付近は水の質が非常に悪く、井戸を掘っても鉄分の多い赤褐色の水しか得られない土地である。そのため小御門丘陵からの湧水を求めて、このような上水道施設が考えられたのであろう。この上水道施設の東方起点には、江戸時代の文化文政期に多額の富を築いた岡田家が位置し、岡田家によりこの上水道施設が埋設されたと思われる。

最後に、日野町には蒲生氏に関連した数多くの城郭、または居館が存在するが、今回調査を実施した小御門城跡とそれらとの関連を若干述べることにする。

中世において、日野町は守護佐々木氏の被官である蒲生氏により支配されていた。蒲生氏については、在地の豪族かどうかは不明であるが、『続群書類従蒲生系図』には、蒲生惟賢（俊賢）が平安時代末に初めて蒲生郡に領地を与えられたとあり、また、『信楽院本蒲生系図』には、天養元年（1144）に蒲生惟賢の父惟俊が小谷山へ移るとある。この小谷山は大字小谷の円林寺がある丘陵とされ、円林寺付近が小谷城跡とされている。ただし、現況では土塁・堀等の城跡と考えられるものは認められない。その後の小谷城については不明であるが、南北朝の動乱時に五辻宮守良親王に応じた蒲生俊綱が戦いに敗れ、小谷城が没落したとされている。その後蒲生氏は音羽城へと移り、さらに、中野・貝掛両城へと移っていく。

小御門城は平安時代末から鎌倉時代初頭に築城され、遅くとも安土桃山時代には廃絶していることは、先に述べたとおりである。この小御門城が築城された年代は、あたかも蒲生氏が日野町に小谷城を築いた時と同じである。この両城は1kmも離れておらず、何らかの関連があったと思われる。小谷城は蒲生町から日野町に入る谷口の丘陵上を占め、城郭の軍事的機能面からみれば最適な位置にあることになる。初代蒲生氏が小谷山に移ったのも納得できることである。一方、小御門城は小谷城がある丘陵と出雲川とはさまれた平野部に位置している。また、現在も残る土塁や、調査で確認された堀及び堀と思われる溝からは、小御門城の防衛的機能は充分ではなかったと推定できる。このことから、小御門城は軍事的色彩の強い城ではなく、住まいとしての居館的性格を有するものであろう。これらの事実から小御門城と小谷城との関連を見出すならば、軍事的には小谷城、生活面では小御

門城というように、2つの城は使い分けられていたと考えられよう。ただし、小谷城を小御門城の防衛のためとすれば、西方からの攻撃に対しては有効であるが、東及び南方からは無防備と言える。そこで、出雲川を1つの防衛線として、小御門城にも軍事的要素が備わっていたのかもしれない。<sup>(注10)</sup>このように推定すると、小谷山に城を築いた初代蒲生氏が支配する地域は、小谷・三十坪・小御門付近一帯となる。ただし、両城が同時に蒲生氏により築城されたとすれば、先述の小谷城に移るという記録に小御門城の名も見えるはずである。小御門城は南北朝の動乱期に五辻宮守良親王が滞在したという伝承をもつだけで文献にその名が認められるのは15世紀中頃になってからのことである。従って小御門城は蒲生氏とは無関係であるかもしれない。

以上、わずかな史料から大胆な推測を試みたが、今回調査できなかった小御門城跡の主要部の実態が究明され小御門城と小谷城、ひいては蒲生氏の関係が明確になることを期待する。

- (注1) 『有史以前の近江』『滋賀県史跡調査報告第1冊』 昭3 滋賀県保勝会
- (注2) 滋賀県教育委員会『蒲生郡日野町小御門古墳群調査概要』 1966
- (注3) 『近江蒲生郡志』巻1 大11
- (注4) 近藤滋氏の御教示による。
- (注5) 近藤滋・松沢修『蒲生郡蒲生町・日野町・宮川・間本古蹟跡・大谷古蹟跡調査報告』  
(『滋賀県文化財調査年報50年度』 昭52 滋賀県教育委員会)
- (注6) 前掲(注2)
- (注7) 日野町教育委員会『日野町大谷古墳出土「蔵骨器展」』パンフレット 1974
- (注8) 白石太一郎『いわゆる瓦器に関する二・三の問題——古代末～中世初頭における土器の生産と流通に関する一考察——』(『古代学研究54』 1969)
- (注9) 横田賢次郎・森田勉『太宰府出土の輸入陶磁器について——型式分類と編年を中心として——』  
(『九州歴史資料館研究論集』4 1978 )
- (注10) 竹山増玄氏の御教示による。
- (注11) 『大津瀬田雲住寺過去帳』(『角川日本地名大辞典・25滋賀県』 昭54)

## 第2章 十禪師遺跡

## 1、はじめに

本遺跡は、日野町大字十禅師字蚊屋堂（柏堂）に所在し、周囲の水田より一段高くなった畑地に位置する。このような基壇状の地形と、蚊屋堂屋敷という伝承により、何らかの遺跡があると推定されていた。事実、本遺跡の南側隣接地に国道307号線が計画され、基壇状の畑地の一部が削り取られた際に、井戸や土器が発見されたと聞いている。

今回、当地域が昭和57年度県営ほ場整備事業の対象地域となったため、昭和57年11月から同年12月までの約2ヶ月をかけて発掘調査を実施した。調査は、屋敷跡とされる基壇状畑地の、北半部分を排水路が横断し、畑地のすべてが削平されるため、排水路部分と畑地を対象とした。排水路部分については、幅約3m、総延長約200mのトレンチを一直線に設定した。また、畑地部分については、幅約3m、長さ約8～30mのトレンチを縦横に設定し、遺構の広がりに応じてトレンチを拡張した。

調査方法としては、バックホーにより耕作土、堆積土を遺構面まで掘削した後、手作業で遺構を検出した。調査を実施した面積は約1,900㎡であるが、細長い帯状のトレンチであるため、遺構の広がりを十分に追求することはできなかった。

本調査は滋賀県教育委員会文化財保護課主査近藤滋氏の指導をうけ、日野町教育委員会技師日永伊久男が担当した。

現地調査及び整理にあたっては、以下の諸氏の協力を得た。

足立泰子・植田由美子・内田信夫・奥村ふみ子・木山武生・木村由美・熊捕恵美子・谷一志・谷口操  
福原みゆき・瀧田紀登美・山田宏美（敬称略）

また、地元十禅師の方々には数多くの協力をしていただいた。

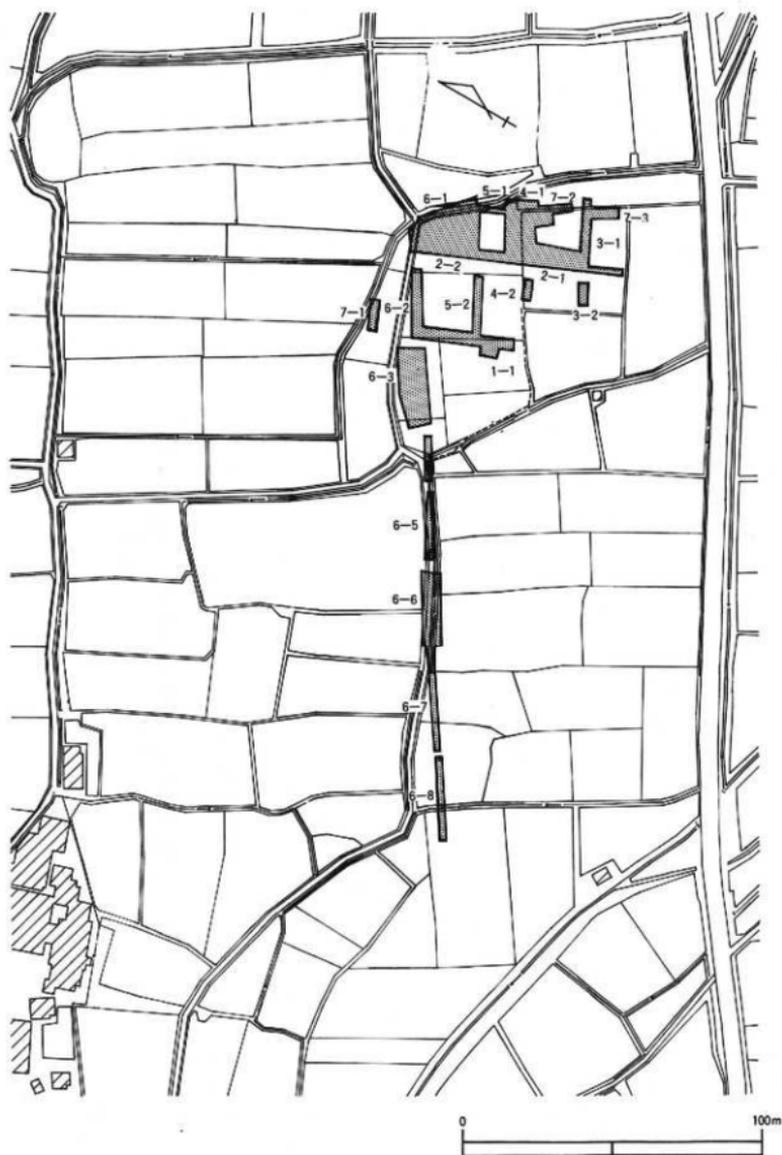
本章の執筆は日永があたり、遺物の実測・図面の整理等は熊捕・奥村・瀧田があたった。遺物写真については中島写真店の協力を得た。

## 2、位置と環境

鈴鹿山系の一高峰である縮向山に源を発する日野川により開析された日野町中央部の沖積平野は、近江八幡市・八日市市・蒲生町から続く、湖東平野の最奥部となっている。この平野部は、ともに鈴鹿山系より北西方向に派生する支丘である桜谷丘陵と水口丘陵にはさまれており、南側の水口丘陵の北縁に沿うように蛇行しながら北西流する日野川と、その支流である出雲川により形成されたものである。日野川流域は河岸段丘となっており、本遺跡はその段丘上に位置する。

次に、付近の歴史的環境をみでみる。桜谷丘陵の南縁出雲川流域には、縄文時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡である内池遺跡<sup>(注1)</sup>、古墳時代の小御門古墳群<sup>(注2)</sup>、鎌倉時代の小御門城遺跡<sup>(注3)</sup>が所在する。本遺跡は、上記の出雲川流域の遺跡群と同一の平野部の南端に位置する。しかし、この付近には弥生時代以前の遺跡は確認されておらず、生活の痕跡が認められるのは、古墳時代になってからである。本遺跡より東方500mのところに狐塚遺跡がある。この遺跡は須恵器が出土する墳丘状の高まりをさし、「狐塚」という小字名により命名された。そして、そのさらに約500m東方にも前方後門墳状の日枝社遺跡があり、円筒埴輪片が採集されている。この日枝社遺跡は、舌状丘陵の先端部に位置する独立丘陵であり、ここからは日野の平野部を一望できる。平野部一帯を支配していた首長墓の可能性が大である。また、本遺跡の北西約1kmには、古墳時代の須恵器の散布地（猫田遺跡）があり、古墳時代に集落が形成されていたことを想像するのは、そう難しくはないであろう。





第2図 トレンチ配置図

奈良時代以降の年代の判明している遺跡はないが、本遺跡と日野川をはさんだ対岸丘陵上には、須恵器窯の別所遺跡、中世と思われる屋敷跡（木津遺跡）や寺院跡（成願寺遺跡）が点在する。また、本遺跡と国道307号線を隔てた水田がほ場整備された時に、奈良時代から鎌倉時代にかけての遺物が多数採集されている。このことから、本遺跡はこの水田と一続きとなる古代末から中世にかけての集落跡であろうと推定される。

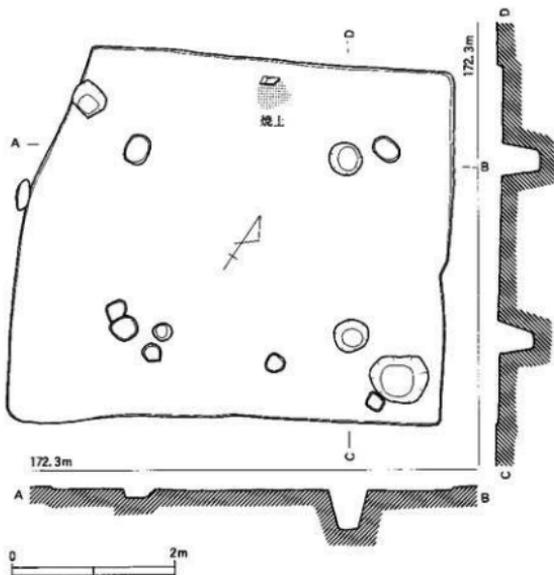
以上の他、本遺跡に西接する式内社比叡佐神社も、この地域の古代を考える上で重要な位置を占めるであろう。

### 3、調査結果

#### (1) 遺構

##### (1-1 T) (第3図)

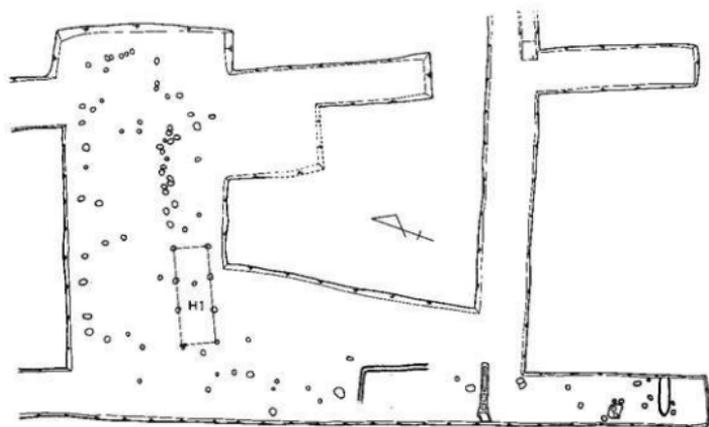
地表下約0.8mの深さで、黄褐色砂質土上に竪穴住居跡（T1）が検出された。プランは約4.4m×5.4mの隅丸方形である。柱穴は径40cm前後、深さ45cm前後である。東のコーナーに約60cm×70cmの貯蔵穴がある。炉、カマド等は確認できなかったが、床面より上層で焼土が認められた。



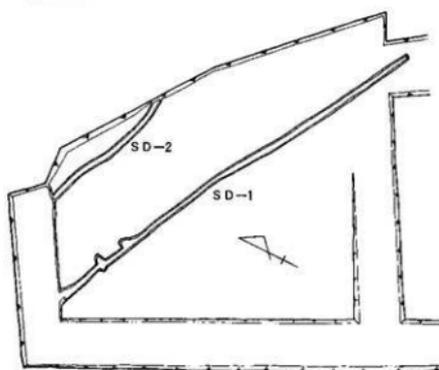
第3図 1-1 T・T1実測図

##### (4-1 T) (第4図)

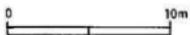
1-1 T同様、黄褐色砂質土上に数多くのピットが検出された。いずれも径約30~40cmの大きさのものである。建物配置をとるものは1棟（H1）だけで、1間×3間の規模である。北で東に約55度振る東西棟である。



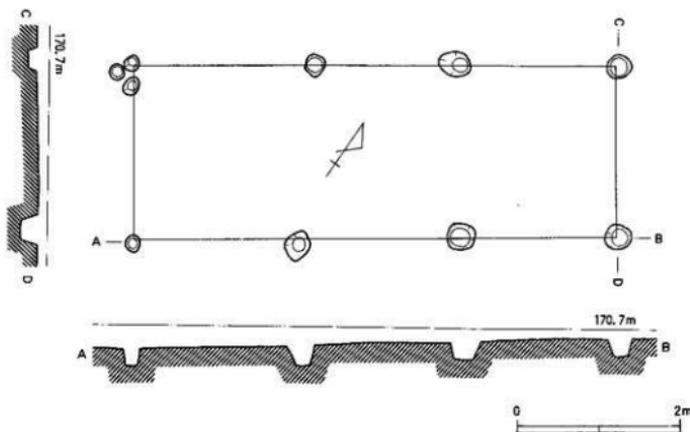
4-1T



6-1T



第4图 4-1T·6-1T 大测图



第5図 4-1 T・H1実測図

〈6-1 T〉 (第4図)

地表下約0.4mの礫混り黒褐色粘質土上に、平行して南東より北西方向に向う溝が2条確認された(SD-1 SD-2)。SD-1は幅約40cm、深さ約10~40cmである。SD-2は幅約50cm、深さ約10cmである。埋土はいずれも黒褐色土の単純層である。1~6の須恵器が出土している。

〈6-3 T〉 (第6図)

溝状遺構とピットが検出された。遺構の上層は遺物包含層となっている。7~10の土師器が出土する。

〈6-4 T、6-5 T〉 (第6図)

数条の溝や土坑、ピット等が検出された。

〈6-6 T〉 (第6図)

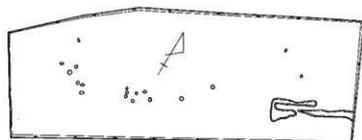
土坑6基(SK-1~6)・溝14条(SD-1~14)及び多数のピットが検出された。ピットはいずれも明確な建物配置をとるものではない。ピット47より12、ピット53(第7図)より13が出土している。

SK-1 検出されたのは一部で、全体像は不明であるが、約4.2m×2.5m以上の規模である。深さは約50cmで、埋土は上層より淡灰茶褐色粘質土(I層)、青灰褐色粘質土(II層)、黒褐色粘質土(III層)、となっている。この土坑は土器溜りとなっており、I層より19が、III層より16~18が出土した。

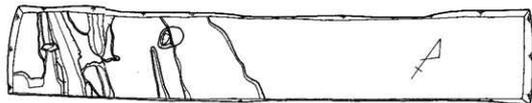
SK-5 径約2mの円形のもので、井戸跡かと思われたが、深さが約45cmしかなく井戸枠等も認められなかったので、一応土坑とした。埋土は大きく分けて3層で上層より、暗茶褐色土(I層)、暗灰褐色土(II層)、灰褐色土(III層)、となっている。I層より14、III層より15が出土した。

SD-1 SK-1をとりまく状態で、L字状に屈曲している。幅は約30cmである。

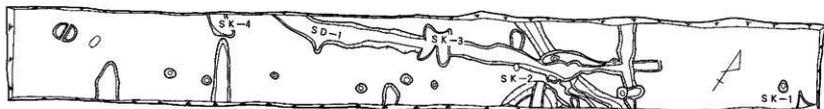
SD-2~4 ほぼ東西方向で3条が互いに切合い関係となっており、SD-3が最も新しいものである。



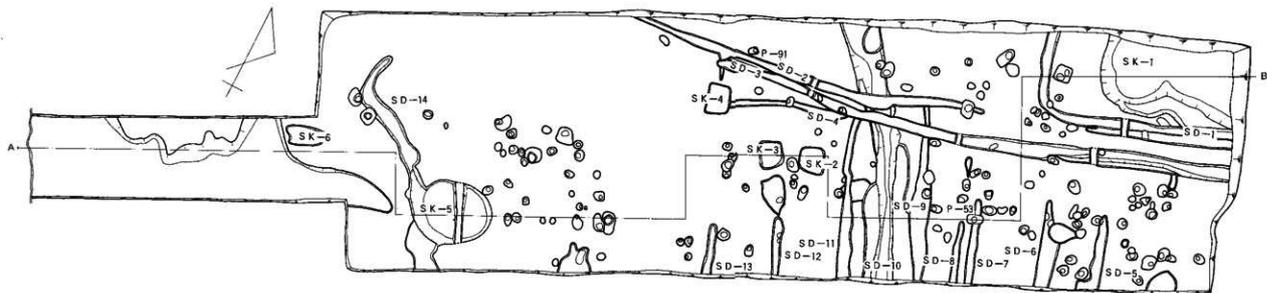
6-3T



6-4T



6-5T



6-6T

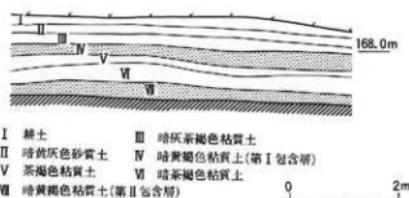
169.0m

A

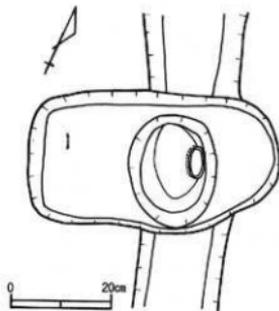
B

第6图 6-3T·6-4T·6-5T·6-6T实测图





第8図 6-7 T土層図



第9図 6-6 T・ピット53実測図

SD-5~13 SD-2~4と交叉する方向の溝で、SD-9~11は互いに切合い、かつSD-2~4とも切合っている。切合い関係から、前者は後者より古く、前者の中ではSD-10が最も新しい。SD-10より11が出土している。

(6-7 T) 遺構は全くなかったが、2層の遺物包含層が認められた(第8図)。地表から地山までは約0.5mあり、第I包含層は約50cmの深さで約20cmの堆積が、第II包含層は約1.2mの深さで約25cmの堆積がそれぞれ認められた。ともに暗黄褐色粘質土である。包含される遺物より、東側の6-6 Tからの流出と思われる。第I包含層からは20・21、第II包含層からは22~27がそれぞれ出土した。

## (2) 遺物

出土した遺物は比較的少なく、6-6 T及び6-7 Tに集中している。器種は土師器・瓦器・磁器・黒色土器須恵器等である。年代的には古墳時代から鎌倉時代にかけてのものであるが、古墳時代のものは図示できなかった。

### 1) 土師器 (7~10・16・17・19・22)

皿(7~10・16・22)、足釜(17)、羽釜(19)の出土をみた。7~9・22は口径8cm前後の小皿で、口縁部は内湾して端部を丸くおさめる。内面から口縁部外面にかけて横ナデ調整をする。底部外面は未調整のようである。10・16は口径約13cmを測る大型のものである。調整等は小皿と同様である。17の足釜は三方に足をもつもので、内傾する口縁部直下に約1cmの非常に狭い鈎をもつ。調整は、内外面とも磨滅が著しいため不明である。口径11.7cmを測る。19は球形の体部をもつ羽釜である。内傾する口縁部と約1cmの狭い鈎をもつ。調整は、口縁部外面から鈎にかけての横ナデを除くと、内外面とも横方向のハケである。

### 2) 瓦器 (14・18・24~27)

埴(25~27)、皿(24)、小埴(14)、羽釜(18)がある。埴は口径14.5cm前後、器高約4.3cmで、器高指数は30となる。口縁部内側に沈線をもつ。内面の暗文は荒く、見込み部は3~4回程度のラセン状のものが難に施されている。外面は口縁部が横ナデで体部には指頭圧痕を残す。高台は断面三角形の貼付けで、高台としての機能を果たしていないものがある。作りは全体的に粗雑でひずみが著しい。24の皿は口径8.9cm、器高1.5cmである。暗文はジグザグ状である。14の小埴は口径10.6cm、器高4.3cmの法量をもつ。暗文や調整の様子は埴と同様であるが見込み部の暗文はジグザグ状となる。羽釜(18)は内湾する体部と内傾する口縁部をもつ。鈎は約1.5cmと狭い。

口径は22.0cmとなる。

### 3黒色土器 (13)

口径15.6cm、器高6.2cmを測る。内湾して立上る口縁部の外面は横ナデ調整される。口縁部内面には1条の沈線があり、内面には比較的密なヘラミガキが認められる。高台は径6.8cmを測り断面は三角形を呈し比較のしっかりしている。内面から口縁部外面が黒色化されるいわゆる黒色土器A類である。

### 4磁器 (11・12・15・21・23)

11は玉縁をもつ白磁境である。釉は淡青灰白色に発色する。口径は17.2cmである。いわゆるⅣ類である。<sup>(注4)</sup> 21は龍泉窯系の青磁境で、淡緑色の釉がかけられる。Ⅰ-4類に相当し、2本の沈線により体部内面を5分割し見込み部にキノコ状の文様を3個片彫りしている。底部は分厚く、外面の底部から高台髷付部にかけて露胎となつて高台は断面四角形を呈する。15・23は見込み部に梅摺文を施す同安窯系青磁皿である。口径は約11cm、器高2cm前後を測る。淡緑灰色の釉がかけられる。

### 5須恵器 (1-6)

坯身は高台のあるもの(3・4)とないもの(1・2)がある。前者は、体部直下に断面四角形を呈する短い高台が貼付けられる。後者は、平坦な底部と外上方に直線的に開く体部をもつ。口径は12.6cm前後、器高は4.5cm前後である。底部には粘土紐巻上げの轆がラセン状に残る。5は坏蓋で欠損しているが、扁平な宝珠形のつまみがつくものであろう。天井部は平坦で、口縁部は段をなして屈曲する。端部は下方を向く。口径は14.8cmとなる。6もつまみをもつ蓋と思われるが、口径が約24cmと大きく、壺などの蓋ではなからうか。内外面とも横ナデ調整される。

## 4、ま と め

今回の調査で、判明した事実をまとめると次のようになる。

1-1Tより、古墳時代の竪穴住居跡がわずかに1棟だけであるが検出されたことにより、当遺跡が立地する日野川により形成された河岸段丘上は、少なくともこの時期には開発されていたことがわかる。北西方向の猫田遺跡も古墳時代の集落と推定できるから、日野川沿岸一帯には集落が形成されていたと思われる。また、前方後円墳かと思われる東方の日枝社遺跡から一望できるこの付近は、日枝社遺跡に葬られた首長が支配していた地域となるであろう。

6-1Tからは、溝(SD-1・2)が検出され、埋土中からは平城宮のSK870出土と同型式で、平城宮Vに相当する須恵器が出土している。<sup>(注5)</sup> 溝以外には建物等の遺構は検出されなかったが、この付近に奈良時代後期の集落の存在を想定できる。

当遺跡の大半を占める平安時代末から鎌倉時代初期の遺構で建物跡は、4-1Tで確認できた堀立柱建物跡が1棟だけである。しかし、ピット群や土坑、溝が多数検出でき数多くの遺物も出土した。したがって、この時期にも比較的大規模な集落が形成されていたはずである。

十禅師遺跡の西方には、平安時代から室町時代にかけて存在した必佐郷の総社であり、式内社でもある比都佐神社が位置する。神社の周囲には当然集落が形成されたであろうし、また、神社所有の荘園に関連する施設もあったであろう。現在のところ、十禅師遺跡との関連は認められないが、今後の調査により両者の関係が明確なることを期待する。

- (注1) 本報告書内池邊跡参照
- (注2) 滋賀県教育委員会「蒲生郡日野町小御門古墳群調査概要」 1966
- (注3) 本報告書小御門城遺跡参照
- (注4) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入陶磁器について……型式分類と編年を中心として……」(『九州歴史資料館研究論集』4 1978 )
- (注5) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ・奈良国立文化財研究所学報・第26冊』 昭57

### 第3章 内池遺跡

## 1、はじめに

本遺跡は日野町大字内池字橋台地先に所在し、以前より縄文時代から弥生時代にかけての遺物が採集されてお  
(注1)  
り、はやくからその存在が知られていた。ところが、昭和56年度県営ほ場整備事業が当地において実施されること  
により、事業に先立って調査が行われた。昭和56年度は、滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会が調  
(注2)  
査にあたり、その続きを昭和57年度に日野町教育委員会が行った。

当初予定では、幅約3m、長さ約120mの排水路敷のみであったが、構構が全面的に検出され、さらに削平さ  
れる水田方向にも広がっていると思われたため、北方の水田も全面的に調査を実施した。調査は昭和57年10月か  
ら翌58年3月までの約6ヶ月を費やし、最終的には約5800㎡と広範囲にわたった。調査方法としては、バックホ  
ー及びブルドーザーにより耕作土・堆積土を排除し、それ以後はすべて手作業によった。

本調査は滋賀県教育委員会文化財保護課主査近藤滋氏の指導をうけ、日野町教育委員会技師日永伊久男が担当  
した。

現地調査及び整理にあたっては、以下の諸氏の協力を得た。

足立泰子・植田由美子・内田信夫・岡 宏・奥村ふみ子・木田武生・木村由美・熊捕恵美子・谷 一志  
谷 徹・谷口 操・中嶋 淳・福原みゆき・満田紀登美・山田宏美 (敬称略)

また、地元内池、小御門、十禅師の方々には大変お世話になった。

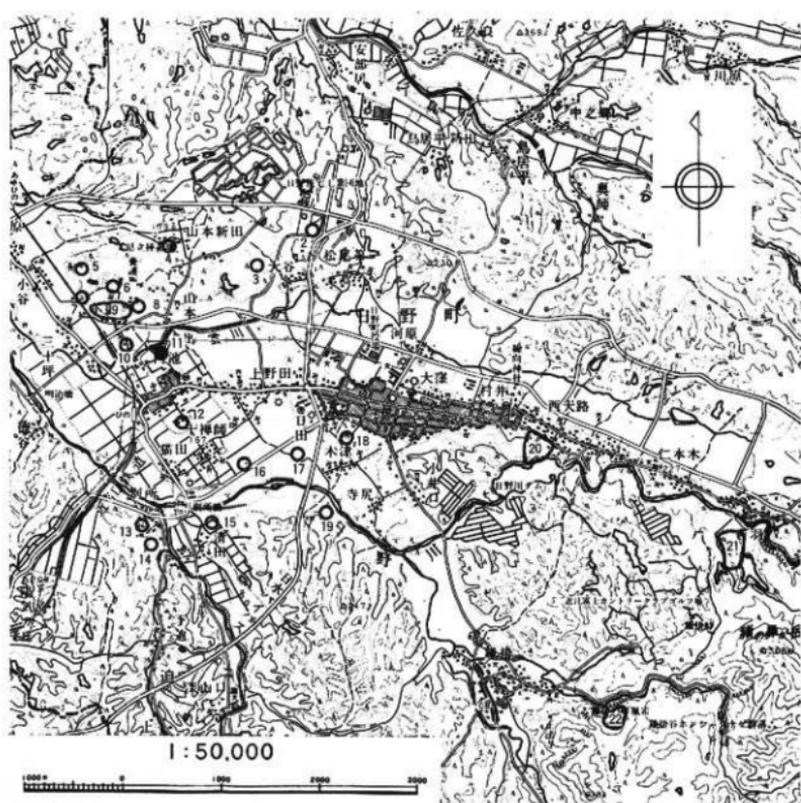
本章の執筆は日永があたり、遺物の実測・図面の整理等は、熊捕・奥村・満田があたった。遺物写真について  
は、中島写真店の協力を得た。

## 2、位置と環境

地形的に見ると、本町は3つの丘陵と2つの谷に大別される。3つの丘陵は、本町の東端を占める鈴鹿山系より  
北西に派生した舌状の丘陵で、北より布引丘陵・桜谷丘陵・水口丘陵と呼ばれる。桜谷丘陵の先端南側からは、  
小御門丘陵と呼ばれる小支丘が派生し微高地となっている。一方、2つの谷は北より桜谷・日野谷と呼ばれ、そ  
れぞれ佐久良川、日野川により形成された沖積平野で、湖東平野へと続いている。日野谷をもう少し詳しく見  
ると、日野川は平野部の南縁すなわち水口丘陵に沿うように流れ、その支流である出雲川が北側の桜谷丘陵に沿  
って流れている。この両河川は、本町の北西端付近で合流し蒲生町を経て琵琶湖へと注いでいる。本遺跡は、この  
合流点より約1.7km上流の出雲川左岸に形成された河岸段丘上に位置し、出雲川をはさんで小御門丘陵と対接し  
ている。したがって本遺跡は、日野川に沿って湖東平野を東進した場合、日野町入り口の平野部を占めることにな  
る。

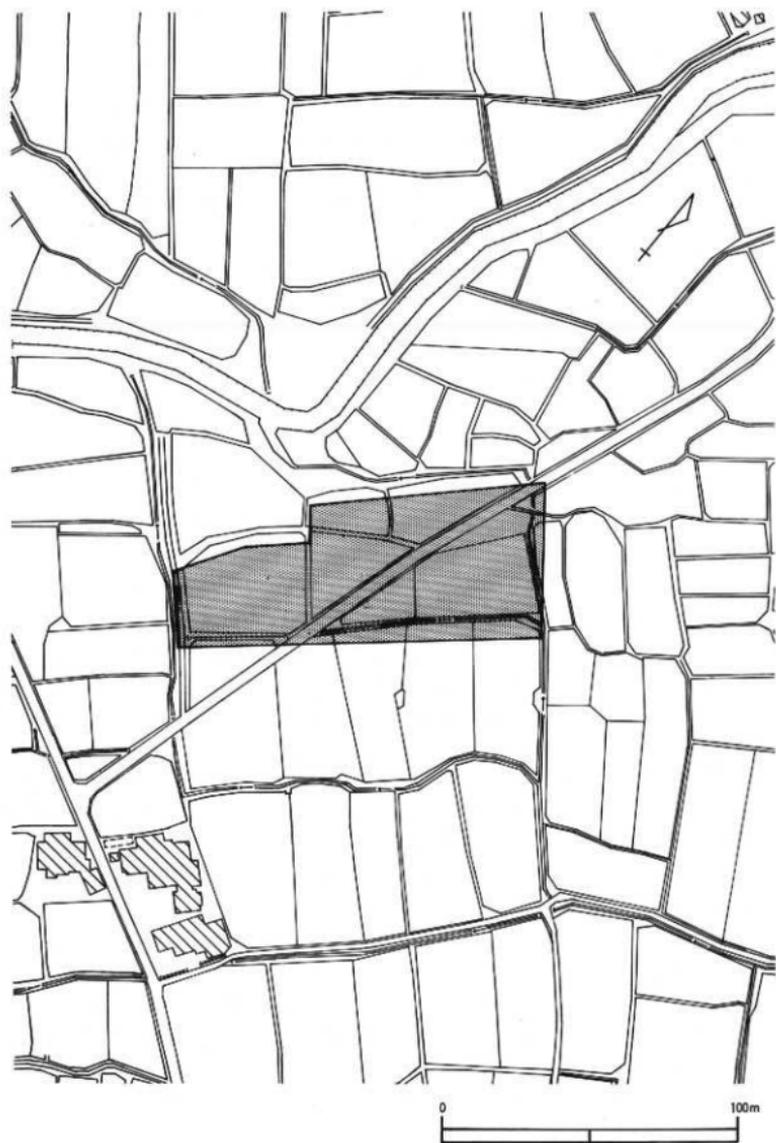
次に、本遺跡をとりまく歴史的環境をみてみる。本遺跡の周辺は、日野町においては比較的遺跡が集中してい  
る地域である。古くは縄文時代早期の土器・石鏃が出土したとされる比部在幼稚園遺跡や、弥生時代中期の園城  
遺跡がある。  
(注3)  
現在は、これらの遺跡を含めて内池遺跡と一括されている。しかし、遺物が採集されただけで、遺  
跡の規模、性格等は不明のままであった。

古墳時代、それも末葉頃になると、出雲川の対岸北方に位置する小御門丘陵上に、群衆墳が形成されるよう  
になる。同丘陵南縁の約800m間には、消失したものも含めて10数基の円墳が存在すると推定されている。昭和40  
年に、滋賀県教育委員会により調査が行われた小御門古墳群では、墳丘直径15m前後、墳丘高約1～2mの円墳  
(注4)  
10基が確認されている。これらの円墳は木棺直葬墓であり、なかには火化施設を伴うものも認められた。また、



- |           |          |
|-----------|----------|
| 1 大谷北遺跡   | 12 猪田遺跡  |
| 2 大谷古墓    | 13 成願寺遺跡 |
| 3 正明寺遺跡   | 14 別所遺跡  |
| 4 月々岡遺跡   | 15 瀧田遺跡  |
| 5 小谷城跡    | 16 十榑師遺跡 |
| 6 小御門A遺跡  | 17 狐塚遺跡  |
| 7 小谷古墳    | 18 日枝社遺跡 |
| 8 小御門C遺跡  | 19 木津遺跡  |
| 9 小御門古墳群  | 20 中野城跡  |
| 10 小御門城遺跡 | 21 菅沼城跡  |
| 11 内池遺跡   | 22 貝掛城跡  |

第1図 遺跡位置図



第2图 調査区域图

すでに破壊されてしまったが、土器や直刀が出土したとされる小谷古墳がある。これら以外にも、大宝神社参道(注5)  
(注6) 跡や、老人ホームさつき荘周辺にも数基の円墳の存在が知られている。(注7)

奈良時代の遺跡で確認されているものは、現在のところ大谷北遺跡のみである。しかし、小御門丘陵上には、(注8)  
月ヶ岡遺跡等須恵器の出土が知られており、今後の調査によりさらに須恵器窯が発見される可能性が高い。

平安時代以降では、古墓及び城郭がある。小御門C遺跡は、前述の小御門古墳群に付随して調査が実施されたも  
ので、鎌倉時代の火葬墳墓が確認されている。また、同一丘陵上に蔵骨器約50点が出土した大谷古墳がある。(注9)  
これは、平安時代末から室町時代中期にかけて営まれた大規模な墓地であり、この付近に同時期の集落の存在が想  
定される。(注10)

城郭については、本報告書にある小御門城跡と、未調査ではあるが小谷城跡があり、その他にも小御門丘陵の  
数箇所(注11)で土塁が確認されている。

以上のように、内池遺跡が所在する地域は、ある時期の断絶があるものの、縄文時代以降生活の痕跡が認めら  
れる。

### 3、調査結果

#### (1) 遺構

##### 1) 方形周溝墓(第4図)

調査区域の中央部付近に5基が密集して検出され、SX-1~5とした。SX-1は独立しているが、他の4  
基は互いに周溝を接した状態である。なお、5基とも主体部は削平されていた。

##### (SX-1)

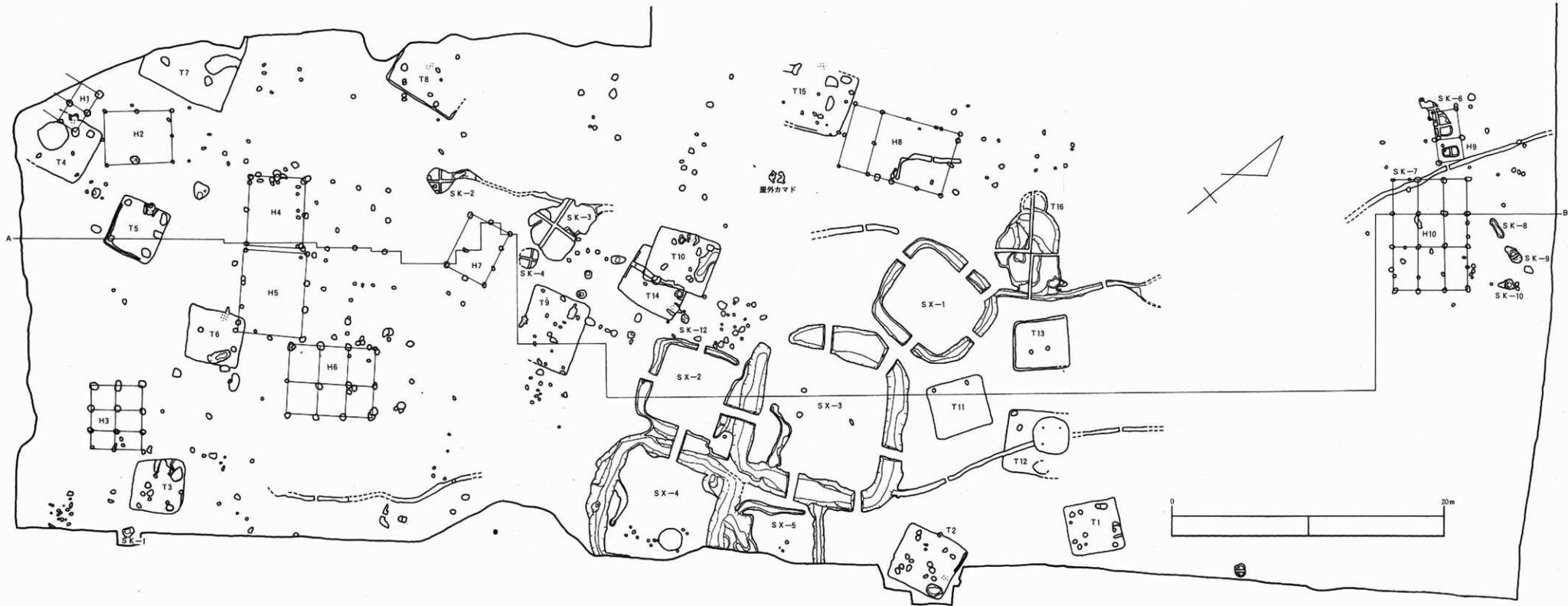
一辺約7.5mの方形周溝墓で、陸橋部はなく完全に周溝がめぐっている。周溝は幅約0.5~1.1mで、深さは約  
0.4~0.6mの規模である。周溝の埋土は、最上層が黒ボク、第2層が茶褐色粘質土で、最下層は暗黄緑色粘質土  
となっている。最下層は地山と類似しており、墳丘の盛土が流入したものと思われる。最下層より1の弥生時代  
中期の土器が出土し、最上層からは古墳時代後期の遺物が出土している。

##### (SX-2)

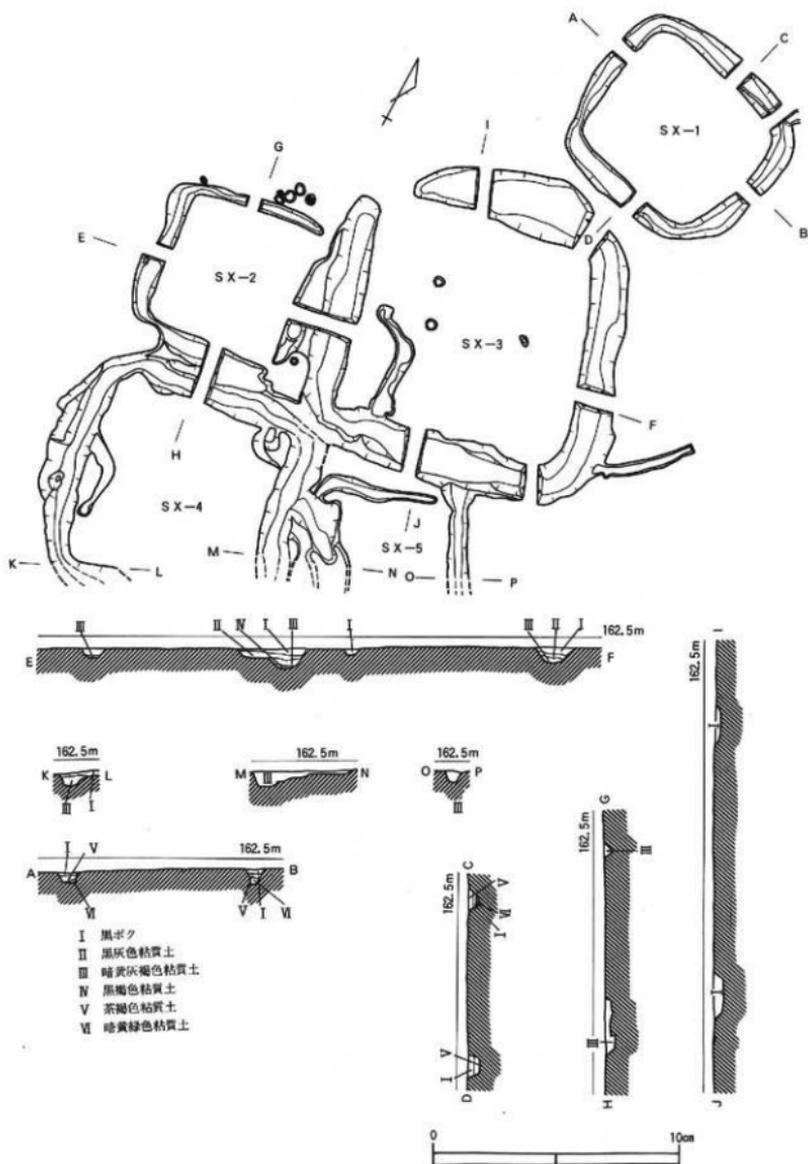
一辺約7.3mの方形で、北東隅に幅約0.5mの陸橋部をもつものである。周溝は幅約0.25~1.2mで、深さ約0.3  
mである。周溝は1層ないし2層の堆積があるが、その状況は場所によって異なる。北辺及び南辺では暗黄灰褐  
色粘質土の単層であるが、東辺は黒ボク・黒灰色粘質土、西辺は黒ボク・暗黄灰褐色粘質土の2層となってい  
る。なお、東辺はSX-3に、南辺はSX-4にそれぞれ接している。暗黄灰褐色粘質土層より、2・4の弥生  
土器壺が出土している。

##### (SX-3)

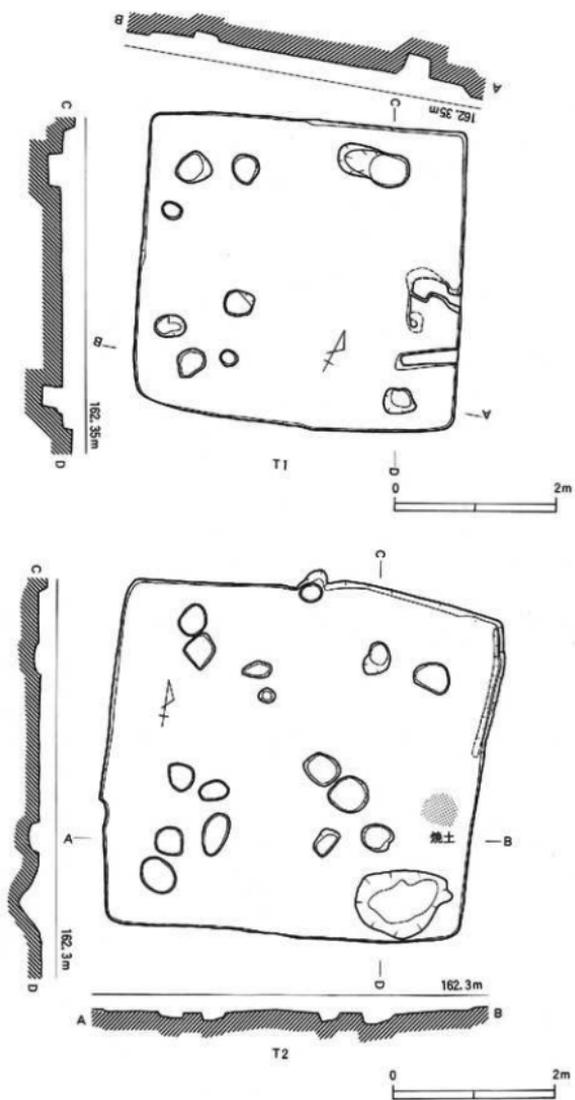
一辺約13mの方形で、検出した5基の中では最大のものである。北西隅に陸橋部を有する。周溝は幅約1.3~  
2.6m、深さ約0.25~0.8mである。周溝の堆積状況は、浅い部分では黒ボクの単層で、深い部分では3層ない  
し4層で、上層より黒ボク(I層)、黒灰色粘質土(II層)、暗黄灰褐色粘質土(III層)、黒褐色粘質土(IV層)となっ  
ている。最下層の黒褐色粘質土の堆積は、西辺、すなわちSX-2と接する部分に認められ、この層はSX-3特  
有である。SX-3は、SX-1を除くすべての方形周溝墓に接する。I層より6、III層より5、IV層より7が



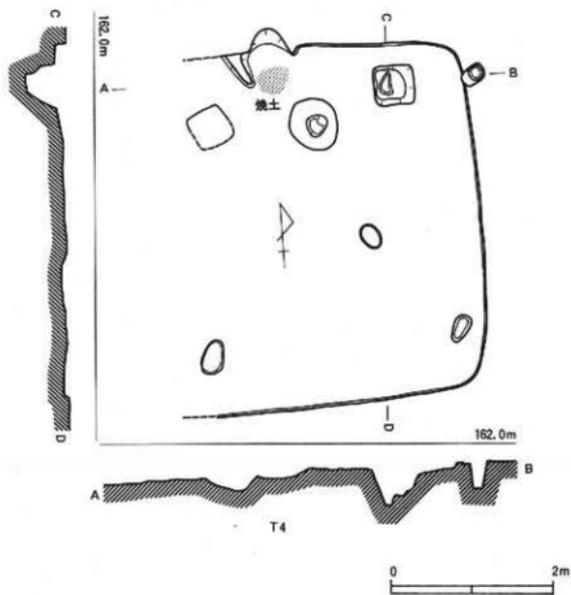
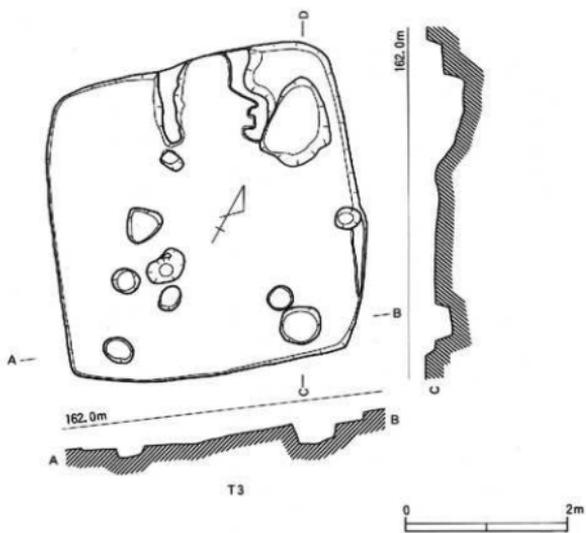
第3図 遺構全体図



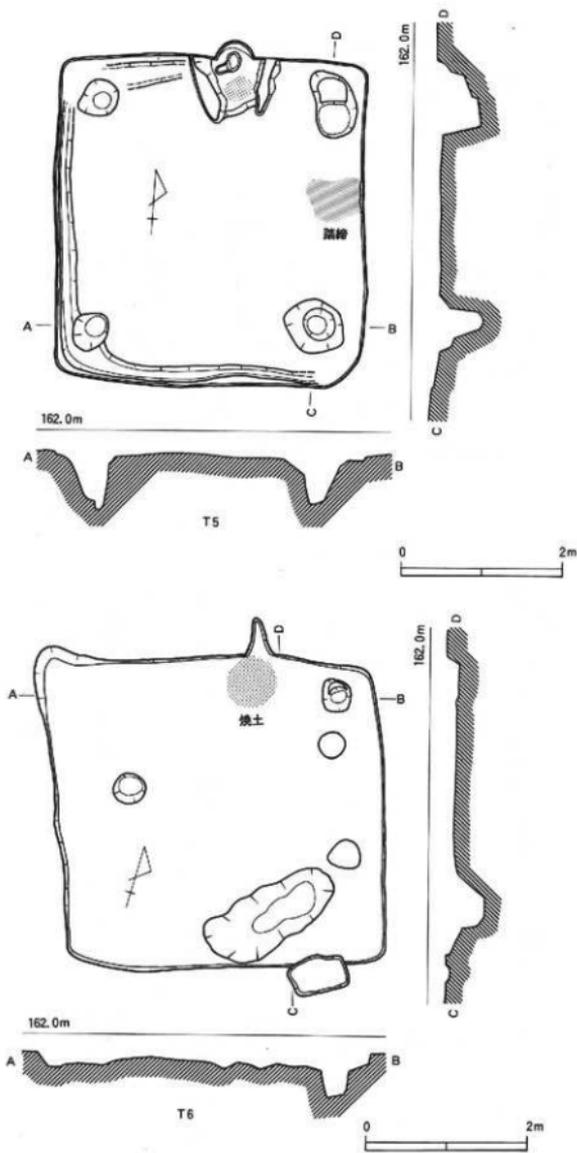
第4図 SX-1~5 実測図



第5図 T1・T2実測図



第6图 T3·T4平面图



第7図 T5・T6実測図

〈SX-4〉

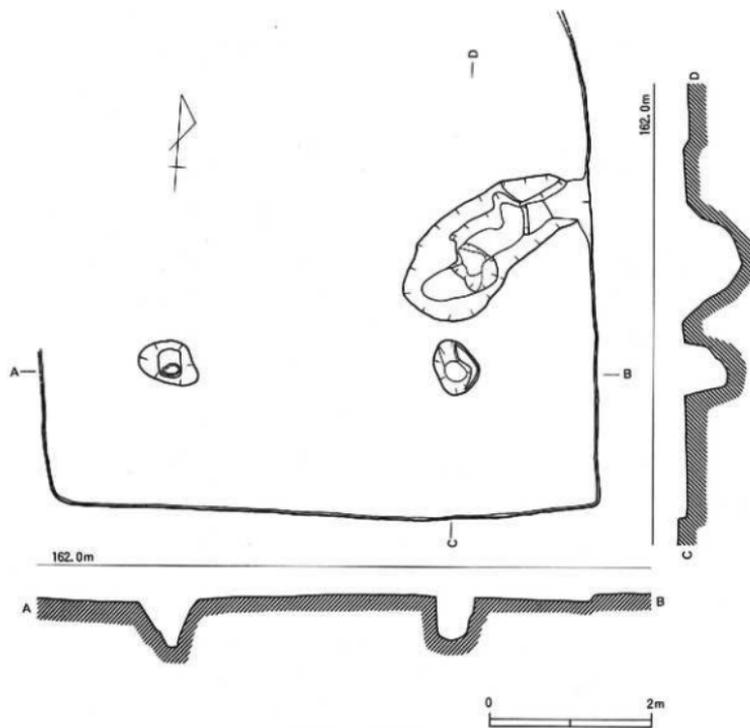
一辺約10mで、南辺部分が未調査となっている。陸橋部は、検出された範囲内では認められない。周溝は幅約0.8～1.8m、深さ0.5m前後の規模を有する。埋土は、暗黄灰褐色粘質土の単純層で、3が出土している。

〈SX-5〉

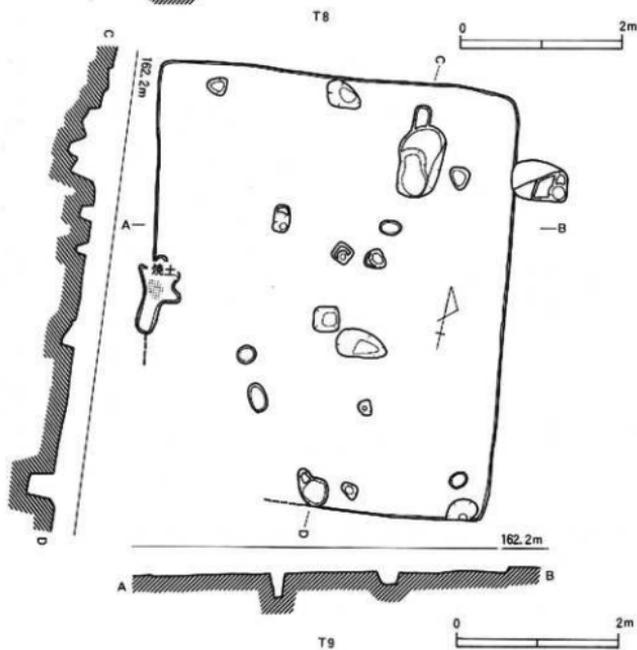
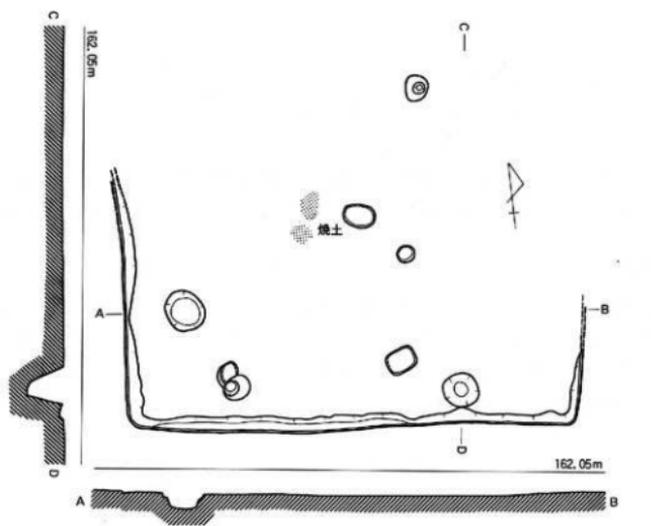
一辺約7mの規模を有するが、南半分は未調査である。陸橋部が北東隅にある。周溝は幅約0.3～0.7mで、深さは約5～50cmと全体的に小規模で、遺存状況はかなり悪い。埋土はすべて暗黄灰褐色粘質土の単純層である。

## 2) 竪穴住居跡

調査区域の東辺を除き、全面的に検出された。総数は16棟で、T1～T16とした。プランは、T16を除くすべてが隅丸方形で、T16は不整形である。時期は、T8及びT9が方形周溝墓と同時期の弥生時代中期で、この2棟以外は、遺物の出土をみないものもあるが、一応古墳時代後期と思われる。16棟の竪穴住居跡は、総じて遺存状況が悪く、壁溝を残すだけのものもある。



第8図 T7実測図



第9图 T8・T9实测图

〈T1〉(第5図)

一辺約4mの規模で、四隅に柱穴がある。壁溝は認められない。北東壁中央部にカマド施設が検出された。両側の壁体下部が「ハ」の字状に遺存しており、遺存状態は比較的良好である。1の須恵器坏蓋が出土している。

〈T2〉(第5図)

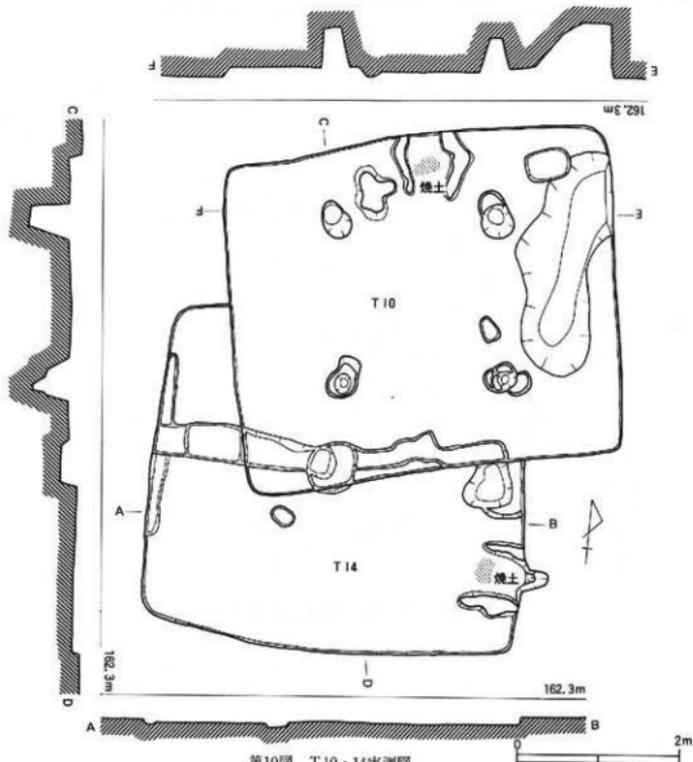
一辺4.5m前後の大きさである。柱穴と思われるものは床面より約0.2mの深さで、かなり浅いものである。東壁中央部に径約0.5mの不整形の焼土があり、カマド跡と思われる。東南隅には約1.2m×0.8mの楕円形の貯蔵穴がある。東壁の北半分には幅約0.1mの壁溝が認められるが、他の部分については検出できなかった。12・13の土師器甕が出土した。

〈T3〉(第6図)

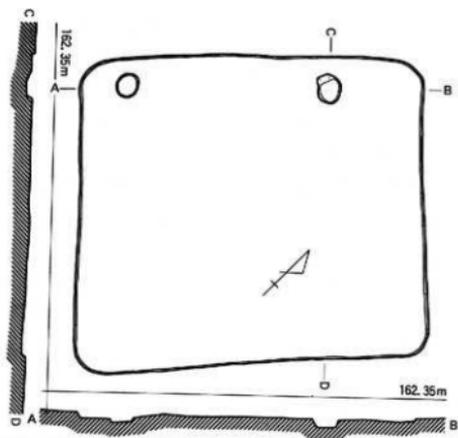
一辺4m別の規模である。柱穴及び壁溝は明確ではない。北西壁中央部にはカマドがあるが、他の住居跡のものと比較すると、床面積の割には大きいものである。カマドの東側には、カマドに接するような状態で1m前後の楕円形の貯蔵穴が作られている。14の土師器甕が出土した。

〈T4〉(第6図)

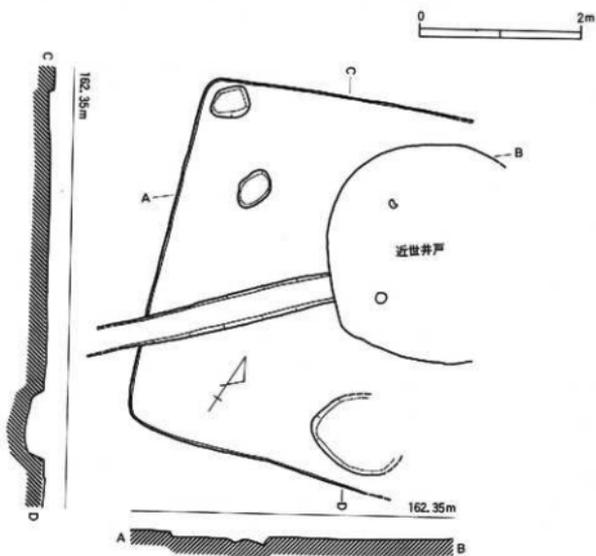
西壁部分が削平のため不明であるが、一辺約4mである。柱穴及び壁溝は明確ではない。カマドが北壁中央部



第10図 T10・14実測図

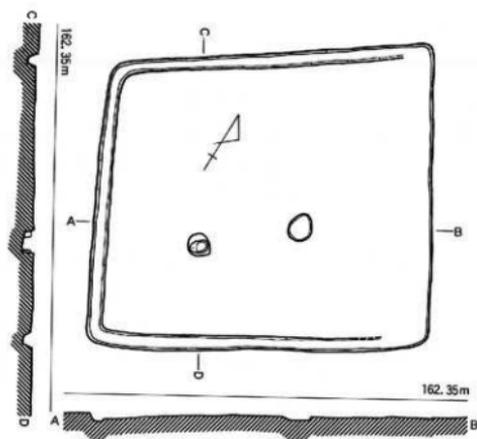


T11

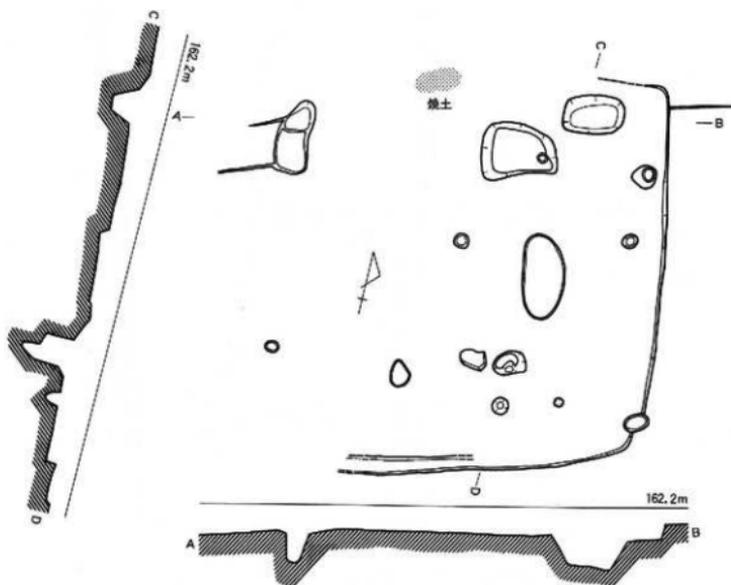


T12

第11図 T11・T12発掘区



T13



T15



第12图 T13·T15发掘区

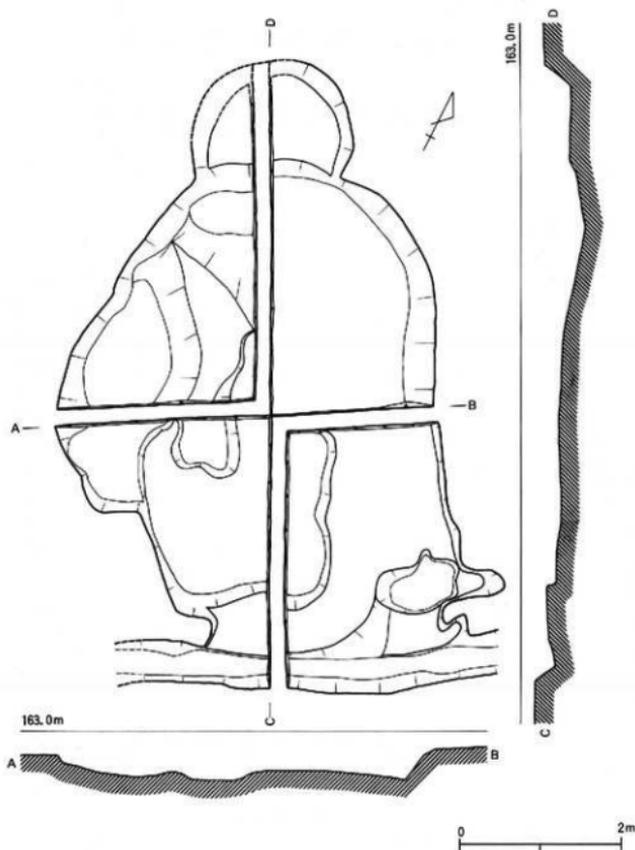
にあるが、遺存状態は良好とは言えない。

〈T5〉(第7図)

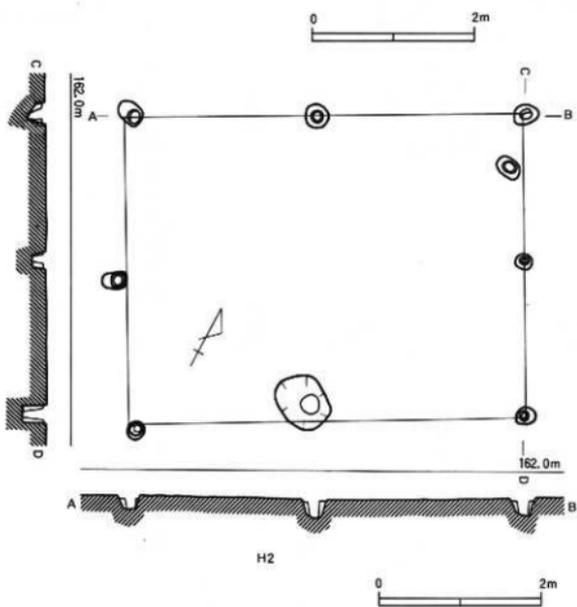
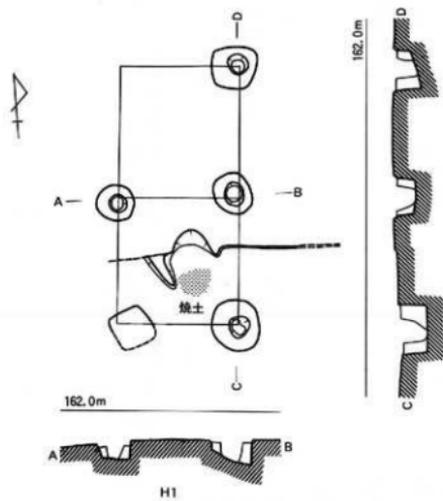
16棟の住居跡の中で柱穴・壁溝・カマドをすべて備えた遺存状態が最も良好なもので、一辺約4mの規模をもつ。柱穴は四隅に存在し、直径約0.5～0.8m、深さ約0.6mである。壁溝は幅約0.2mで、北・南・西の各壁部分に検出された。カマドは北壁中央部で逆「ハ」の字状を呈する。東壁中央部の床面は、約0.5m×0.7mの範囲で凸凹の著しい窪み状になっており、この部分が入口となっていたと思われる。

〈T6〉(第7図)

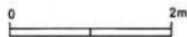
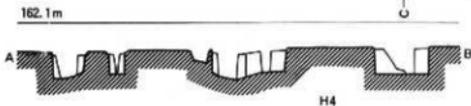
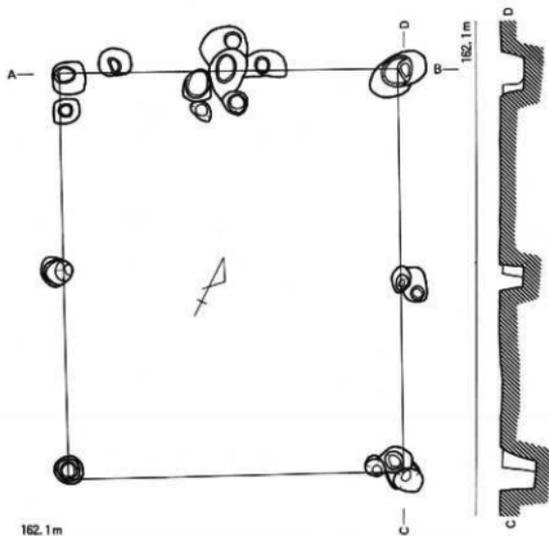
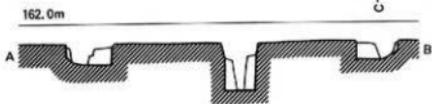
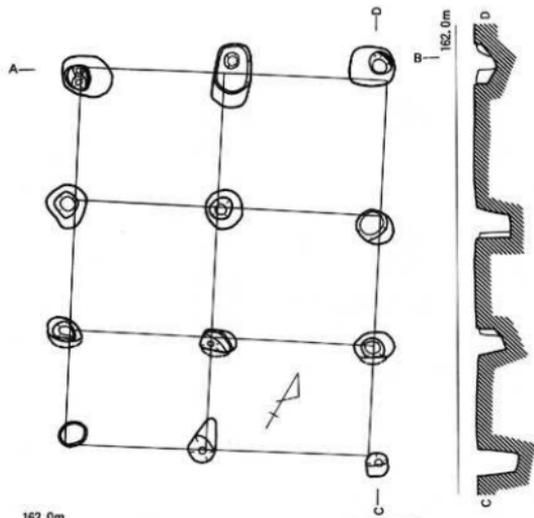
一辺4m前後の方形プランで、北壁中央部にカマド跡と思われる焼土が径約0.6mの範囲で広がっている。ま



第13図 T16実測図



第14图 H1·H2实测图



第15图 H 3 · H 4 实测图

た、この部分より住居跡の外方向に舌状の窪みがあり、煙出しと思われる。柱穴及び壁溝は明確でない。南壁付近には貯蔵穴かと思われる土城が存在する。

〈T7〉(第8図)

北壁部分が不明であるが、一辺約7mと、16棟中最大の規模である。柱穴は南側の2ヶ所が検出され、径0.7m前後、深さ約0.6mである。現況ではカマドは認められず、北壁か西壁付近にあったものと思われる。東壁付近には貯蔵穴かと思われる土城が存在する。15の： 甕器が出土している。

〈T8〉(第9図)

プラン的には南壁及び東西両壁の一部の壁溝が検出されただけであるが、一辺約5.5mと思われる。壁溝は幅0.2m前後で、深さは約5cmである。住居跡内にはいくつかのピットが認められたが、上部構造を支えるような配置をするものではない。床面中央付近には径0.3m程度の焼土が2ヶ所検出された。

〈T9〉(第9図)

東西約4.3m、南北約5.3mの隅丸方形プランである。側壁は最もよく遺存している部分で幅約0.1mである。柱穴は径0.2～0.3mと小規模であるが、4ヶ所認められる。壁溝は精査したが検出されなかった。西壁中央部に焼土が認められる。16が出土している。

〈T10〉(第10図)

約4.7m×4.1mの方形プランである。柱穴は径約0.4mで、深さ約0.5mのものが4ヶ所に存在する。カマドは北壁中央部に設けられている。その西側には約1mの不整形の台状の高まりがあり、カマドに付随する何らかの施設かと思われる。

〈T11〉(第11図)

一辺4m前後の方形プランであるが、地山と床面とのレベル差は5cmしかなく、遺存状態は不良である。柱穴・壁溝・カマド等は不明である。

〈T12〉(第11図)

東辺が後世の擾乱等のため不明であるが、一辺約4.5mを測る。壁溝・柱穴・カマド等は不明であるが、南東隅に径1.2m前後の楕円形の貯蔵穴が認められる。

〈T13〉(第12図)

一辺4m前後の規模をもつものである。壁溝は北西・南西・南東の3壁に認められ、幅は約0.2m、深さは約0.1m不足である。柱穴・カマド等は不明である。

〈T14〉(第10図)

T10に切られているが、一辺約4.5m前後の規模であることがわかる。カマドは東壁の南よりにあり、「ハ」の字状に壁体が遺存し、煙出しも認められる。柱穴や壁溝は明確でない。18の須恵器が出土した。

〈T15〉(第12図)

東壁と北壁及び南壁の一部が検出されただけであるが、一辺約4.5mのプランと思われる。北壁中央部に焼土が認められた。柱穴は北側の2ヶ所で確認できたが、他の2ヶ所は不明である。壁溝は南壁中央部に部分的に認められた。貯蔵穴は北壁中央よりに存在する。17・19が出土している。

〈T16〉(第13図)

約6m×4.5mの規模をもつ不整形円形のプランで、当初土城と考えられたが、カマド状の施設を備えているので竪穴住居跡とした。カマド状遺構は約0.6m×1.0mの不整形円形プランの土城状となっており、埋土には

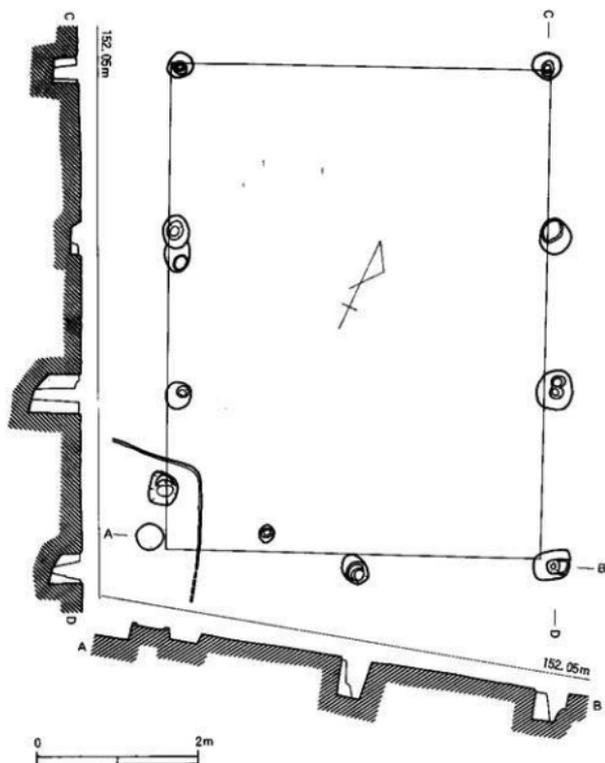
多量の炭が検出された。また、煙出しと思われる舌状の掘り込みが外部に向かって延びている。柱穴等は確認できなかった。20の土師器が出土している。

### 3) 掘立柱建物跡

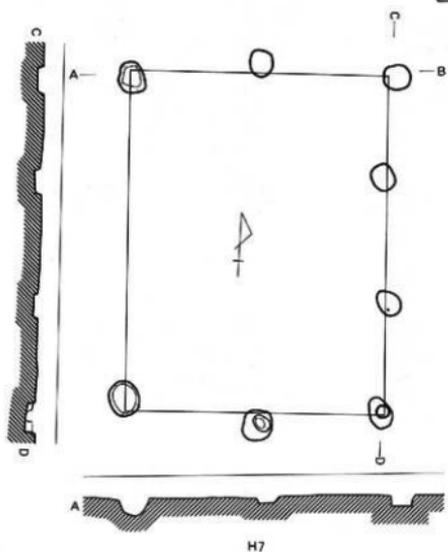
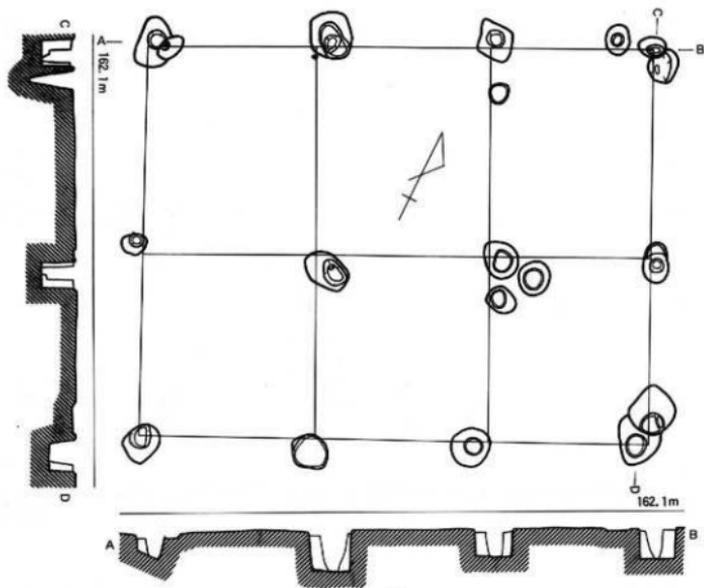
調査区域の全面で検出されたが、西半部分に集中する傾向がある。建物跡は合計10棟確認され(H1~H10)、そのうち4棟が総柱建物で倉庫と思われる。規模は1間×2間を最小とし、2間×4間を最大とするが、大半のものは2間×2間もしくは2間×3間である。

#### (H1) (第14図)

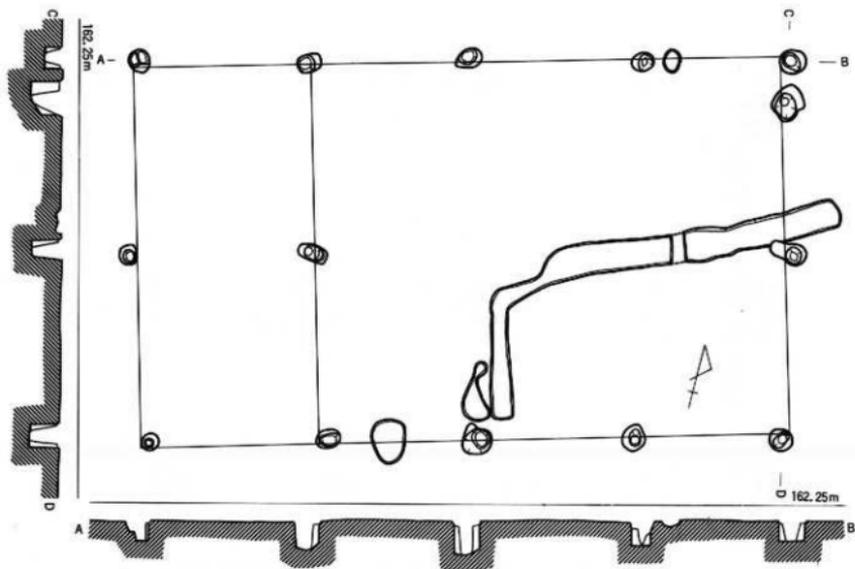
削平のため全体像は不明であるが、2間×1間以上の倉庫跡と思われる。柱穴掘方は径約50cmと比較的大きく、柱の径は約20cmとなっている。柱間寸法は東西列で約1.45m、南北列で約1.65mである。方位は北で東に約5度振っている。



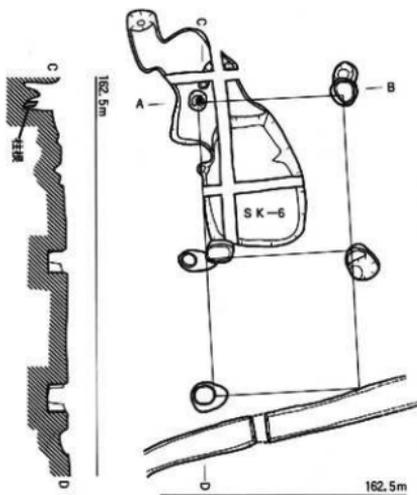
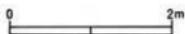
第16図 H5 実測図



第17図 H6・H7実測図



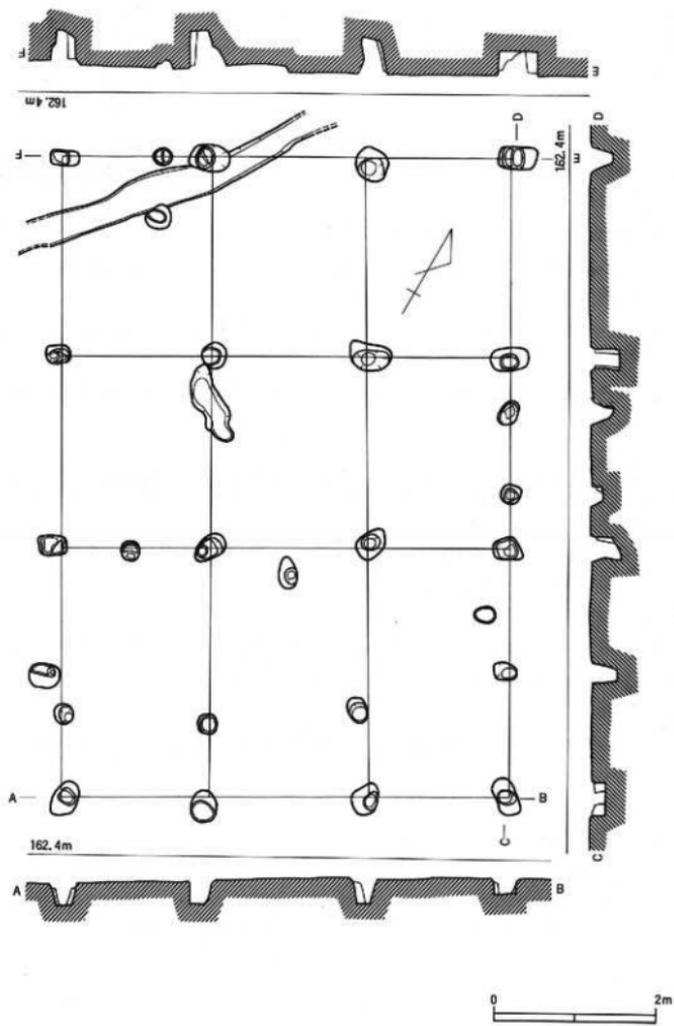
H8



H9



第18图 H8·H9·SK-6实测图



第19图 H10 实测图

(H 2) (第14図)

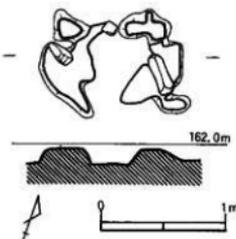
2間×2間の建物跡であるが、東西列約4.8m、南北列約3.8mを測るため、東西棟と考えられる。建物方位は北で西に約29度振っている。柱穴掘方は約20~30cmと小規模である。

(H 3) (第15図)

2間×3間の総柱南北棟で、方位は北で西へ約27度振る。規模は南北列で約4.7m、東西列で約3.7mである。

(H 4) (第15図)

2間×2間の南北棟である。東西列は約4.2m、南北列は約5.0mを測る。建物方位は北で西へ約30度振る。柱穴掘方は径40cm前後の円形である。



第20図屋外カマド

(H 5) (第16図)

建物方位を北で西へ約25度振る南北棟である。規模は2間×3間で、東西列約4.6m、南北列約6.0mを測る。

(H 6) (第17図)

2間×3間の総柱の東西棟である。東西列は約6.2m、南北列は約4.7mを測る。柱穴掘方は径約50cmの円形である。建物方位は西で北へ約65度振っている。

(H 7) (第17図)

2間×3間の南北棟であるが、東西列約3.2m、南北列約4.2mとやや小規模である。建物方位は北で西に約5度振る。

(H 8) (第18図)

2間×3間の東西棟で、西側に1間廂をもつ。東西列は約8.0m、南北列は約4.7mを測る。柱穴掘方は約30cmの円形を呈する。建物方位は東で北へ約73度振っている。

(H 9) (第18図)

1間×2間の小規模な南北棟である。北西隅の柱穴中には柱根が残っており、直径約10cmである。東西列は約1.8m、南北列は約3.6mを測る。建物方位は北で西に約40度振っている。

(H10) (第19図)

3間×3間の総柱建物跡である。東西列約5.5m、南北列約8.0mの南北棟で、建物方位は北で西へ約30度振っている。

4) 屋外カマド (第20図)

T15の南方約4mの地点に検出されたもので、およそ0.9m×1.2mの規模である。残存高は約15cmである。壁体が弧状に向かい合った状態で遺存する。炊き口は南側で約25cm開口している。北側は煙出しとなっていたらしく約5cm開口しており、礫が1個のせられている。このカマドの周囲約2m四方を精査したが、住居跡・柱穴等は確認されなかった。

5) 土坑

大小あわせて10数基検出されたが、遺物の出土をみないものがいくつかあった。時期的に大別すると、弥生時代中期(S K-3)・古墳時代後期(S K-4)・奈良時代後期(S K-12)・平安時代末~鎌倉時代初(S K-1・2・6・7・8・9・10)となる。21がS K-4、22~24・27がS K-6、28がS K-9、25・26がS K-12よりそ

れぞれ出土した。

## (2) 遺構

調査面積に対して、出土遺物は少ない。時代ごとに大別すると、弥生時代中期・古墳時代後期・奈良時代後期平安時代末～鎌倉時代初頭の4時期となる。出土遺物はすべて土器類で、弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・黒色土器等である。

### 1) 弥生土器 (1~5・7~9・16)

器形には壺(1~5・8・9・16)と甕(7)がある。1は胴部が球形で、最大胴径を中ほどにもつ。頸部は、細くゆるやかに外弯しながら口縁部で屈曲して受口状となる。端面は平坦である。底部は径4.5cmで平底である。口縁部にヘラ描斜格子文、頸部に栴檀平行沈線・ヘラ描鋸歯文・栴檀刺突文、胴部上半には栴檀平行沈線とヘラ描斜格子文の組み合わせ、栴檀波状文の文様が施され、胴部下半は縦方向にハケ調整される。内面はナデ調整される。口径9.6cm、最大胴径30.0cm、器高36.0cmを測る。5も同形態の壺であるが、頸部には施文されず、ハケ調整されている。2は頸部が太く短く、口縁部は外弯すると思われる。底部は平底となる。施文及び調整は、1と同様である。底径は3.8cmを測る。3はソロバン玉状に張る胴部をもつ小形品で、口縁部は外弯して、口縁部端面下端に刻目が施されると思われる。施文は1・2と同様であるが、胴部中位の栴檀波状文は逆になっている。残存器高18.1cm、最大胴径18.5cm、底径4.4cmである。4は内弯する口縁部をもつ壺で、頸部がひきしまった形態であろう。口縁部には栴檀刺突文が2段と栴檀平行沈線が施文される。内外面には、ほぼ対応する位置に爪痕が残る。口径は7.2cmを測る。8は口縁部が外弯して、広く開くものである。口縁部下端には刻目が施される。口縁部内面にはヘラ描斜格子が認められる。9は肩部の小片である。2条の突帯があり、その上下には栴檀刺突文が施される。7は口縁部が強く外弯する甕で、端面は垂直となる。口縁部端面下端と頸部に刻目が施文される。口縁部内面には、ヘラによる鋸歯文状の施文がある。口径は16.4cmとなる。16は底部だけで、径4.8cmのものである。

### 2) 須恵器 (6・11・18・19・21・29~36)

高坏・坏身・坏蓋・皿が出土している。6の高坏は坏部だけで、口径10.0cmである。底部と体部は段をなして屈曲する。口縁部中位でも明瞭な稜を形成して屈曲する。坏身は立上りを持つもの(18)と、持たないもの(32~36)がある。18は口径9.6cm、器高4.2cmを測り、立上りは短く、かなり内傾する。32・34~36は、ほぼ平坦な底部から直線的に外上方へ開く。底部外面には、粘土紐巻上げ痕がラセン状に認められる。口径は11~13cm、器高は4~5cmとなる。坏蓋も2形態あり、坏身にそれぞれ対応する。11・19・21は、丸味のある天井部と内弯する口縁部をもつものである。口径は11~12cmで、器高は4cm前後となる。29・30は、平坦な天井部と屈曲する口縁部をもつものである。口径は10~14.5cm、器高は1.6cm前後を測る。31は、形態的には29・30と同様であるが、口径16.8cm、器高3.1cmとやや大型である。(33は口径17.3cm、器高2.2cmを測る皿である。)

### 3) 土師器 (10・12~15・17・20・23~25・27・28)

甕・長甕・羽釜・皿・埴・鉢が出土している。12~14・20は甕で、球形の体部と「く」の字状に屈曲する口縁部をもつ、底部は丸底である。体部はハケ調整され、外面は縦方向、内面は横方向となる。20の体部外面下半はヘラ削りされている。口縁部は内外面とも横ナデ調整される。20は口径13.4cm、器高14.1cmの法量をもつ。12・13も同規模である。14は口径11.1cmとやや小型である。10の長甕は、体部・口縁部の内外面ともハケ調整される。口縁部はやや内弯しながら立上る。口径24.4cm、残存器高19.0cmである。15は、内弯して立上る口縁部をもち、埴と思われる。口径は13.2cmとなる。17は鉢と思われ、片口を有する。内外面ともハケ調整が認められる。口径

は20.8cm。皿には口縁部が内湾するもの(23・24・28)と、一担外湾するもの(25)がある。前者には口径9cm前後の小型のもの(23・24)と、約14cmの大型のもの(28)がある。27は内傾する口縁部をもつ羽釜である。鈎は欠損しているが、約1mの狭いものであろう。内面はハケ調整される。口径は28.1cmを測る。外面口縁部には煤が付着している。

#### 4) 瓦器 (22)

わずかに内湾する口縁部の端部内面には、1条の沈線がめぐる。高台は貼付けで、断面三角形でかなり退化している。暗文も粗雑で、見込み部はラセン状に2回施されるだけである。外面には暗文は認められず、指頭圧痕が顕著に残る。口径13.2cm、器高4.2cmで、器高指数は32となる。

#### 5) 緑釉陶器 (26)

内湾する体部と、わずかに外湾する口縁部を有する。高台は欠損している。釉調は濃緑色である。口径15.4cm、残存器高は5.4cmである。

### 4、ま と め

今回の調査は約5800㎡という広範囲に及ぶもので、調査地域のほぼ全面から遺構が検出された。年代的には、弥生時代中期をはじめとして、古墳時代後期・奈良時代後期・平安時代末～鎌倉時代初と4時期に大別できる。この地域は時間的には断絶があるものの、長期間にわたり生活の場となっていたようである。

検出された5基の方形周溝墓は、周溝を接して1ヶ所に集中して形成されている。周溝内より出土した弥生土器は、Ⅲ様式の特徴を有し、5基の方形周溝墓はほぼ同時期に連続的に形成されたものであろう。出土した弥生土器や周溝の切合い関係を比較検討して、5基の前後関係を想定してみると次のようになる。SX-4出土の3は、胴部中に最大口径をもち、ソロバン玉状の形態をしておりやや古い様相を示す。SX-3出土の5は頸部がハケ調整されるだけで、SX-1出土の1のようにへら描鋸歯文を施されておらず、1より退化しており新しい要素をもつ。SX-2とSX-3が接する周溝では、明確な切合い関係を認めることはできなかった。しかし、周溝のSX-3側には、SX-2にはないⅣ層(黒褐色粘質土)の埋土をもつため、SX-2が遅れると思われる。SX-5は、周溝の一部がSX-3に切られており、SX-5が古いのであろう。以上の関係から、SX-1とSX-4がまず形成され、SX-5が続き、次にSX-3が形成され、SX-2が最後になると想定できる。方形周溝墓の位置関係では、SX-1だけが遊離し、SX-2～5は接しており、また、SX-1だけが方位を異にしている。このことから、SX-1とSX-2～5は別の集団であろうと推定される。周溝の最上層からは、古墳時代後期の遺物が出土しており、少なくともその頃までは、方形周溝墓の存在が知られていたであろう。同時期の竪穴住居跡2棟が近くから検出されており、墓域という明確な空間意識はまだもたれていなかったと思われる。

14棟の竪穴住居跡が形成される古墳時代後期には、この付近は集落となっていた。竪穴住居跡の大半は、ほぼ同一の方位をとっている。北方数百mの丘陵上には同時期的小御門古墳群が築造されており、古墳群からはこの集落が一望のもとに見わたせ、この集落の首長的存在の集団がこの丘陵上に葬られたことがうかがわれる。

10棟の掘立柱建物、柱穴からの出土遺物が少なく、時期を決定する決め手には欠けるが、奈良時代後期のものであろう。H4・5・6は軒の出がないほど接しており、これらの掘立柱建物は一時期に全て存在したのではなく、ある程度の時期差が認められる。SK-6のように、平安時代末から鎌倉時代初の土壇も検出されているため、この時期の建物が含まれている可能性がある。

最後に今回の調査の意義付けをして結びとする。内池遺跡は採集遺物から、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡ということで、以前から周知されていた。しかし、遺構という点ではどのような性格の遺跡かは全く不明であった。今回の調査では、弥生時代の方形周溝墓や住居跡が検出され、古代人の生活の痕跡が確認できた。なお、日野町では、採集遺物からは川石器時代まで遡ることができるが、遺構としては内池遺跡が最古といえる。また、当初予想されなかった古墳時代以降の遺構も検出された。したがって、この内池遺跡が占める地域一帯は、出雲川が形成した肥沃な氾濫原であるため、古代人にとっては生活に最適な場所であったのであろう。

(注1) 「有史以前の近江」『滋賀県史跡調査報告第1冊』 昭3 滋賀県保勝会

(注2) 滋賀県教育委員会『滋賀県文化財調査年報、昭和54・55・56年度』 1983

(注3) 前掲(注1)

(注4) 滋賀県教育委員会『蒲生郡日野町小御門古墳群調査概要』 1966

(注5) 『近江蒲生郡志』 巻1 大11

(注6) 近藤滋氏の御教示による。

(注7) 日野町教育委員会嘱託、竹山靖玄氏の御教示による。

(注8) 近藤滋・松沢修『蒲生郡蒲生町・日野町 宮川・岡本古窯跡 大谷古窯跡調査報告』(『滋賀県文化財調査年報50年度』 昭52 滋賀県教育委員会)

(注9) 前掲(注4)

(注10) 日野町教育委員会『日野町大谷古窯出土「蔵骨器展」』パンフレット 1974

(注11) 小御門A遺跡では、土器等が残存しており、それ以外にも地元の方から土壘の存在を聞いている。

## 第4章 七ツ塚遺跡

## 1. はじめに

本報告は、蒲生郡蒲生町大字寺において、昭和57年度に実施した県営ほ場整備事業に伴う発掘調査の成果をまとめたものである。

七ツ塚遺跡は、墳丘径5～10m、高さ1～2m程の墳丘をもつ円墳で、現在6基が確認されている。

今回、この周辺に広がる水田地帯が、ほ場整備事業の対象区域となったため、まず現地での踏査を実施した。その結果、七ツ塚古墳群に当る時期の遺物は、みられなかったが、奈良時代から平安前代におよぶ遺物を各所で採集した。また古墳が、かんがい用に作られた貯水池の掘削土内に埋没している可能性も考えられた。

このことから、主に、古墳の埋没している可能性のある貯水池周辺と、奈良時代から平安時代にかけての遺物を採集した区域を中心に発掘調査を実施することとなった。調査期間は、昭和57年4月20日～5月20日と6月10日～8月31日の総約3.5ヶ月間である。

調査は、県文化財保護課主査近藤滋が指導に当たり、蒲生町教育委員会技師補北川浩が現場を担当した。なお、現地調査、整理業務にあたっては、地元土地改良区の協力を得たほか、地元周辺の住民の方々や下記の方々の参加・協力を願った。記して謝意を表したい。

村井美津枝・木村康人・佐々木克己・松原浩・井上賢雄（敬称略）

## 2. 位置と環境

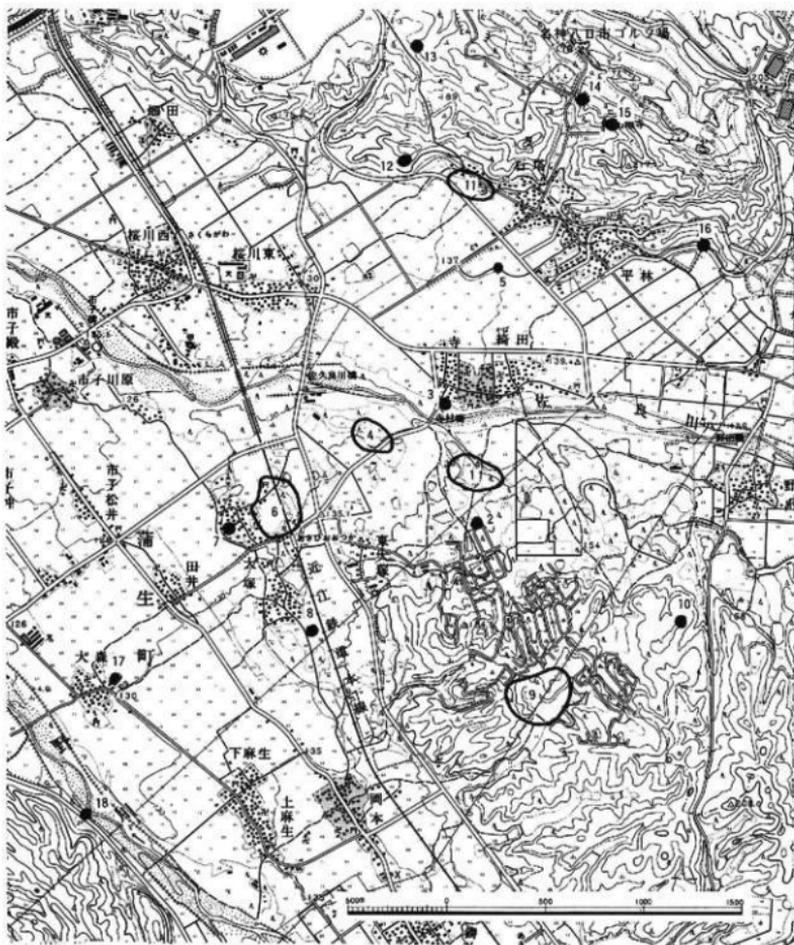
蒲生町は、湖東南部に広がる平野部の東端にあり、北・西を八日市市、南・東を竜王町・日野町に囲まれて位置する。

八日市市との境は、布引丘陵上にあり、西に孤立する布施山へと続いている。竜王町との境は、水口丘陵上にあり、この布引丘陵と水口丘陵に挟まれたかたちで、桜谷丘陵が日野町より伸びている。その両側を日野川と佐久良川が流れ、布施山の南に孤立する雪野山の手前で両河川が合流し、本流となって琵琶湖に注ぐ。この日野川と佐久良川によってもたらされた肥沃な土壌は、蒲生町平野部に火水口地帯を形成しており、この平野部を一望できる桜谷丘陵西麓に本遺跡が立地している。本遺跡地は、平野部に向かってわずかに傾斜しており、周辺には数多くの遺跡が存在する。

本遺跡周辺の遺跡について概観してみると、現在古墳時代以前の遺跡は見つかっておらず、最古のものでも古墳時代後期である。この古墳時代後期の遺跡はいずれも古墳で、本古墳群をはじめとして、桜谷丘陵上には東0.3kmに東大塚古墳<sup>(2)</sup>、南1kmに飯ヶ塚古墳<sup>(3)</sup>が所在し、微傾地には飯道塚古墳群<sup>(4)</sup>、大塚古墳<sup>(7)</sup>、頂塚古墳<sup>(8)</sup>などが散在する。このうち飯道塚古墳群は10基からなり、そのうち2基を昭和38年に発掘調査されている。その結果、報告によれば墳丘長17～18m、高さ2m程の墳丘中央に木棺直葬の主体部をもつ6世紀末～7世紀初頭に相当する古墳であることが明らかとなっている。それに続く遺跡として、本遺跡地より1km南の谷筋に県内唯一の7世紀後半に属する須恵器の竈跡岡本遺跡<sup>(9)</sup>がある。

奈良・平安時代の遺跡は、北0.5kmに佐久良川北岸に接して綺田庵寺跡<sup>(3)</sup>があり、軒瓦の形態等から奈良時代の寺院跡とされている。

鎌倉時代の遺跡はまだ確認されていないが、室町時代になると西1kmに在地の土豪である大塚氏の居館跡<sup>(6)</sup>があり、昭和56・57年にはほ場整備事業に伴う発掘調査が実施されている。それによると、二重の上土がめぐり、建

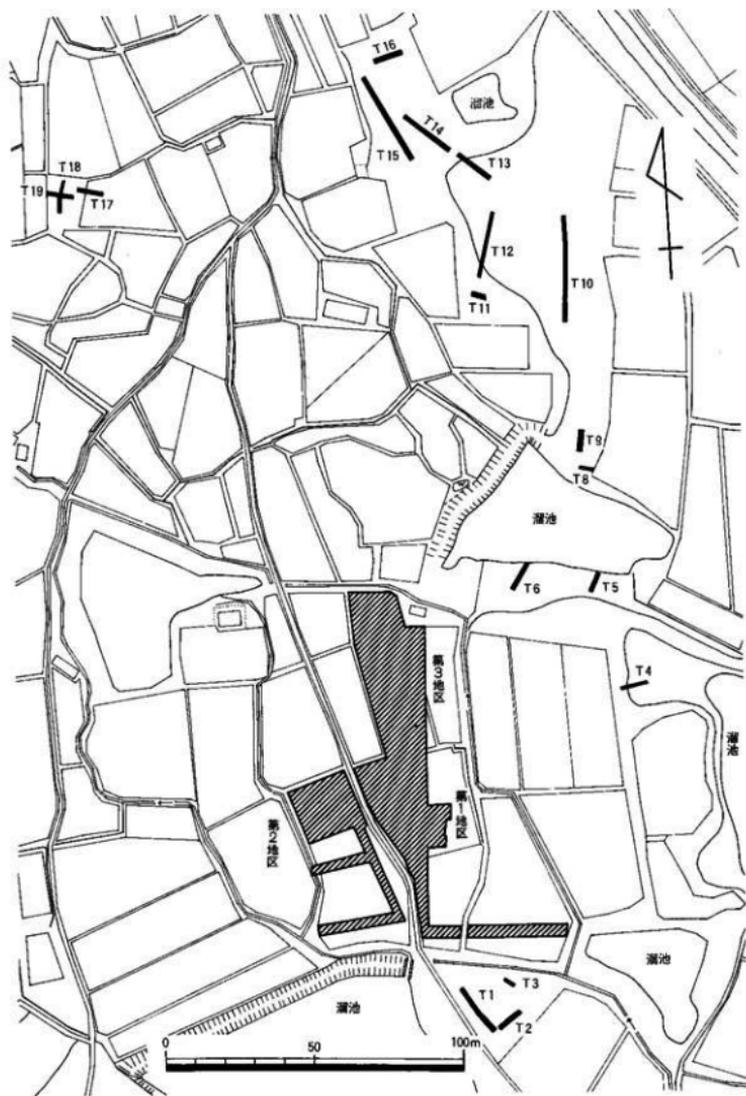


- 第1図 遺跡周辺図
- |    |       |    |       |    |       |    |       |    |        |
|----|-------|----|-------|----|-------|----|-------|----|--------|
| 1  | 七ツ塚遺跡 | 2  | 東大塚遺跡 | 3  | 崎田遺跡  | 4  | 熊道塚遺跡 | 5  | 石塔十一遺跡 |
| 6  | 大塚城遺跡 | 7  | 大塚遺跡  | 8  | 須家遺跡  | 9  | 岡本遺跡  | 10 | 飯ヶ塚遺跡  |
| 11 | 竹ノ鼻遺跡 | 12 | 城前遺跡  | 13 | 豆池谷遺跡 | 14 | 北谷遺跡  | 15 | 石塔寺遺跡  |
| 16 | 内田遺跡  | 17 | 塚町遺跡  | 18 | 法源遺跡  |    |       |    |        |

第1図 遺跡周辺図

遺跡周辺図

遺跡名



第2図 トレンチ配置図

物跡、井戸跡・溝跡等が検出され、中でも内郭より確認された中世水碓工跡は、全国でも2例目で、工芸史を知る上で貴重な資料となっている。なお、大塚城跡付近からは奈良時代末～平安時代にかけての遺構も検出されており、本遺跡を知る上で見逃がせない。

### 3. 調査の結果

調査は、本古墳群の北部で行なわれるほ場整備対象区域にT1～T18、第1～3地区の計21ヶ所にトレンチを設定して実施したものである。各トレンチの位置及び結果は、次のとおりである。

T1～T15には、水田中にある4ヶ所の貯水池掘削土内に古墳が埋没している可能性があったため、その周辺に設けたトレンチであるが、結果は奈良時代から平安時代初頭に属する遺物が出土したのみで、古墳の存在は認められなかった。

T16～T18は、調査地最北端の水田内に盛土がみられたために設けたトレンチであるが、下層より近世の遺物が出土したため古墳とは考え難かった。

今回まず遺構を検出したのは、調査対象区中央を南北にのびる予定排水路敷内の南部に設けたトレンチからで、掘立柱建物跡2棟(SB1, 2)や自然流水路(SR1)などを検出した。そこで、遺構を確認した地区周辺を東西に駆け、その調査にあたった。調査区が広範囲であるため、農道と畦畔により3区に分け、各々第1・第2・第3地区とした。調査の結果は後に詳述するが、第1地区で掘立建物跡2棟以上、自然流水路1条、溝6条等を検出し、第2地区では、掘立建物跡4棟、土拉跡1、自然流水路1条などを検出した。第3地区からは柱穴群や土拵を検出したが、ほとんどの近世の遺構と考えられた。

次に、多数の遺構・遺物の検出をみた第1・第2地区の基本層序を述べると、第1層・耕土、第2層・乳黄色粘土層、第3層・淡灰色粘質土層、第4層・茶褐色粘質土層、第5層・黄灰色粘質土層である。第2層は、第1地区南部で厚い層をなしているが、第1地区北部および第2地区では、あまりみられない。この層は昭和初期になされた開墾時の整地層である。第3層は各地区で普遍的にみられる層で、およそ30cmの厚さである。第4層は第1地区の東から西にむかってみられた層で、厚い所で10cmを測り、多量の遺物を含んでいた。第5層は、第4層のなくなる付近から第2地区にむかってみられた層で、西にゆく程厚い層をなしている。遺構面は、第1地区西部だけが第3層、又は第4層の上面であり、その他の遺構面は、地山土である黄色粘土層であった。この地山土面は、東南から北西に向かって徐々に傾斜している。

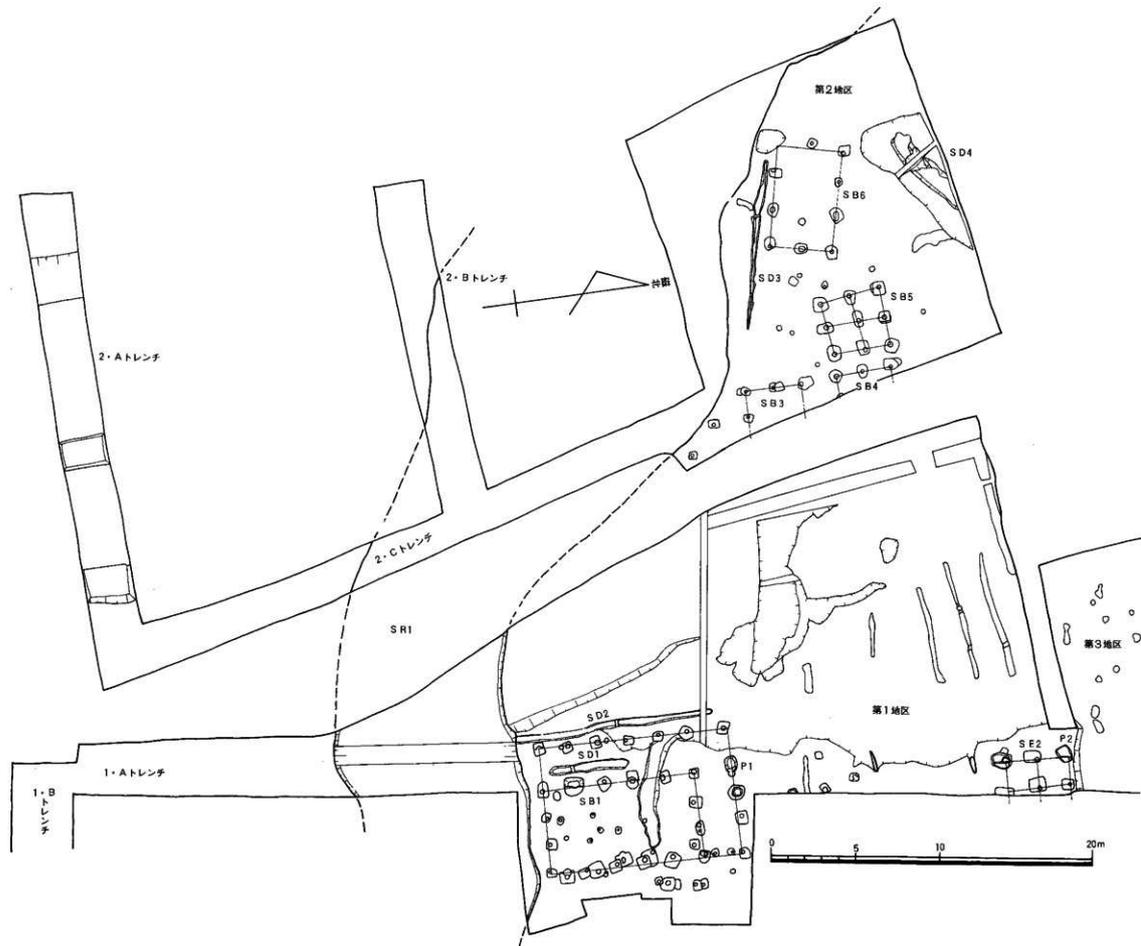
それでは、第1地区、第2地区より検出された遺構および遺物について詳述してみたい。

#### (1) 遺構

##### 掘立柱建物跡

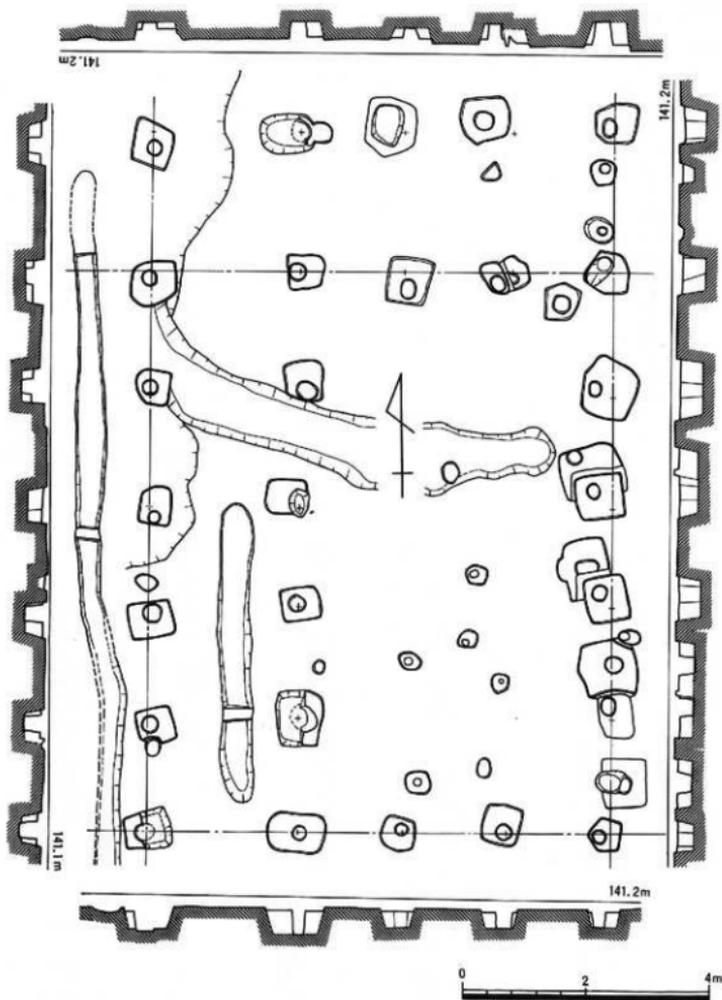
SB1 (第5図) 第1地区南半部東端、SR1に北接して検出された南北棟6間(11.38m)×4間(7.47m)の掘立柱建物であり、北面(身舎との柱間寸法2.26m)と西面(2.43m)に廂が取りつく。身舎の柱間寸法は、染行では1.68mの間隔であるが、桁行は1.62～2.02mと不揃いで、平均値は1.82mである。掘方は、ほとんどが隅丸方形を呈し、一辺50～100cm、深さ20～40cmを測る。柱穴は、身舎で径20～30cm、廂18～30cmである。建物の軸方位はN1°Eと磁北に非常に近い。なお、東側柱列で切り合う(SB1に先行)柱跡が検出されているが、建物の伸びは不明である。身舎北隅の柱穴(P1)内より須臾器の杯身(157)が出土している。

SB2 (第6図) 第1地区北東隅、SB1北端より16.2m北で検出された東西1間(1.65m)以上×南北2間(

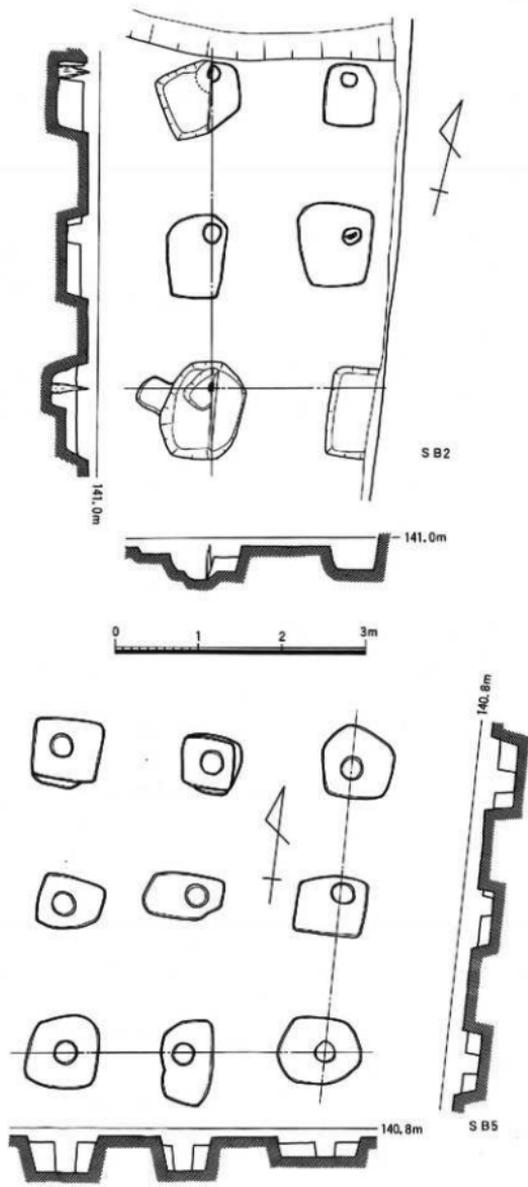


第3図 遺構図





第5图 SB 1 平面图



第6图 SB02 (上) SB05 (下) 平面图

3.8m)の東柱を有する掘立柱建物である。柱間寸法は、西側柱列が1.90mの等間で、南・北側柱列は1.65mである。掘方は、一辺60~110cmの隅丸方形を呈し、深さ25~45cmを測る。柱穴は、径18cmで、3ヶ所に柱根が遺存している。建物の軸方位は $N13^{\circ}W$ である。P2掘方内より須恵器が2点出土している。

**SB3** 第2地区東南端で検出された東西1間(1.50m)以上×南北2間(3.30m)の掘立柱建物である。柱間寸法は、西側柱列で1.65mの等間である。掘方は、隅丸方形または不整な円形を呈し、一辺40~70cm、深さ20~26cmを測る。柱穴は16~25cm。建物軸方位は $N2^{\circ}W$ 。

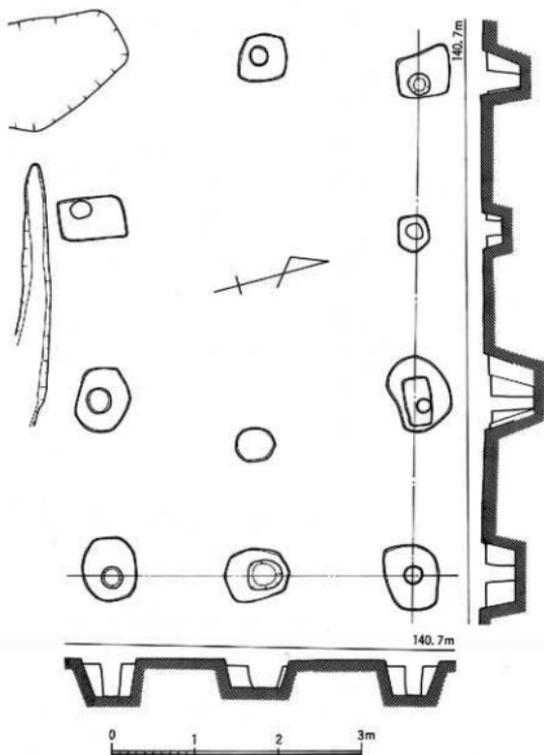
**SB4** SB3北2.10mで検出された東西1間(1.00m)×南北2間(3.30m)の掘立柱建物で、西側柱列でSB3と柱通りをほぼ揃えている。柱

間寸法は、西側柱列で1.65mの等間である。掘方は不整な円形を呈し、径60~80cm・深さ23~30cmを測る。柱穴は、径16~25cmである。建物軸方位は、SB3と同方位。

**SB5** (第6図) SB4西1.30m隔てて検出された東西2間(3.40~3.60m)×南北2間(3.10~3.40m)の東柱を有する掘立柱建物である。柱間寸法は、東・西柱列は1.50~1.90mで平均値1.75m、南・北柱列は1.40~1.80mで平均値1.63mである。掘方は、ほとんどが隅丸方形を呈し、一辺60~85cm・深さ20~45cmを測る。柱穴は、径約25cmである。建物の軸方位は $N2^{\circ}E$ ~ $N3^{\circ}W$ で、SB1,3,4とともに磁北に近似している。

**SB6** (第7図) SB5西約3m隔てて検出された東西棟で、南北2間(3.60m)×東西3間(5.90m)の掘立柱建物である。柱間寸法は、東側柱列が1.80mの等間であるが、北側柱列では東から2.05, 2.05, 1.80mと西だけが狭い値を示す。掘方は、隅丸方形または不整な円形を呈し、一辺40~80cm・深さ25~60cmを測る。南西隅掘方は、後世の削平により消失している。建物軸方位は $N16^{\circ}E$ で、SB5に比べて $14^{\circ}$ 以上東に傾いている。

自然流水路跡



第7図 SB06平面図

**S R 1** 第1・第2地区の両地区にわたって検出された東から西へ流れる自然流水路で、延長57mを確認した。幅は、第1地区SB1付近では10mであるが、第2地区では最大幅18mを測る。深さは確認していないが2mを越すものと思われる。堆積土は、大きく上層と下層に分けられ、上層は近世の遺物を含む埋土で、昭和初期の開墾時に埋められた整地層である。下層は、さらに2層に分けられ、第1層、灰褐色粘質土(上)、第2層砂又は砂利(下)、に分かれ、遺物は主に砂層上面から出土している。

**S R 2** 2Aトレンチで検出した幅21mの落ち込みで2Bトレンチ西部でSR1に切られている。(SR1先行)。堆積土は、第1層灰色粘土層、第2層灰色泥質土、第3層砂層で、第1・第2層はおおよそ50cmの層であるがSR1と同様、砂層が厚い層をなしている。第2地区ではこの自然流水路が見当らないことから、第2地区付近より、SR1と同方向に流れていたと考えられる。出土遺物は無かった。

#### 溝跡

**SD 1** SB1の西面廂内で、棟方向と平行にのびる幅60cm、断面U字形の浅い溝を検出した。SD1との関係は不明。

**SD 2** SB1の西約1mで検出した幅40~50cm、深さ15cm、断面U字形の溝を検出した。位置的にみてSB1西辺の雨落ち溝と考えられる。

**SD 3** SB6とSR1との間で検出した幅30~50cm、深さ5~10cm、断面U字形の浅い溝である。上層には、若干であるが、焼土が見られた。SB6の南辺の雨落ち溝と考えられる。

**SD 4** SB6北側で検出した幅4mの溝状を呈する遺構で、方位はN47°Eで、断面はほぼU字形で、深さは50cm程である。

#### その他

その他の遺構として、第1地区西部で、東西の浅い小溝5条や浅い落ち込みを検出したが、いずれも遺物包含層である黄灰色粘質土上面から切り込まれており、比較的新しい遺構と考えられる。

#### (2) 遺物

遺物は、大半が包含層から出土したもので、その多くが小破片の須恵器であった。他の遺物としては、土師器緑釉陶器がある。

#### 須恵器

##### 杯蓋 (1~14, 131~139, 154, 158, 160)

多量に出土したが、輪状つまみをもつもの(139)1点がみられたほかは、つまみ部が全く出土していないためその形状については不明である。まず縁部径の大きさによって分類すると、大は16~21cm、中は14.5~13.5cm、小は12~13.5cmに分けられ、いずれも頂部は平らであるが、頂部と縁部との境をあまり屈曲させず、端部をすどく下方に突出させるもの(1~10, 32, 33, 131~134, 158)と外方に突出させるもの(11, 12, 136, 137)と、頂部と縁部との境を大きく屈曲させ、端部を外方又は下方に突出させるもの(13~31, 135, 154, 160)と頂部と口縁部との境を段状に屈曲させ、端部を下方にあまり突出させず、そのまま丸くおさめるもの(34~41, 138)とがある。

##### 杯身 (42~118, 141~148, 155, 157, 159)

高台付と無高台があり、蓋と同様口径から、大は15~17cm、中は13~14cm、小は11~12.5cmに分けられる。口縁部の形態でみると、わずかに内反するもの(82~86, 115, 141)ほぼ直線的に立ち上るもの(95~107, 142~144, 157)、わずかに外反するもの(87~92, 111~113, 145, 146, 155)、大きく外反するもの(93, 94)に分かれ、さ

らに高台付のものを高台の形によって分けると、台形又は四角形を呈するもの(42~57, 142, 145, 146, 157, 159)、「八」の字形に開くもの(58~76, 155)、低くて丸いもの(77~81)がある。無高台の底部は、体部との境が丸いもの(106~109, 148)、丸いが、体部下端で強くナデるため段を有するもの(110~114, 147)、角ばっているもの(115~118)に分けることができる。

#### 皿 (149)

平坦な底面で、端部近くを外側に肥厚させ、外反しながら大きく開く。口縁部は外方にのび丸くおさめる。口径17.8cm。

#### 鉢 (125~128)

直線的に外方に延び、端部を内側につまみ出すもの(125)と、いわゆる鉄鉢形を呈し、口縁端部をわずかにつまみ上げるもの(126~128)がある。

#### 壺 (119~122, 150)

高台付(121, 122, 150, 156)と無高台(119, 120)のものがある。150(第8図)は短頸壺で、ほぼ垂直に立ち上る口縁部に肩の張る体部がとりつく。底部は平坦で、外側に開く高台の外端を外方につまみ出し、接地面を内端に与えている。全体に内外面ともナデ調整である。口径10.6cm・体部径21.2cm

#### 壺蓋 (140)

頂部は平坦で、ほぼ垂直に折れる縁部を持つ小型の蓋で、屈曲部下段で段を有し、縁端部は鋭く尖る。縁部径9.0cm。

#### その他

その他破片で脚と思われるもの(123)や、コップ状の埴に付く高台部と思われるもの(124)がある。

#### 土師器

##### 皿 (151)

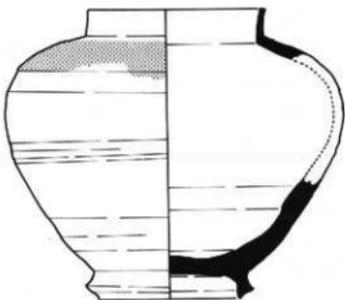
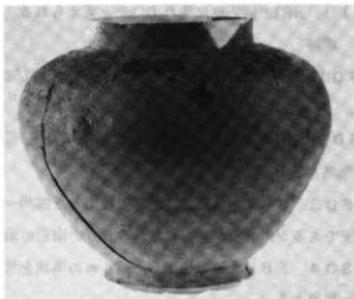
平坦な底面に、外方にほぼまっすぐのびる口縁部を持つ、口縁端部は丸くおさめる。底部内面体部内外面ナデによる調整。口径10.2cm。

1点のみで、底部端に段を有し、僅かに内反しながら開く口縁部を持つ。端部は丸くおさめる。体部口縁部内外面ともヨコナデ調整。

##### 甕 (130, 152, 153)

長胴甕(130)と小型の甕(152, 153)がある。小型の甕は、球体に近い体部に外反する口縁部を持つ。口縁端部は、丸くおさめるもの(151)と、尖るもの(152)とがある。口縁部は、ヨコナデ調整で、体部内外面共に斜め方向のハケ目調整である。

#### 緑釉陶器



第8図 SR01内出土遺物

土器写真  
土器実測図

#### 境(129)

底部1点のみで、「八」の字形に外反しながら開く高台で、反りぎみの底部より、内湾しながら口縁部に続く底部内面見込み部には、沈線が1条入る。全体に丁寧なヨコナデ調整で、全面に濃緑色の釉が施こされている。須恵質。

以上が主な遺物であるが、この中で、布引丘陵山腹に造られた壺焼谷古窯と日野町大谷所在の大谷古窯より産出された須恵器と思われるものが何点か含まれている。その遺物とは、前者が、杯蓋2・7、杯身83.91・壺150などで器形は言うに及ばず胎土に細かい黒色物質を含むことや、器表面に黄緑色の自然釉がかかるなど共通点が多い。

後者は、県内の須恵器産出地としては初例である輪状つまみを有する蓋であり、位置的に近い場所に在ることから、ほぼ断定できよう。次に遺物の時期であるが、SR1灰褐色粘質土内より出土した土師器皿は、その他の遺構SR1砂層上面、SB1・P1柱穴内、SB2・P2掘方内、SD2内の出土遺物は、平城京SD487・SK870・SK2113内出土遺物に近似したものを見出し、平城Vに相当する8世紀後半代に比定できよう。また、包含層である茶褐色粘質土層・黄灰色粘質土層内出土遺物は、緑釉陶器境129がやや新しい時期に入ると考えられるが、それを除くと平城SD820・SK870・SD650B内出土遺物に近似したものを包括しており、ほぼ8世紀中葉から9世紀前半代に比定できる。

#### 4. ま と め

ここでは、検出された遺構や出土遺物から、遺跡の性格について若干述べて、まとめたい。

まず、検出された掘立柱建物であるが、その方位は、SB1・3・4・5ではN2E-N3°Wと比較的ままとまっているがSB2(N13°W)とSB6(N16°E)とが、やや東西に振っている。この時期差については、出土する大半の遺物から解るようにこの地が8世紀中葉から9世紀前半とわずかな期間だけの生活地であったことや、SB1とSB6の「主屋」が、南接するSR1の自然流水路を意識して建てられていることなどから、個々の建物には、さほど時期差は見当らない。このことは、本建物群が、2つの小群に分かれる事を示唆している。つまり第1地区の附付建物SB1(主屋)と総柱SB2(倉庫)の第1小群、第2地区のSB6(主屋)SB4(倉庫?)、SB3(倉庫?)、SB5(倉庫)の第2小群である。ただし、第1小群は、周辺に何棟か埋没しているものと考えられる。

この建物群のあり方は、小笠原好彦氏が指摘した「8・9世紀において、住居(附付建物を含む)、倉庫を所有する有力単位集団」に相当するものであろう。なお、大塚城跡周辺より検出された同時期の遺構も、同様の性格をもつものと推察されることから、本集落が広範囲にわたっていたことがうかがえる。また、この「農村集落＝豪族の居住地」という概念から、ほぼ真北に位置する地に寺院・綺田庵寺を建立し、それを維持するだけの財源を十分に備えた大家族が居住していたと考えられる。そしてこの豪族の前身が七ツ塚古墳群や飯塚古墳群など、周辺に散在する古墳群の埋葬者とみてよいであろう。

以上のように、今回の調査は、桜谷丘陵周辺の歴史を解明する一端となっただけでなく、8～9世紀の農村集落のあり方を知る上で貴重な調査となった。しかしながら、本遺跡が短期間で消滅することや、それに伴い平安時代初期以降の集落の動きが不明であることなど全容を把握するには至らなかった。今後の調査、研究に期待したいものである。

#### 注

(注1) 水野正好「飯塚古墳発掘調査概要」(「滋賀文化財研究所月報1」昭43)

(注2) 近藤滋・松沢修「蒲生郡蒲生町宮川・岡本・日野町大谷古窯跡調査報告」(「滋賀県文化財調査年報」昭

和50年度滋賀県教育委員会昭52)

(注3) 『平城宮発掘調査報告Ⅳ』(奈良国立文化財研究所学報第26冊昭51)

(注4) 前掲(注3)

(注5) 小笠原好彦『畿内および周辺地区における掘立柱建物集落の展開』(『考古学研究』100昭54)

(注6) 前掲(注5)

## 第5章 石塔十一遺跡

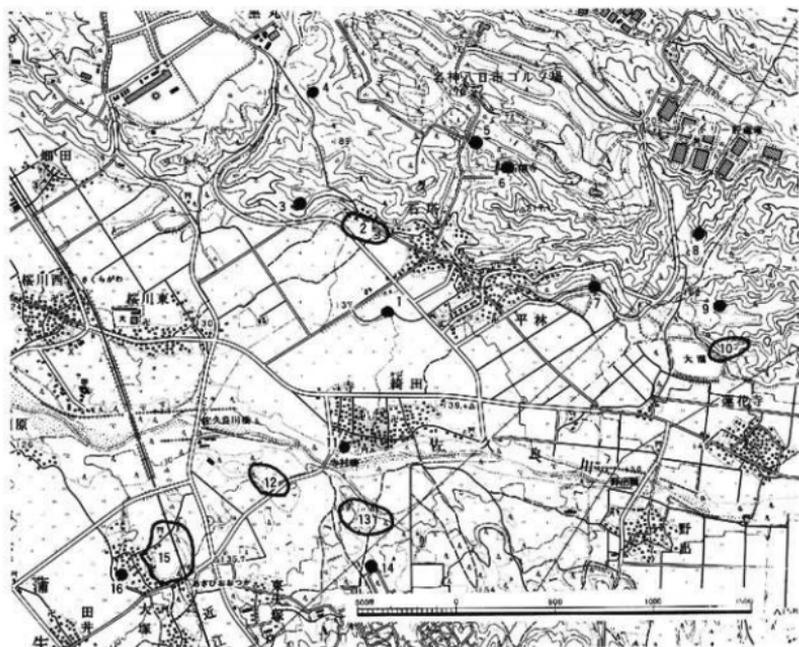
## 1. はじめに

本報告は、蒲生郡蒲生町大字石塔第1において、昭和57年度に実施した県営ほ場整備事業に伴う発掘調査の成果をまとめたものである。

本遺跡は、『滋賀県遺跡目録（昭55）』には記載されていないが、石塔の集落南を走る町道脇で、仮排水を設けられた際、磨滅した土師器片が多量に出土したため、この地の小字名十一を遺跡名とし、調査に当たった。調査期間は9月1日から9月30日までの1ヶ月間である。

調査は、県文化財保護課主査近藤滋が指導に当り、北川浩（蒲生町教育委員会技師補）が現場を担当した。なお、現地調査・整理業務にあたっては、地元土地改良区の協力を得た他、地元周辺の方々や下記の方々の参加、協力を願った。記して謝意を表したい。

村井美津枝・木村康人・佐々木克己・中西 広（敬称略）



- |          |          |          |               |               |
|----------|----------|----------|---------------|---------------|
| 1 石塔十一遺跡 | 2 竹ノ鼻遺跡  | 3 城前遺跡   | 4 壺焼谷遺跡       | 5 北谷遺跡        |
| 6 石塔寺遺跡  | 7 内田遺跡   | 8 一の谷遺跡  | 9 蓮華教寺遺跡(日野町) | 10 壺焼谷遺跡(日野町) |
| 11 鏡田遺跡  | 12 飯道塚遺跡 | 13 七ツ塚遺跡 | 14 東大塚遺跡      | 15 大塚城遺跡      |
| 16 大塚遺跡  |          |          |               |               |

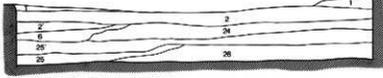
第1図 遺跡周辺図



第2図 トレンチ配置図

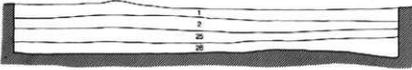
T-1 南壁断面図

115.2 M



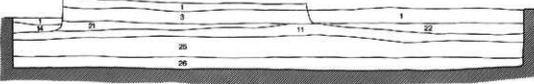
T-2 南壁断面図

116.6 M



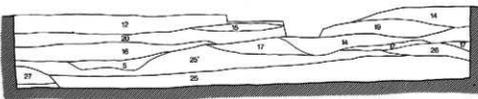
T-3 南壁断面図

116.6 M



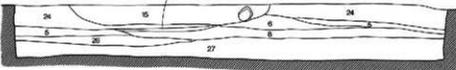
T-4 南壁断面図

115.9 M



T-5 南壁断面図

115.9 M



T-6 南壁断面図

115.9 M



T-7 北壁断面図

116.2 M



T-8 北壁断面図

116.6 M



- 1 雑土
- 2 茶灰色粘質土層
- 2' (砂混り)
- 3 褐色粘質土層
- 4 茶褐色粘質土層
- 5 淡青灰色粘質土層
- 6 黄灰色粘質土層
- 7 灰褐色粘質土層
- 8 灰色粘質土層
- 9 暗褐色粘質土層
- 10 淡灰粘質土層
- 11 暗灰色粘質土層
- 12 黄灰色砂質土層
- 13 暗灰黄色砂質土層
- 14 褐色砂層
- 15 灰色砂層
- 16 淡青灰色砂層
- 17 青灰色砂層
- 18 暗青灰色砂層
- 19 乳灰色微砂層
- 20 青灰色微砂層
- 21 褐色砂層
- 22 暗褐色泥質土層
- 23 暗灰色泥質土層
- 24 黄灰色粘土層
- 25 灰色粘土層
- 25' 25 (砂混り)
- 26 暗灰色粘土層
- 27 青灰色粘土層



## 2. 位置と環境

石塔は、日本最古の石塔として、往古より知られる阿育王塔（三重石塔）をもつ石塔寺(6)があるところで、近江鉄道桜川駅より東約2kmに所在する。集落は、八日市と蒲生を両断する状態で、東西にのびる布引山の南麓にあり、集落の南1kmには、布引山と並行して流れる佐久良川が、周辺の土壌を豊潤しながら、南側を流れる日野川と合流している。

本遺跡地は、この集落より200m程南下した地にあり、この西側には、石塔寺付近より流れを發する大堂川という小河川がある。現在の大堂川は、大正時代になって大改修されたもので、以前は、氾濫の多い地域であり、上流からの土砂を運び込んで、3mにもおよぶ自然堤防が出来上っていて、いわゆる天井川の形状をなしていたこの自然堤防も、改修時に多くが壊されたが、断片的に各所で残っており、調査区も、この残存する自然堤防を横断するかたちで設けられた。

本遺跡周辺の歴史であるが、現在のところ古墳時代以前に属する遺構・遺物は発見されておらず、初源は、古墳時代後期からで、布引山山腹に古墳の造営がみられる。主なものに、一谷古墳(8)、内田古墳(7)などがあげられる。奈良・平安時代には、石塔寺や綺田院寺注1など寺院建立とともに大きな劃期をむかえる。布引山では、窯業生産が開始される。壺焼谷古窯(4)もそのひとつである。また、それに伴うと思われる生活遺構が、竹ノ鼻遺跡(2)で検出されている。なお、本地域では、蒲生郡桑里が施行されていて、小字名に「一ノ坪」「二」「三」「四」「五」など多数の坪名が遺存している。本遺跡名「十一」もその中のひとつである。室町時代中期には、刀劍鍛冶石堂派注3が発生したとされているが、その所在地については明らかでない。

現在、布引山山頂付近は、数々の工場やゴルフ場などが建設されており、新たな様相の変化をみせ始めている。

## 3. 調査の結果

調査は、削平を受ける水路延長部で、旧大堂川の自然堤防を横断するかたちで、18ヶ所でトレンチを設定し、遺構・遺物の埋没状況の確認を行なった結果、本調査区においては、遺構は全くみられず、包含層のみを検出した。各トレンチの調査結果は次のとおりである。

〔T-1〕 最西端に設けたトレンチで、基本土層は、第1層・耕土、第2層・茶灰色粘質土層、第3層・黄灰色粘土層、第4層・灰色粘土層、第5層・暗灰色粘土層、で、遺物は第4・5層より出土した。第5層の下層は、青灰色粘土の無機質土層で、遺構は検出されなかった。

〔T-2〕 基本層序は、T-1に非常に類似し、第1層・耕土、第2層・茶灰色粘質土層、第3層・灰色粘土層、第4層・暗灰色粘土層、で、



第4図 石塔寺三重石塔



第5図 調査地周辺より出土した石遺物

第4層までの厚さは、約80cmである。遺物は出土していない。

〔T-3〕 T-3 トレンチは、畦畔にかかるため、上層はやや乱れているが、下層では、T-2の第3層、第4層が堆積しており、T-1～T-3については、ほとんど変わらない堆積状況下にあったことがうかがえる。

〔T-4〕 T-4 トレンチは、自然堤防削平後に設けたトレンチで、上層は砂層が堆積しており、下層にはT-1～T-3でみられた灰色粘土、暗灰色粘土が層をなしている。上層の砂層は、自然堤防の残欠で、大堂川の形成が比較的新しい時期であったことを提示している。

〔T-5〕 T-5においても、T-4と同様、堤防下にあるため、上層は同様の堆積状況を示すが、T-1～T-4でみられた灰色粘土・暗灰色粘土の堆積が少なくなる。遺物は、本調査で一番多く、青灰色粘土層上面より出された。しかしながら、遺構は全く検出されなかった。なお、上層には、堤防を横断して、対岸の水田に通水するための暗渠施設があった。この施設は、堤防削平時に上部を失っているが、下部は、本調査地より多量に出土する石造物、特に五輪塔の火輪または、地輪の平滑部を上にして並べられていた。このような施設は、この付近でも数ヶ所で見られ、用水路の護岸用に石仏の背部を内側にして、数十体を並べ立てられた例もある。(現在、それらの石造物は、石塔寺境内に安置されている。)

〔T-6〕 T-6 トレンチは、堤防を横断した地に設けたトレンチで、再び安定した堆積状況を示している。基本土層は、第1層・耕土、第2層・灰色粘質土層、第3層・暗灰色粘土層である。遺物は、ほとんど含まれていない。

〔T-7〕 基本土層は、第1層・耕土、第2層・褐色粘質土層、第3層・淡灰色粘質土層、第4層・灰色粘土層、第5層・暗灰色粘質土層である。遺物包含層である第4層は、東に向かって厚い層をなしている。

〔T-8〕 調査地最東端に設けたトレンチで、基本土層は、ほとんどT-7に近い状況を示しているが、青灰色粘土面で、径5～10cm程の柱穴1個を検出した。しかし、上層から掘り込まれた可能性もあり、包含層出土との関係については、判断としない。

## 遺 物

遺物は非常に少なく、遺構が皆無であったため、すべてが遺物包含層内のものであった。

### 出土地区

- 1; T-1 灰色粘土層
- 7・8; T-5 灰色粘土層
- 3・4・11～15; T-5 青灰色粘土層上面
- 2・6; T-7 灰色粘土層
- 5 ; T-8 暗灰色粘土層
- 9・10; T-8 青灰色粘土層上面

### 土師器

皿(4) 平坦な底部より、肥厚しながら直立気味に立ちあがる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部・体部の内外面は、ナデ調整。口径11.2cm

鍋(9) 半球形に近い体部で、外方に強く折り曲げられた受部がつく。受部端面は、ほぼ垂直にある。受部内外面は、ヨコナデ調整で、体部は、内面、外面上位に、ハケ調整、外面下位に、ハケケズリ。受部径36.8cm。

甕(10) 体部上位でわずかに内傾し、「く」の字形に折れ曲がる頸部より、内寄しながら立ち上がる。口縁部内

外面は、ヨコナデ調整で、体部上位内外面は、斜め方向のハケ調整である。口径24.2cm。

羽釜(12) 体部から口縁部にかけて内傾する。口縁部下5cmには水平気味のツバがつく。口径19.9cm、ツバ部径25.5cm。口縁部外面はナデ調整で、口縁部内面はナデ後、以下目のこまかい櫛状工具で調整している。

#### 須恵器

(8) 外方に開く口縁で、端部をわずかに内方へつまみ出す。肩部外面にタタキ（格子）がみられる。口径21.6cm。

#### 瓦器

●(5) わずかに内弯する口縁部で、端部はとがりぎみである。口縁部内面には沈線がまわり、体部内面を形式的にヘラ磨きしている。体部外面中位に指押え。口径140cm。

羽釜(11) 脚で最大径3cm

(13) 体部外面上端部の比較的短かいところに、わずかに下方する短いツバが付く。体部上端部およびツバは、ヨコナデ調整。口径21.2cm

(14) (13)に近い形態で、わずかに内傾し、ツバが水平につく。

甃 (15) 体部から口縁部にかけて、ほぼまっすぐ開き、口縁部は水平な幅広い端面をもつ。粘土細成形。口径36.2cm。

#### 国産陶器

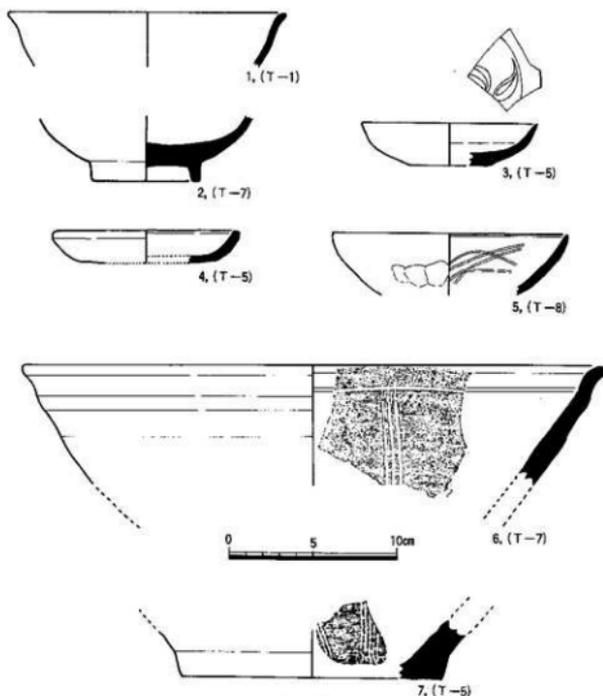
摺鉢(6) 直線的に外方に開く口縁部で、端部はわずかに外反する。口縁部より1.5cm下方内面には沈線がめぐり、それより下方に向かって3条の櫛掻き状のおろし目がつくられている。信楽焼。

口径34.4cm

(7) 平坦な底面より、直立気味に屈曲しながら外方へ開く。5条のおろし目がつくられている。信楽焼底部径15.5cm。

#### 中須陶磁器

青磁●(1) 口縁部を外反させ、端部を丸くおさ-



第6図. 出土遺物実測図

めるもので、緑色の釉を施している。口径16.5cm。龍泉窯系。

青磁(壺2) 直立する高い高台をもち、内湾しながら立ち上がる。内外面に青緑色の釉を施す。底部径6.4cm。

青磁皿(3) 体部中位で屈曲し、直線的に外方にうすく引き出す。見込みに花文を浮彫りする。釉は、淡緑色で、外底部は焼成前に釉をかき取っている。口径10.4cm。龍泉窯系。

遺物の時期を概観してみると、まず一番古い時期の遺物として9・10の土師器が挙げられ、6世紀後半から7世紀初頭と思われる。次に須恵器の甕8ではほぼ奈良時代後半と考えられる。瓦器壺5は、体部外面にヘラ磨きを施さない時期に入るもので、白石<sup>注4</sup>編年というⅢ-I型式に該当し、13世紀前半に入る。

T-5 青灰色粘土層上面より出土した遺物は、4・12の土師器がやや古い形態を呈するが、他の遺物、3・11・13～15は、おおよそ14世紀の範疇に入るものと考えられる。本遺物の最終時期のものとしては、2・6・7があり、室町時代後期後半に位置づけられる。

以上のことから、本調査区内より出土した遺物が、大きく4期に分かれることがわかる。I期・古墳時代後期Ⅱ期奈良時代後半、Ⅲ期・鎌倉時代前半から室町時代前期、Ⅳ期・室町時代後期後半。

#### 4. ま と め

今回の調査では、生活地としての状況はみられなかったものの、少量ではあるが、多期にわたる遺物が、包含層より出土した。ここで、各時期の遺物と遺跡の性格についてみるとI期については、土器が供膳形態を示すことから、集落遺跡の立地を考えねばならないが、Ⅱ～Ⅳ期について、特にⅢ期においては、少量であるが中国陶磁器を含むなど、一般集落とは考え難く、上流にある石塔寺(古寺)との関連性が非常に高いと思われる。さらに、石塔寺周辺には、隆盛時に建てられたであろう堂・坊の跡が多数見つかっており、その位置は、500mと隔っておらず、この地からの流出物である可能性が大きい。

以上のように、本調査において、明確な連携の存在は確認出来なかったが、この地域の歴史を知るひとつの手掛りとなったと思われ、今後の調査を期待される。

#### 注

(注1) 出土瓦等の時期差から、綺田庵寺の前身を石塔寺とする説がある。

(注2) 昭和56年度東宮ほ場整備事業に伴う発掘調査が実施され、大溝跡等が検出されており、壺焼谷古窯と同形態の須恵器が多数出土している。また、その須恵器類には不良品が多数見られることから、上流に、その工人の集落が存在することが予想されている。

(注3) 『近江蒲生郡志』巻5(大11)

(注4) 白石太郎「瓦器生産に関する二・三の覚書」(『古代文化』昭50)

## 第6章 大塚城遺跡

## 1、はじめに

本報告は、蒲生郡蒲生町大字大塚において、昭和56・57年度に実施した県営ほ場整備事業に伴う発掘調査のうち、昭和57年度調査分についての成果をまとめたものである。

本遺跡は、大塚氏の居館跡で、大塚氏は、観音寺城を主城とする佐々木六角氏の家臣で、長命寺文書には天文年間(1572)に湖水の舟争行であったことが記されている。

本館跡は、一部近江鉄道により断ち切られてはいるものの、二重土塁、それに伴う堀が良好な状態で残存している。昭和56年度の調査では、館跡関係の遺構として、小型礎石を有する建物跡や溝、井戸跡、そして県下では初例の水晶工房跡などが検出されており、それに伴う各種国産陶磁器・土師器、中国陶磁器など室町時代後期に属する遺物が出土している。また、館跡北部では、平安時代初頭の遺構が検出されている。

本年度の調査は、近江鉄道貴生川線の朝日大塚駅北 200m に東接して現存する東限の土塁と堀を対象とした。

調査は、県文化財保護課主査近藤滋が指導に当り、蒲生町教育委員会技師補北川浩が現場を担当した。調査期間は昭和57年5月10日から8月20日までの約3.5ヶ月間である。なお、現地調査、整理業務にあたっては、地元土地改良区の協力を得た他、大塚区民の方々や、下記の方々の参加・協力を願った。また、昭和56年度の調査を担当された財団法人文化財保護協会技師松沢修氏より御教示を願った。記して謝意を表したい。

村井美津枝・松原浩・宇野元子・宇野公子・佐々木克己・木村康人(敬称略)

## 2、位置と環境

本遺跡は、近江鉄道朝日大塚駅北側にある雑木林および水田地内に所在する。この地は、蒲生郡の北を画する布引丘陵と同郡の南を画する水口丘陵とはさまれた桜谷丘陵西端に位置し、丘陵のたたずまいを失いゆるやかに西に広がる台地上にある。この台地上には、数々の遺跡が包蔵されているが本遺跡周辺は、古墳をはじめとして、古窯跡・集落跡・寺院跡など各時代の遺跡が密集している。

古墳は、すべて後期古墳ばかりで、七ツ塚古墳群(5)・飯道塚古墳群(4)・大塚古墳(2)・東大塚古墳(6)・頂塚古墳(3)など計約20基が丘陵上あるいは、台地上に散在している。

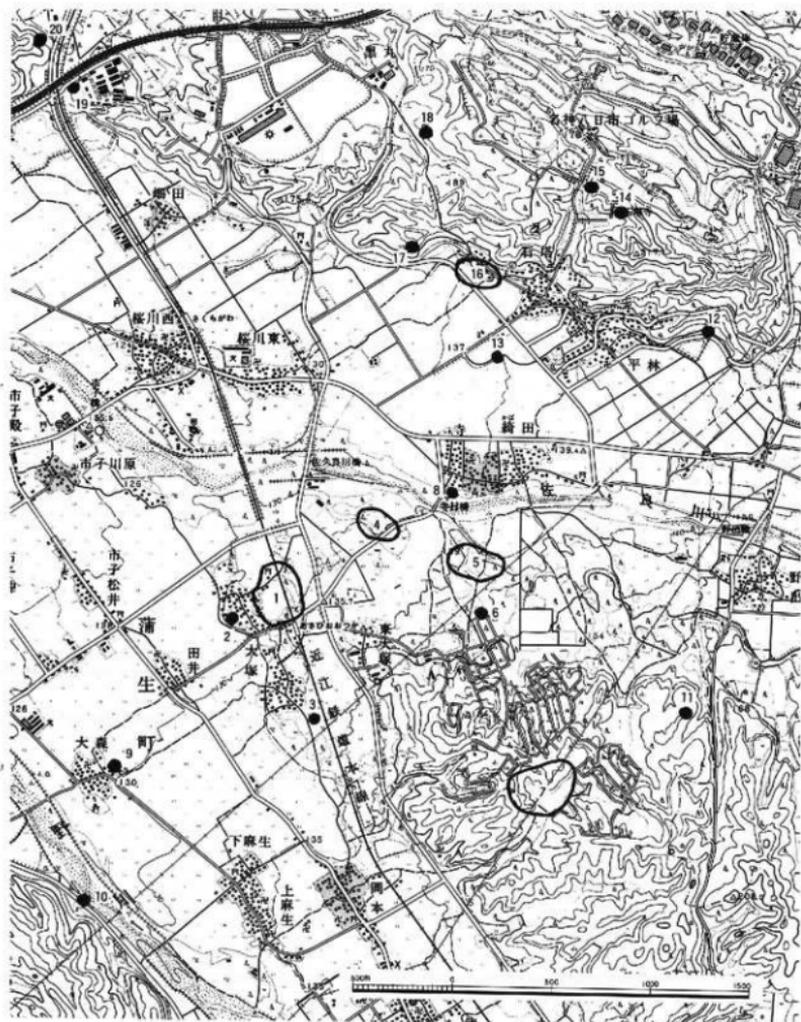
古窯跡としては、桜谷丘陵西側の谷筋にある岡本遺跡(7)が知られ、7世紀後半の須恵器を産出している。

寺院・集落跡は、すべて奈良～平安時代の遺跡で、第4章報告の七ツ塚遺跡、大塚域北側のみられた集落跡をはじめ、この集落と深い関わりがあったと思われる寺院跡崎田庵寺(8)が、佐久良川北岸にある寺・崎田の集落内に位置している。

## 3、調査の結果

調査は、前年度の継続調査として、東に位置する上塁1・2・3、外堀1・2、内堀1・2について実施した。調査方法としては、土塁は、全面表土を除去後、地形測量を実施し、同時に堀については、T-1・2・3……8を設定し、埋土状況・規模の確認を行なった。最後に、土塁の土層観察のため、重機(バックホー)により、3ヶ所で断ち割りを行なった。

各トレンチの調査結果は以下のとおりである。

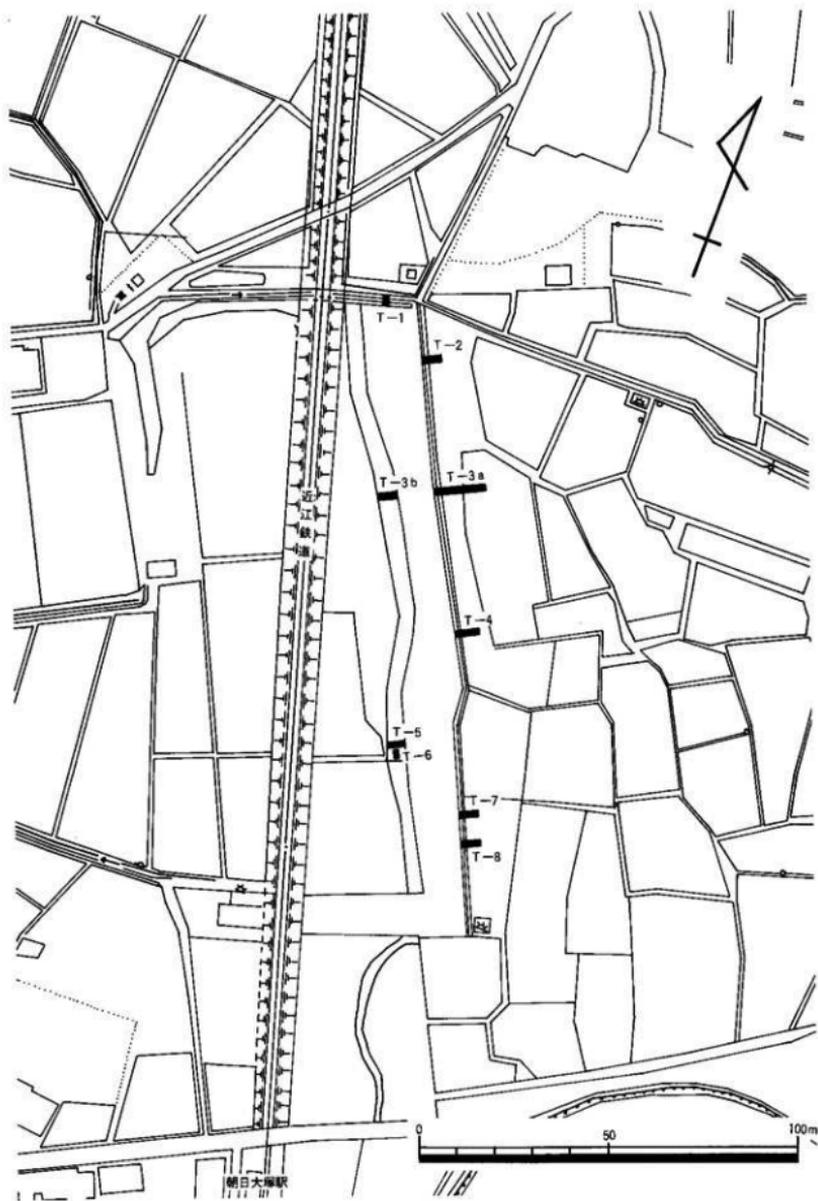


第1図 道跡周辺図

- |          |         |           |          |         |
|----------|---------|-----------|----------|---------|
| 1 大塚城遺跡  | 2 大塚遺跡  | 3 須賀遺跡    | 4 飯沼遺跡   | 5 セツ塚遺跡 |
| 6 東大塚遺跡  | 7 岡本遺跡  | 8 岡田遺跡    | 9 塚町遺跡   | 10 法原遺跡 |
| 11 欽才塚遺跡 | 12 内田遺跡 | 13 石塔十一遺跡 | 14 石塔寺遺跡 | 15 北谷遺跡 |
| 16 竹ノ鼻遺跡 | 17 城前遺跡 | 18 堂焼谷遺跡  | 19 平子遺跡  | 20 狐塚遺跡 |

第1図 道跡周辺図

道跡周辺図 道跡名



第2図 トレンチ配置図

〔T-1〕土塁1に北接する外堀2に設けたトレンチである。この地では、深さ70cm程埋っており、上層には腐植土・下層には灰色粘土が堆積している。堀の断面形状は、土塁1より約70°の角度ですどく落ち、平坦な底面を持つ。土塁1と堀との比高は約2.5mである。堀の幅については、確認していないが、5mを越すものと考えられる。

〔T-2〕外堀1の確認のため設けたトレンチである。現況水路に阻まれ、幅は確認できなかったが、深さは最深部で標高約131mを測り、土塁1との比高は2.30mである。

〔T-3〕(A-A'断面)調査区中央の外堀1(T-3a)と内堀1(T-3b)に設けたトレンチである。

(T-3a)断面形状は、V字形を呈し、幅2.5m、最深部の標高130.8mを測る外堀1を確認した。1mにわたって、上層・腐植土、下層・灰色粘土が堆積していた。土塁1との比高は2.6mである。

(T-3b)舟底型を呈し、幅6.8m・最深部の標高130.5mを測る内堀1を確認した。埋土状況は、T-3aとさほど変化はみられない。土塁1との比高3.3m、土塁2との比高3.8mである。ここでの外堀1と内堀1との心距離は17.5mである。

〔T-4〕T-3より南40m隔てた所で、外堀1(T-4a)と内堀1(T-4b)に設けたトレンチである。

(T-4a)東対岸は検出していないが、V字形を呈するおよそ3.5mの幅をもつ堀と考えられ、T-3aで検出した地よりやや広い。最深部の標高は、130.7mを測り、土塁1との比高2.2mである。

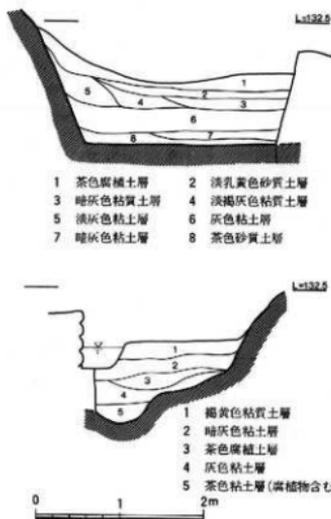
(T-4b)T-3bで検出した堀に近い形状を呈しており、埋土状況も同様である。最深部の標高は、130.4mで土塁1との比高2.5m、土塁3との比高3.2mである。

〔T-5〕内堀1と南端に設けたトレンチである。T-4と同形状を呈し、最深部の標高130.5mを測る。土塁1との比高3.5m、土塁3との比高4.2mである。底面より、信楽焼の甍片が出土している。

〔T-6〕内堀1と内堀2との間の陸部に設けたトレンチで、両内堀との関係を調べることを目的とした。結果は、表土下約50cmで地山を検出し、梨の形状を呈さないことから、内堀1と内堀2が、通じないことが判明した。

〔T-7、8a〕内堀1の確認のために設けたトレンチで、最近に埋められた厚さ60cmの層が見られた。その下層は、他のトレンチと同様、腐植土(上層)と灰色粘土(下層)が、およそ1.5mにわたって層をなしていた。最深部の標高は、T-7、8aともに、131.2mぐらいで、土塁1との比高は2.8mであった。幅については、現況水路が、東側に流れており、不明である。

〔T-8b〕内堀2に設けた唯一のトレンチで、舟底型を呈する断面形状で、内堀1と同様の埋土状況を示す。最深部で標高131.9mを測り、内堀1と比べて底面が高い。幅は、約5.5mで現況とあまり変わっていない。



第3図 T-1(上) T-2(下) 断面図

(1)遺構 以上各トレンチの調査結果、および地形測量から、土塁1・2・3、外堀1・2、内堀1・2について述べる。

〔土塁1〕本館跡の東を限る土塁で、2段に築成されている。南北約160mを測り南端より西方に延び、東西に外堀1、西面に内堀1・2がめぐっている。

東西幅は、北部で13~14cmであるが、内堀1が入り込む所より2~3m広くなり、内堀2付近では、10m程と狭くなる。上段と下段とのラインは余り明瞭でなく、東面に頂部をもち、序々に西下するという状態で、高低差は40cm~110cmである。また、北より全長の約 $\frac{1}{3}$ のところに、内堀1が約7m入り込んでいる。この突出した堀の北側約18mは、周辺より約60cmほど掘り込まれ、平坦面が造られている。また、この部分に南北の内堀に並行して溝状遺構がみられ、何らかの構築物があったものと考えられる。

この土塁の築成方法については、断ち割りの断面図(第5図)が示しているように、周辺より削りとった地山土を1m程盛り上げ、その後、堀の掘き上げ土で整形する方法である。

〔土塁2〕内堀の東を画する南北の土塁で、延長約60mを測り、近江鉄道の架設により西半部が埋設している。この土塁は、北面する土塁4、内堀の西を画する土塁5とつながってゆく。土塁1より約1m程高く築成されている。

築成方法は、余り堀の掘き上げ土を利用せず、周辺の削平した土で盛り上げていると考えられる。

〔土塁3〕土塁2の延長線上にあり、西折する内堀1によって両断されている。全長52mを測り水田面からの高さは、約3mであり、土塁2と同様の形状を呈している。築成方法についても、土塁2と共通する。

〔外堀1〕土塁1の東をめぐる外堀1が西に曲折して延びる堀で、土塁4まで達している。T-1の調査から、他の堀に比して丁寧な造られていることがうかがえる。

〔内堀1〕土塁1と土塁2・3の間にある堀で、北は外堀2とつながり、南は土塁3南端手前3mで止まる。南北全長は、107mである。この堀のほぼ中央部には、西に土塁1を7m入り込み、東に土塁2・3を両断する堀がみられる。この西に延びる堀が、近江鉄道西側に延びるかどうかは確認していないが、この延長線は、土塁5の南端に位置し、北に突出する内堀の一隅を南限する堀が通じていたのではないかと考えられる。

〔内堀2〕内堀1の南延長上に10m隔てて位置する全長35mを測る堀である。T-6の調査結果で判明したように、内堀1とはつながらず、単独で掘られている。

(2)遺物 出土遺物は非常に少なく、堀内より出土した遺物はわずかに1点であった。

須臾器(1~9)杯蓋(1~5)は、扁平な天井部に擬宝珠形つまみがつき、天井部と口縁部との屈曲は、「S」字状に近く、端部はわずかに下方に突出する。杯身(6~9)は、高台のないもの(6・7)と、高台付(8・9)がある。高台のあるものは、底部端に高台が付き、外方にやや踏んばるもの(8)と、直立するもの(9)とがある。これらの遺物は、長岡京出土の<sup>(注)1</sup>遺物に類似したもののみられ、8世紀末に比定できる。

灰釉陶器 脚(12)灰白色の胎土で、へらで丁寧に面取りされている。脚状を呈する。

天目茶碗(13)美濃・瀬戸系の天目茶碗で、底部のみが出土している。室町時代後期。

信楽焼甕(15)底部は平坦で、外反する頸部に、突帯の施こした口縁部がつく。端部は、外方へわずかにつまみ出している。室町時代後期の所産と考えられる。

その他、近世末から現代にかけての遺物として、糞粕を施した美濃・瀬戸系の埴(10・14)や花模様の描かれ

た染付磁器(11)表面を入念にへら磨きした瓦貫の火舎(16)などが見られる。

#### 4、ま と め

今回の調査結果を列記すると

1) 前年度検出された遺構や、土塁盛土中に含まれていた遺物から、8世紀末の遺跡が、この周辺に存在していたことが知られ、その遺跡上、またはそれを削平して、館が築成されたことがうかがえる。

2) 土塁の築成方法は、周辺の削平土を基底部に盛り上げ、その後、堀の掘削土により整形するという、平城の築成方法として一般的にみられる堀の掘削土により土塁を築成する「掘き上げ型式」とは、異にする方法で築成されていた。

3) 土塁1上に、構築物があったと考えられる平坦面がみられたこと。

4) 土塁2・4・5を西に延びると考えられる内堀1に囲まれて突出する内部の一区画(東西33m=110尺、南北54m=180尺)が存在すること。

以上のように、前年度に比して、大きな成果というものは得られなかったものの、中世の居館築成過程を考えると、一つの大きな資料となったであろう。

注1、高橋美久二・百瀬正恒「京都府長岡京跡」(『日本考古学年報27 1974年版』昭50)

注2、一般的に、山城に対して平地にある城を平城と呼称しているが、城として本来の機能である要害防衛性は果しておらず、平地の居館と呼ぶ方が望ましい。



## 第7章 法教寺遺跡

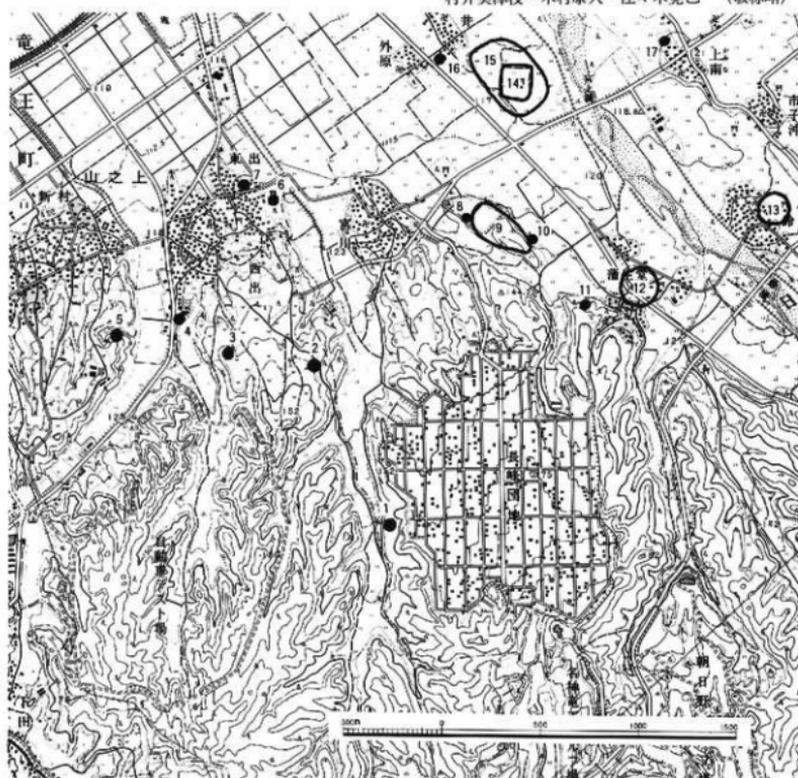
## 1. はじめに

本報告は、蒲生郡蒲生町大字宮川において、昭和57年度に実施した県営ほ場整備事業に伴う発掘調査の成果をまとめたものである。

法教寺遺跡は、名のとおり従来寺院跡ではないかと伝承されていた箇所、谷地に接するように位置するわずかな高台地にある。今回この周辺で、ほ場整備事業が開始されることになったため、この伝承地直下の水田境内にトレンチを設けて遺構、遺物の確認を目的として実施することになったものである。

調査は、県文化財保護課主査近藤滋が指導に当り、蒲生町教育委員会技師補北川浩が現場を担当した。なお、現地調査、整備業務にあたっては、地元土地改良区の協力を得たほか、下記の方々の参加、協力を願った。記して謝意を表したい。

村井美津枝・木村康人・佐々木克己（敬称略）



第1図 遺跡周辺図

- |          |              |         |          |          |
|----------|--------------|---------|----------|----------|
| 1 法教寺遺跡  | 2 法教寺遺跡(電王町) | 3 獅子畑遺跡 | 4 小路海道遺跡 | 5 巖山遺跡   |
| 6 東出南遺跡  | 7 東出北遺跡      | 8 辻岡山遺跡 | 9 宮川遺跡   | 10 楯王寺遺跡 |
| 11 上の山遺跡 | 12 衛生堂遺跡     | 13 堂田遺跡 | 14 宮井遺跡  | 15 野瀬遺跡  |
| 16 堂の前遺跡 | 17 上田遺跡      |         |          |          |

第1図 遺跡周辺図



第2図 トレンチ配置図

## 2. 位 置

水口丘陵の北側には、幾つかの谷地が形成されているが、その東端に位置する中央に法教寺川と言う小河川が流れる谷筋がある。この谷筋の山際には、水口町春日から蒲生へ通ずる山道があり、古くには、往来が多かったバイパスであった。山道を水口町からたどると、谷に造られた水田地帯が広がる付近で分岐し、左は竜王町、右は蒲生町宮川を抜け、それぞれ蒲生の平野部へと続いている。左の山道は、竜王町と蒲生町の町境をなしており、もうひとつの法教寺の伝承地(2)が西側の高台地に存在する。当該遺跡地は、分岐点から右の山道をおよそ150mほど到った所の東側にある、わずかな高台地に位置している。

## 3. 調 査 結 果

調査地は、伝承地のおよそ5m下方にある水田地内であるが、この地が数年前から水田として使用されていないため沼地化しており、重機(バックホー)により地山面まで掘り込む予定であったが、湧水とトレンチ崩壊に悩まされ、結局2ヶ所にトレンチを設けただけで調査を断念した。結果は、10cm程の耕土を除去すると、黄褐色の泥砂が2mを越す層をなしていた。出土遺物は、耕土内より近世の染付磁器片が1点出土したのみであった。

## 4. ま と め

以上のように、今回の調査結果からは、何も見出すものはなかった。又、立地条件からしても、寺院の存在が疑問となるところが多い。竜王町に所在する法教寺伝承地も同様であり、遺跡の見直しが必要となるであろう。

## 图 版



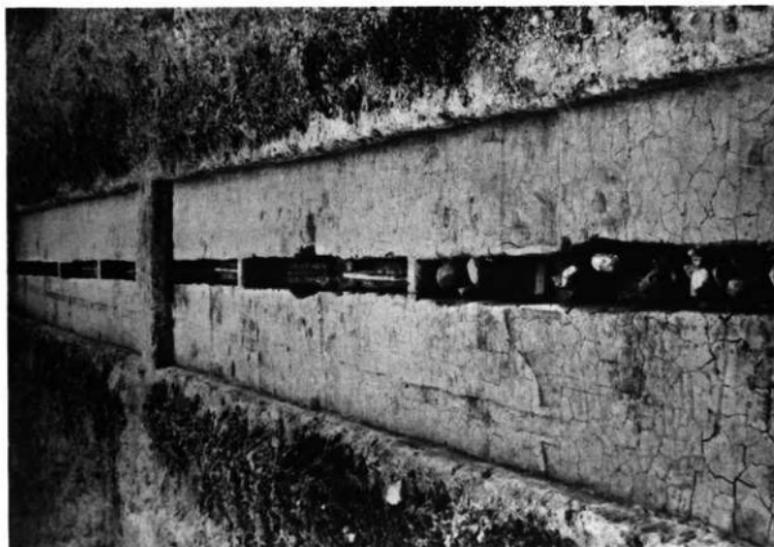
1 調査前全景 (小御門古墳群より望む)



2 土塁及び堀 (南西より)



1 64-1-1 (北東より)



2 64-1-2 (北東から)



1 64-1 T溝 土器出土状況



2 64-1 T断面 (南西より)



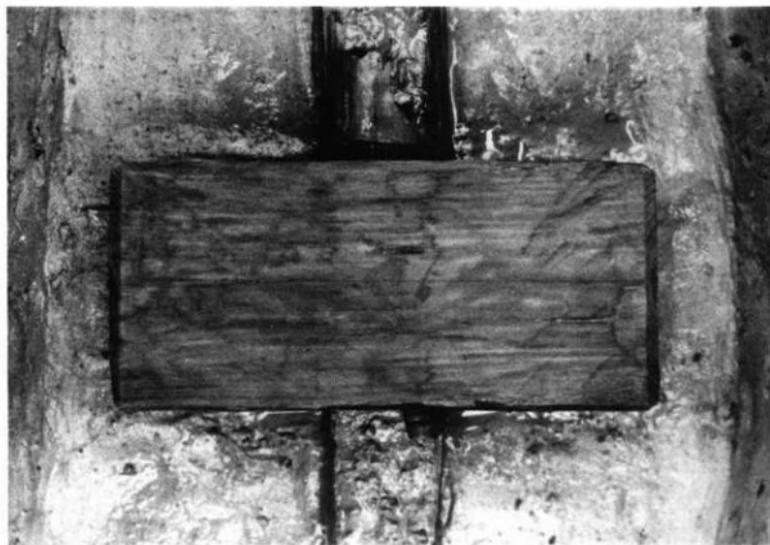
1 4C-3T (南東より)



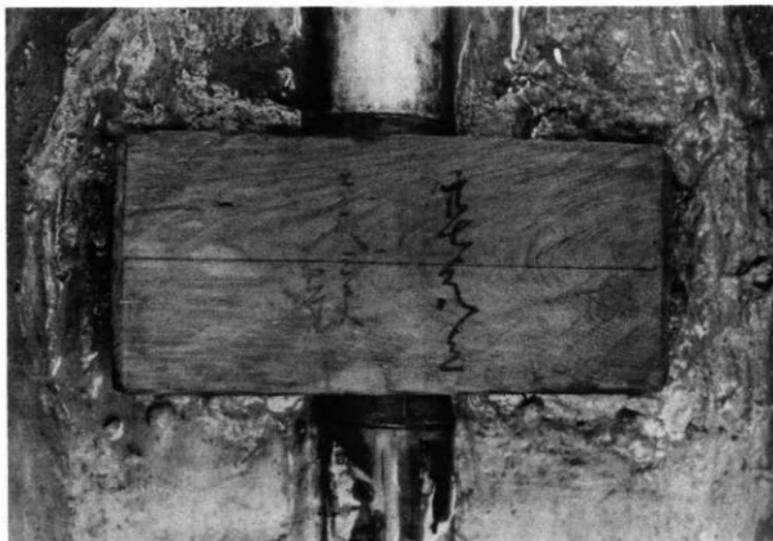
2 5C-1NT (北西より)



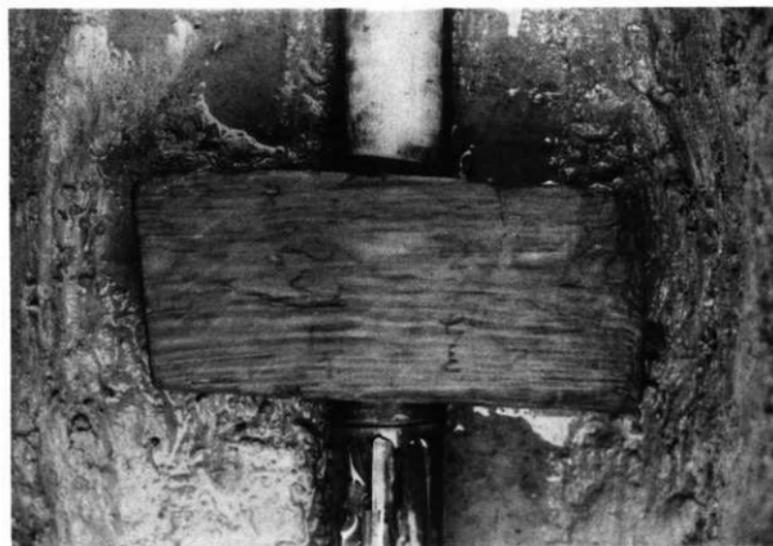
1 4C-2T 升A



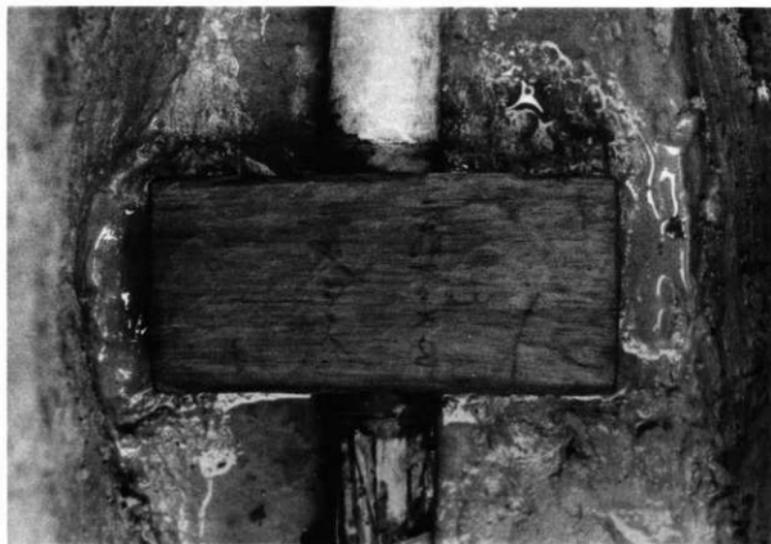
2 4C-2T 升B



1 4C-2T 升C



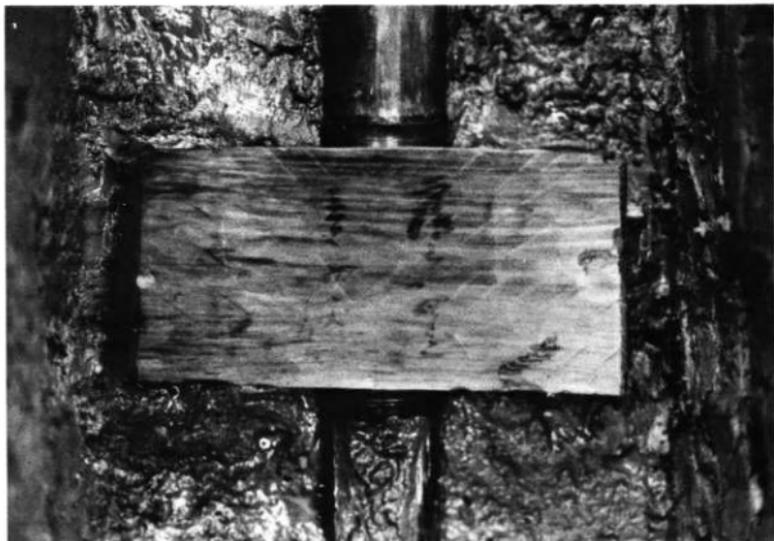
2 4C-2T 升D



1 4C-2T 井E



2 4C-2T 井F



1 4C-2T 井G



2 4C-2T断面 (北東より)



1 4C-1T SD-1 (北東より)



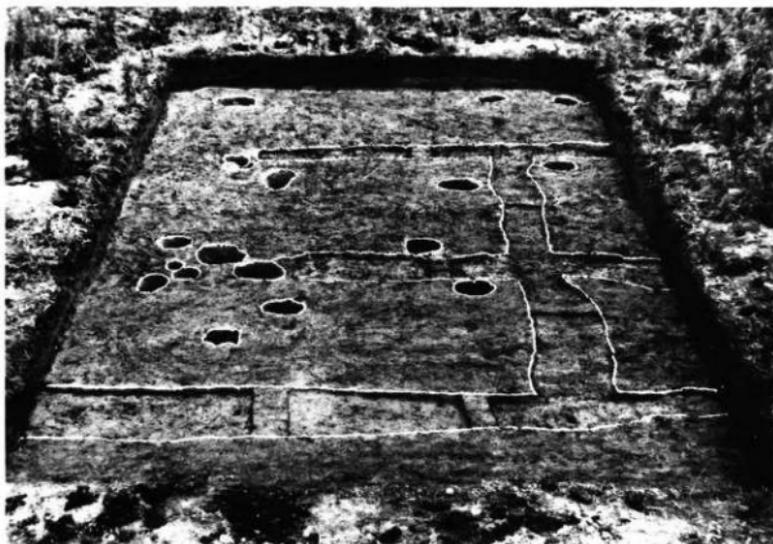
2 4C-1T SD-1 弁



1 64-3<sup>ア</sup>T井戸 (南西より)



2 64-3<sup>イ</sup>T (南より)



1 5C-3T (北東より)



2 5B-2T (北西より)



1 4B-1T (北東より)



2 4B-1T・SK-1 (北東より)



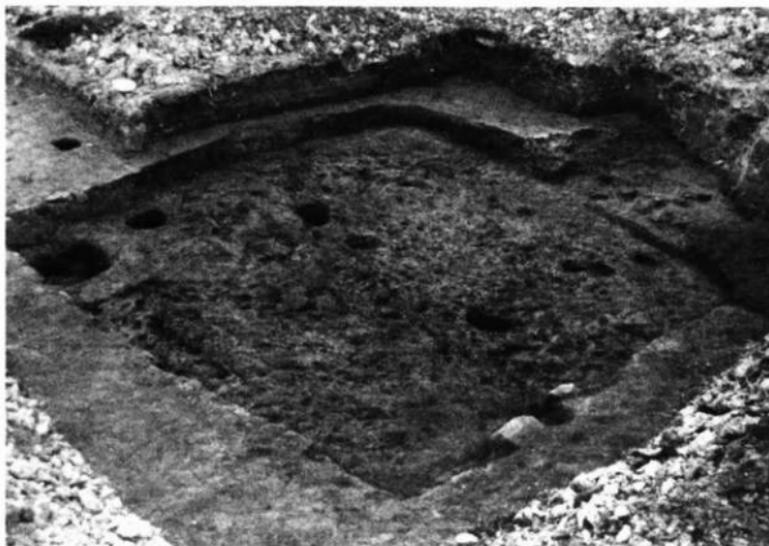
1 4B-1T・SK-2 (北東より)



2 4B-3T (北より)



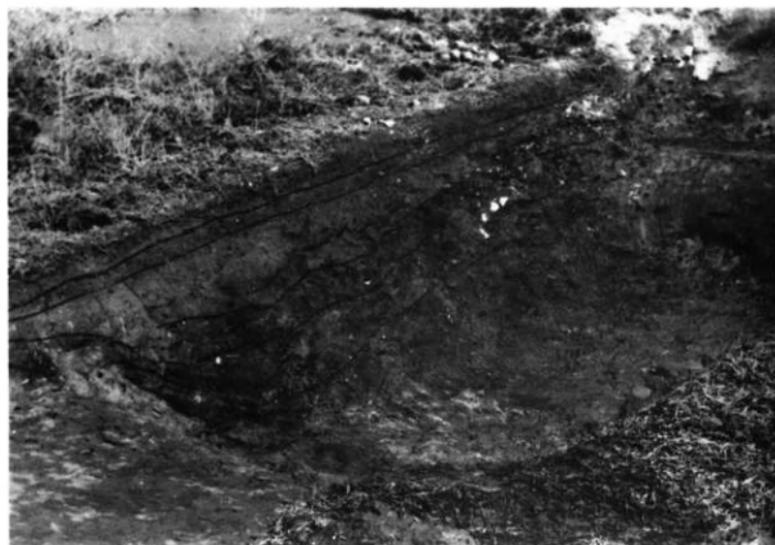
1 3B-8T (南東より)



2 3B-12T (北東より)



1 1-4 T (南西より)



2 1-4 T断面 (南西より)



1 1-9 T (北西より)



2 1-9 T 土器出土状況



1 1-3T (南東より)



2 1-6T・SD-1 土器出土状況



1



2



6



7



3



8

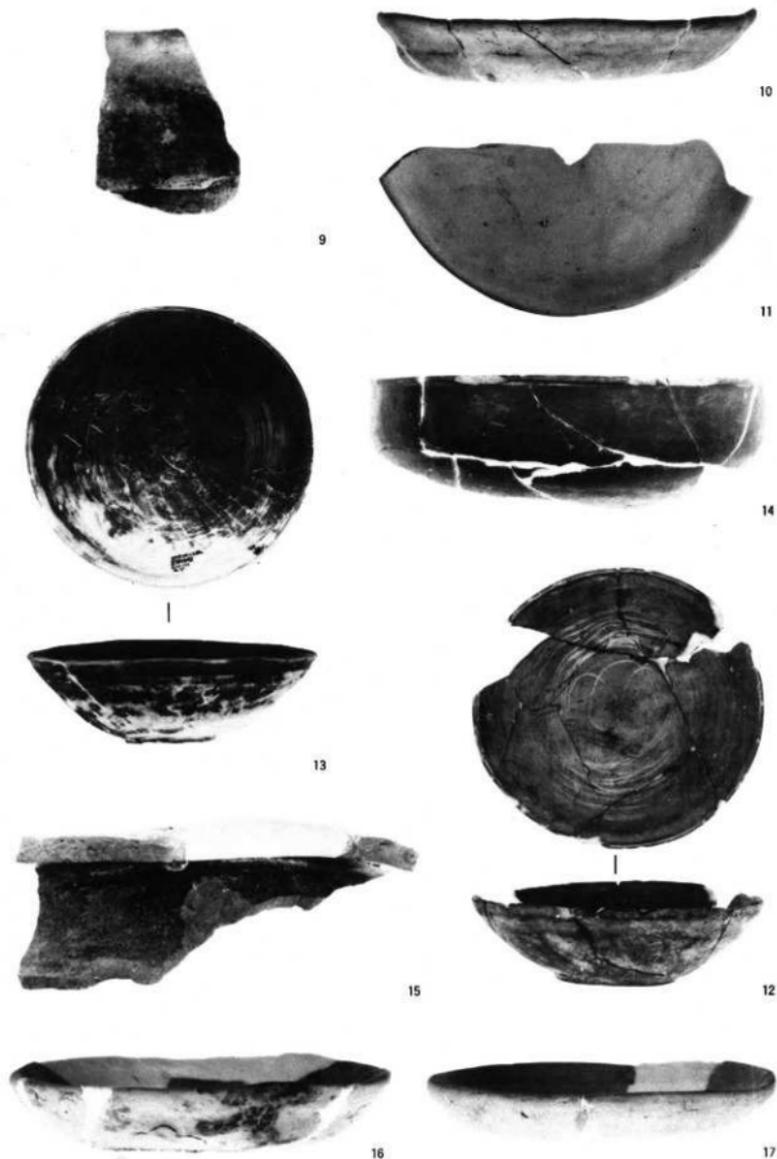


4



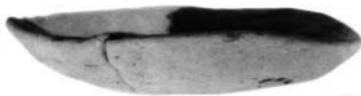
5

出土遺物  
1, 2 : 64-1 T溝Ⅵ層  
3~8 : 64-1 T溝Ⅱ層



出土遺物

9, 10: 64-1 T溝ⅩⅢ層 16, 17: 64-1 T溝ⅩⅥ層  
11~15: 64-1 T溝ⅩⅣ層



18



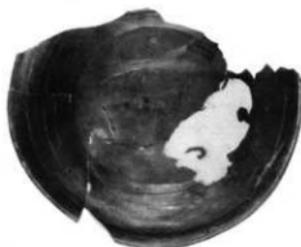
19



23



20



24



21



22

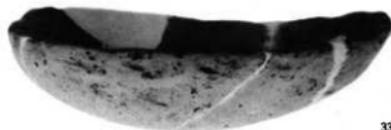


26

出土遺物

18~24: 64-1 T溝XVI層

26: 64-1 T溝X層

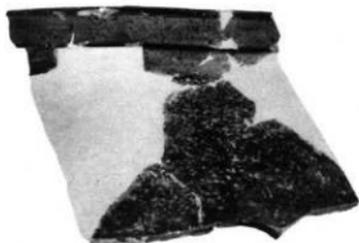


25

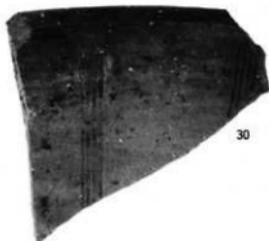
33



27



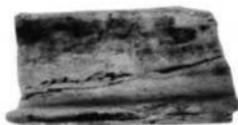
28



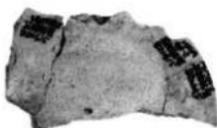
30



29



31

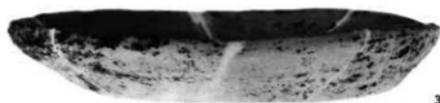


32

出土遺物

25: 64-1 T溝 XVI層 28: 64-2 T II層 33: 64-2 T VI層

27: 64-1 T溝 X VIII層 29~32: 64-2 T III層



34



37



35



36



38



40



39



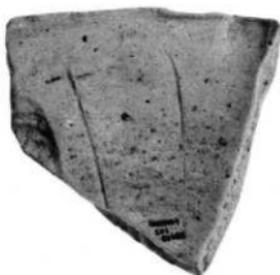
41

出土遺物

34: 64-2 T溝内 37: 5 C-1 T 41: 4 B-6 T  
35, 36: 64-3 T溝内 38-40: 5 B-4 T



42



43



44



45



47



46



48



52



51



50

出土遺物

42: 4B-6T

43: 4B-1T, SK-1

44: 3B-6T

45: 1-6ST

46: 1-6S

47: 1-7ST

48: 1-7T

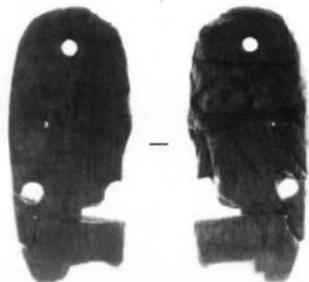
50-52: 1-9T堀



49



55



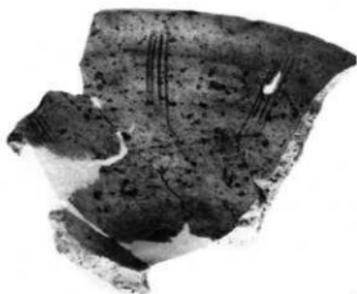
57



53



54



56

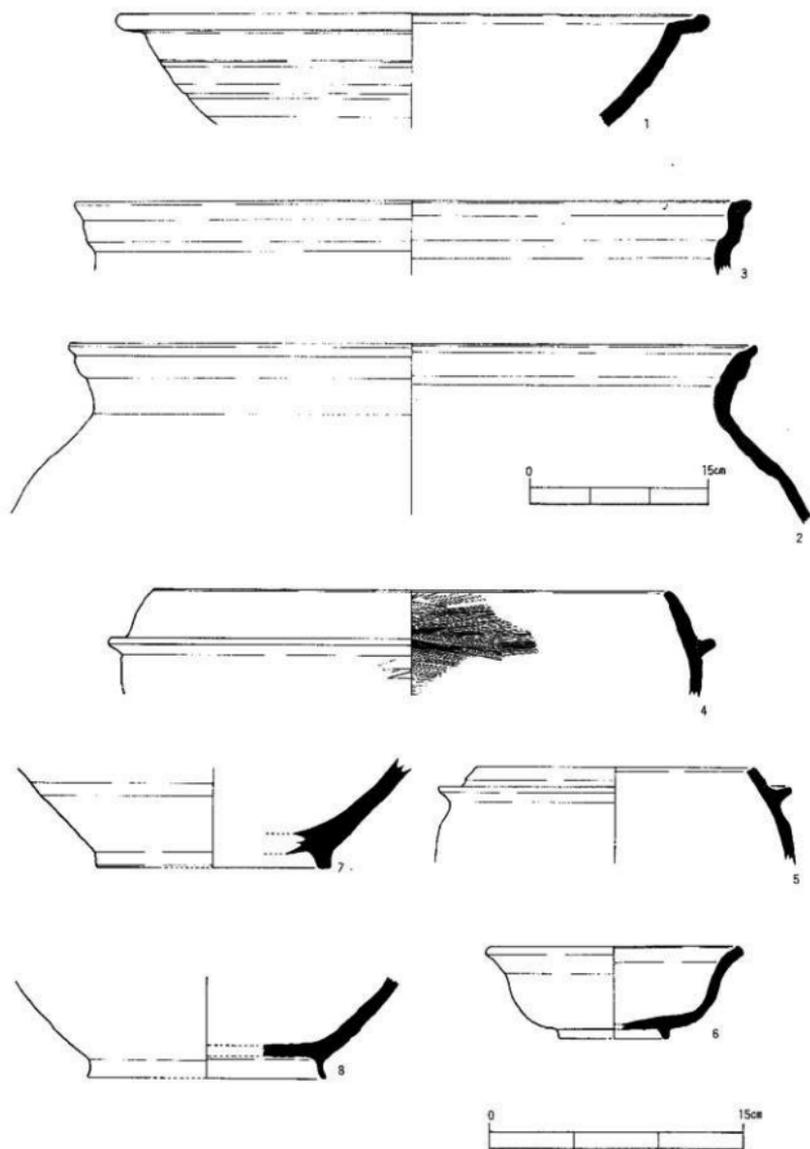


58

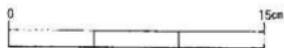
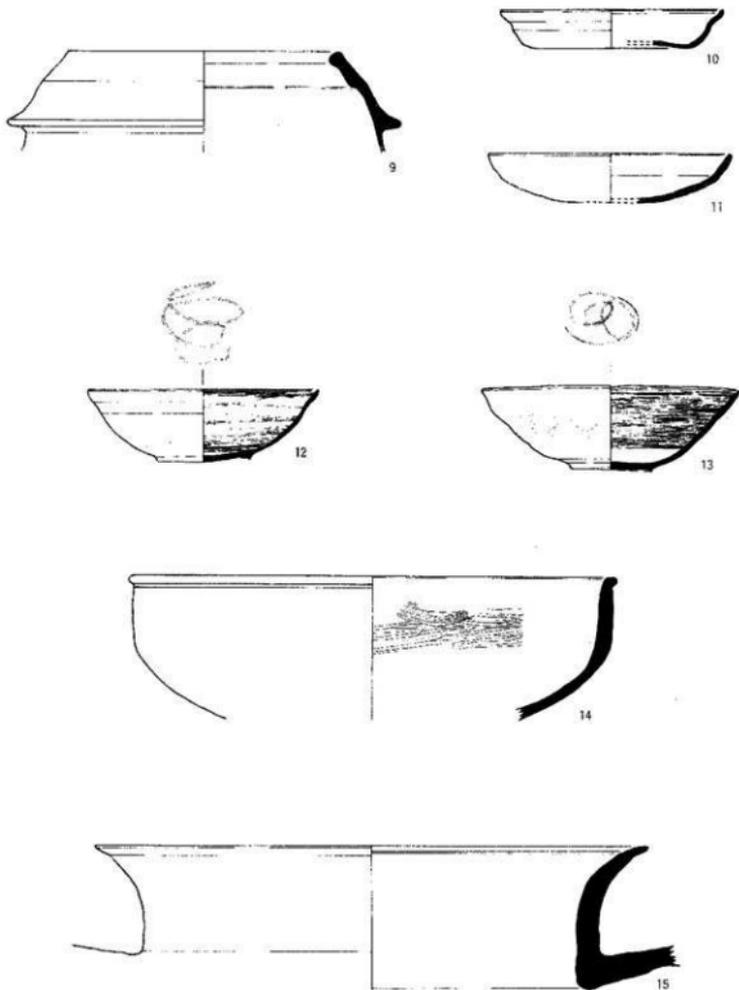
出土遺物

49, 53, 54, 55: 1-9 T 堀

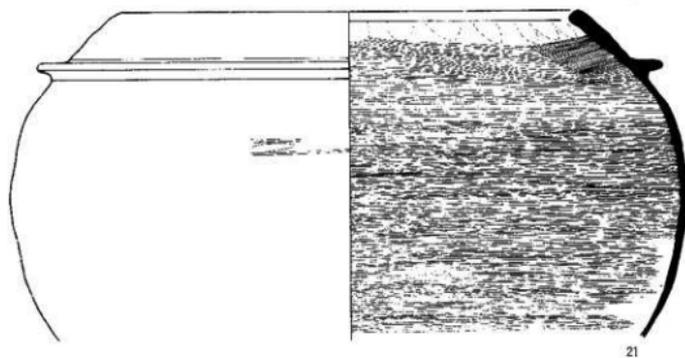
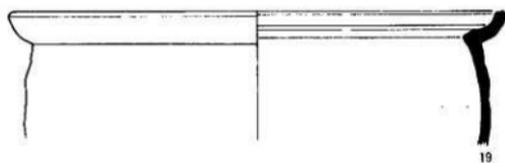
56: 1-1 T



出土遺物夫湖河 1,2:64-1T溝V層 3~8:64-1T溝X層

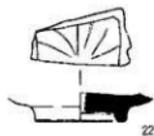


出土遺物実測図 9・10：64-1T溝XⅢ層 11～15：64-1T溝XⅣ層

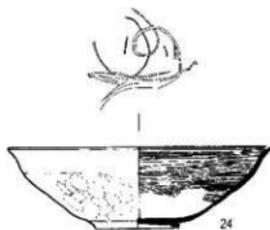




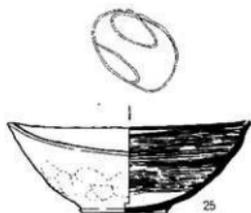
23



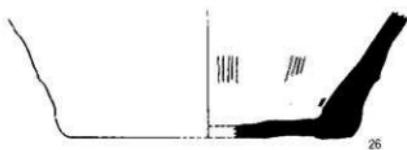
22



24



25



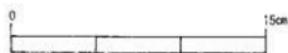
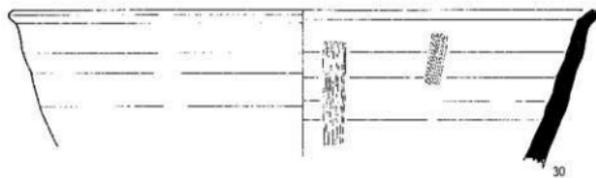
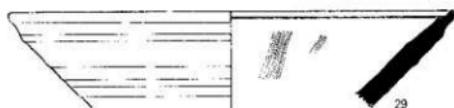
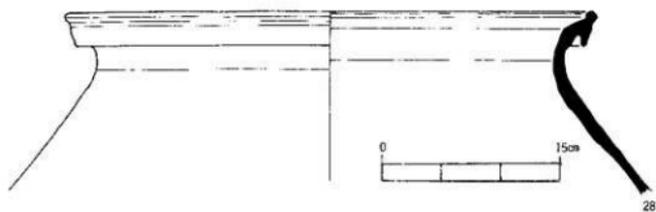
26



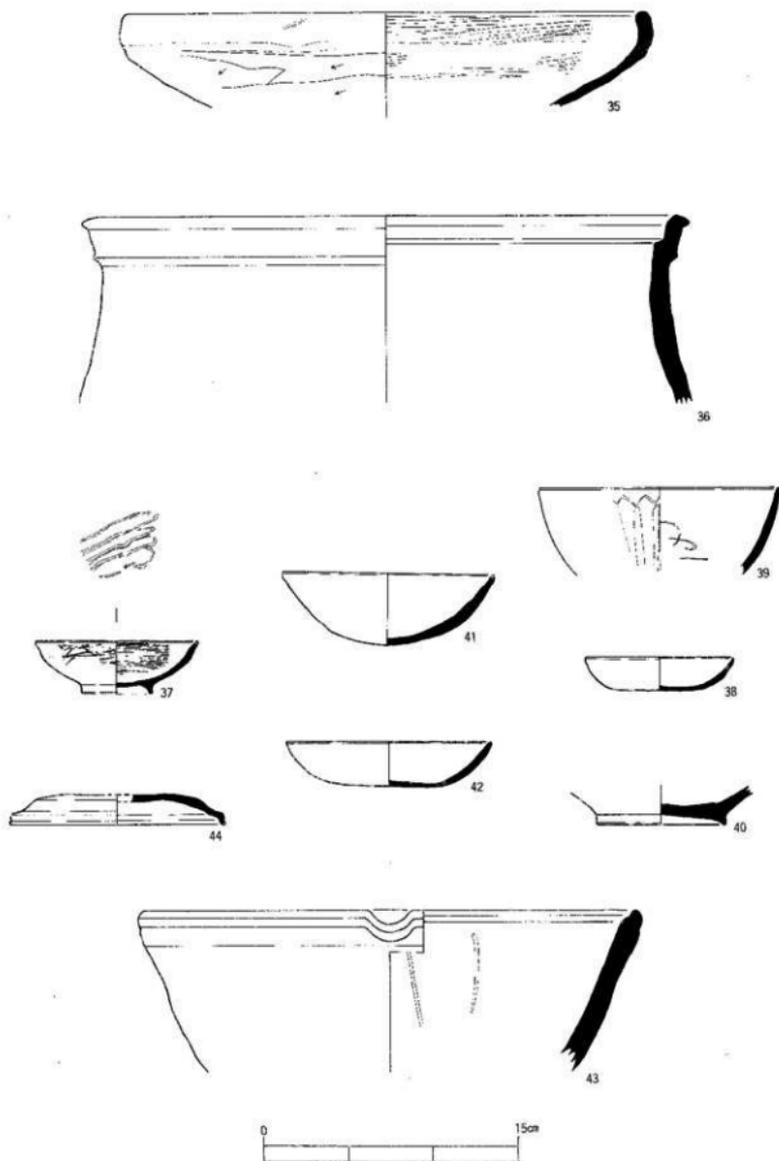
27



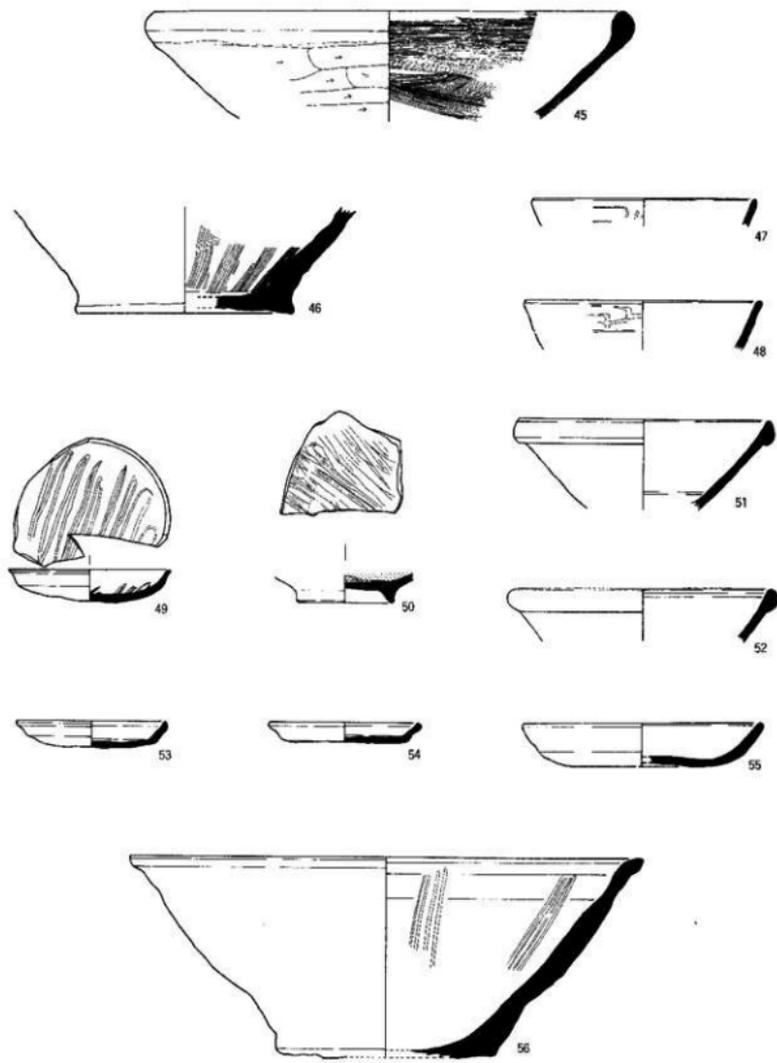
出土遺物実測図 22~25: 64-1T溝XⅥ層 26: 64-1T溝XⅦ層 27: 64-1T溝XⅧ層



出土遺物実測図 28: 64-2T II 材 29~32: 64 2T III 層 33: 64-2T III 層 34: 64-2T 溝内



出土遺物実測図 35.36:64-3\* T溝内 37:5C-1T 38~40:5B-4T 41.42:4B-6T  
43:4B-1T. SK-1 44:3B-6T



出土遺物実測図 45:1-6S T 46:1-6T 47:1 7S T 48:1-7T 49-55:1-9T. 56:1-11T



1 調査前全景(東より)



2 1-1T・T1(東より)



1 4-1 T (西より)



2 6-1 T (北西より)



1 6-3T (北東より)



2 6-6T (北東より)



1 6-6T・SK-1 (西上り)



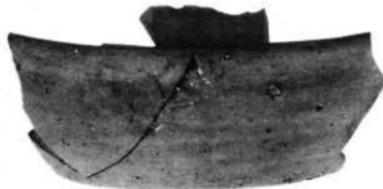
2 6-6T・SK-5 (中央上)



1 6-6T・SD-1 (南より)



2 6-6T Ph53



2



1



5



6



7



3



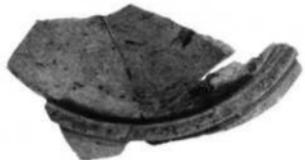
8



9



10

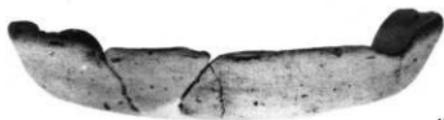


4

出土遺物

1-6, 61T:SD-1

7-10: 6-3T



16



22



13



17



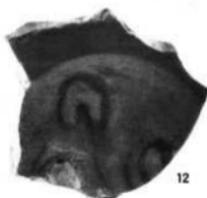
14



11



15



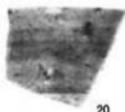
12



21



23



20

出土遺物

11: 6-6 T SD-10

14: 6-6 T SK-5 I層

16, 17: 6-6 T SK-1 III層

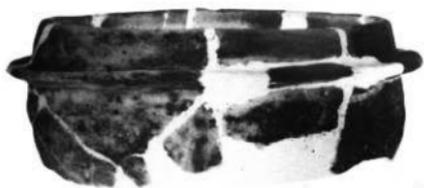
22, 23: 6-7 T 第II包含層

12: 6-6 TP47

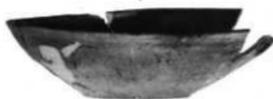
13: 6-6 TP53

15: 6-6 T SK-5 III層

20, 21: 6-7 T 第I包含層



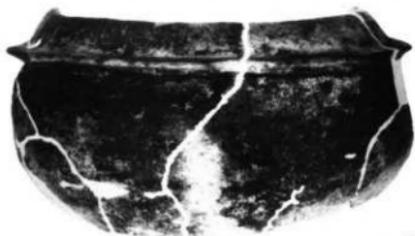
18



26



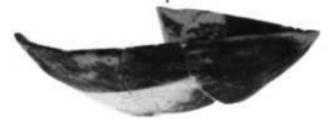
24



19



25



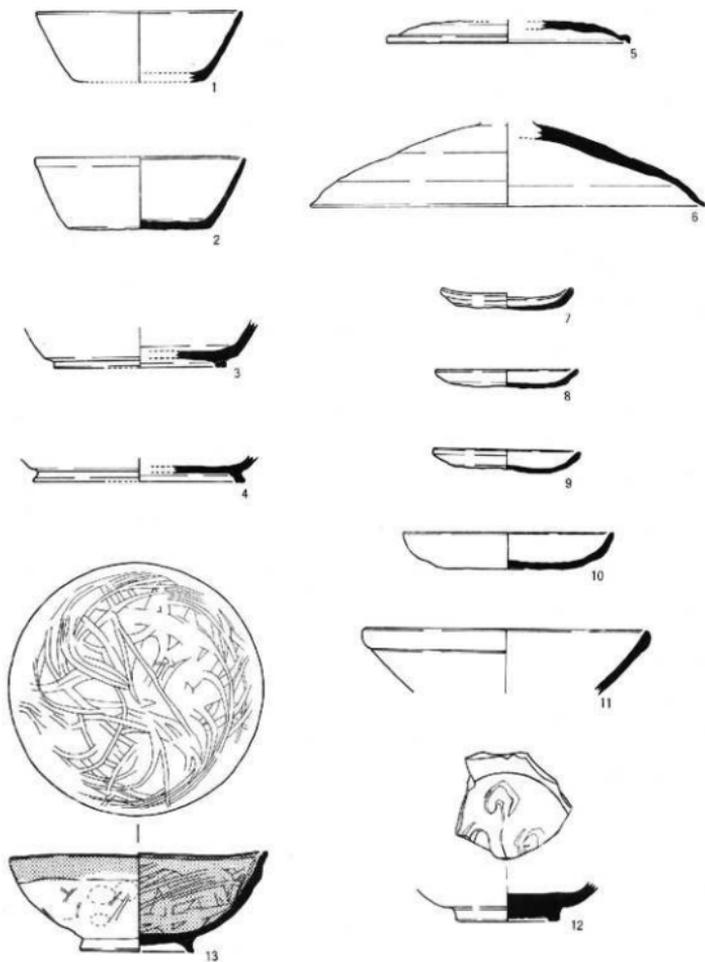
27

出土遺物

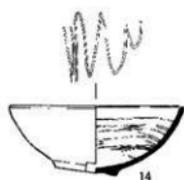
18: 6-6T SK-1 III層

19: 6-6T SK-1 I層

24-27: 6-7T 第II包含層



出土遺物実測図 1~6: 6-1T, SD-1 7~10: 6-3T 11: 6-6T, SD-10  
12: 6-6T, P47 13: 6-6T, P53



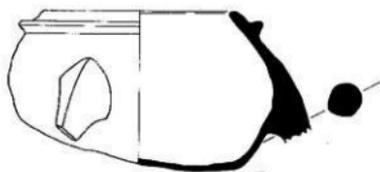
14



16



15



17



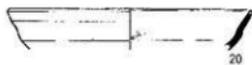
18



19



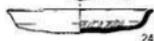
出土遺物表測図 14: 6-6T, SK-5I層 15: 6-6T, SK-5II層 16~18: 6-6T, SK-III層  
19: 6-6T, SK-I層



20



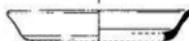
21



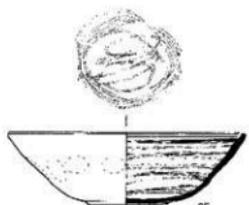
24



22



23



25



26



27



出土遺物実測図 20・21：6-7T，第Ⅰ包含層 22～27：6-7T，第Ⅱ包含層



1 SX-1 (西より)



2 SX-1 土器出土状況



1 SX-2~5 (北西より)



2 SX-2~5 (北東より)



1 SX-2 土器出土状況



2 SX-2.3 周溝断面(北西より)



1 SX-4 土器出土状況



2 SX-2-4 割溝跡面(石版土器)



1 T1 (北東より)



2 T1カマド (南西より)



1 T2 (東より)



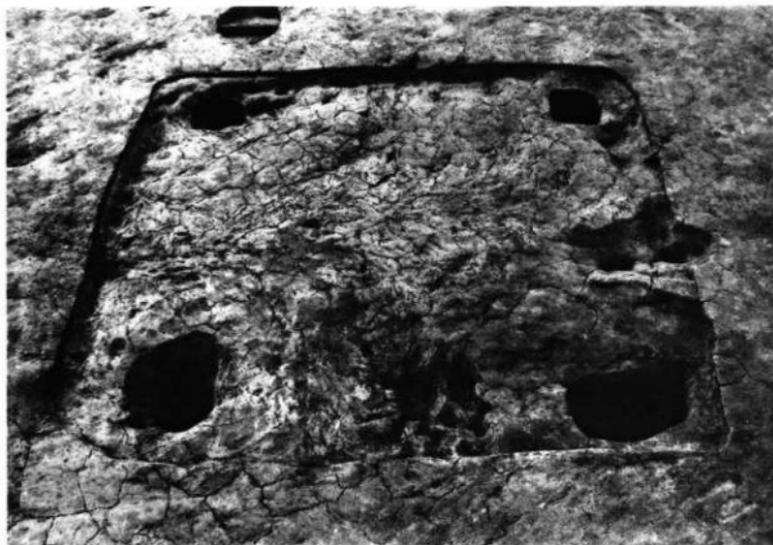
2 T2カマド (西より)



1 T3 (南東より)



2 T4 (東より)



1 T5 (東より)



2 T5 カマド (南東より)



1 T6 (南東より)



2 T7 (北東より)



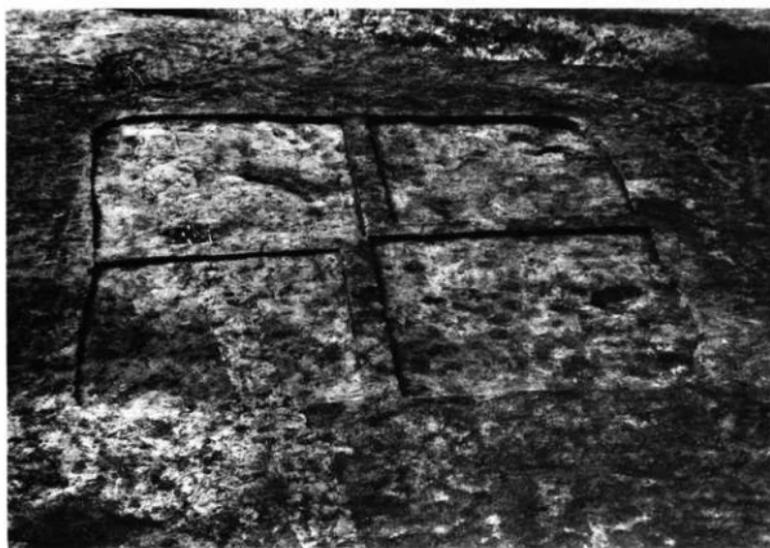
1 T8 (東より)



2 T9 (東より)



1 T10・14 (北東より)



2 T11 (北東より)



1 T13・16 (南東より)



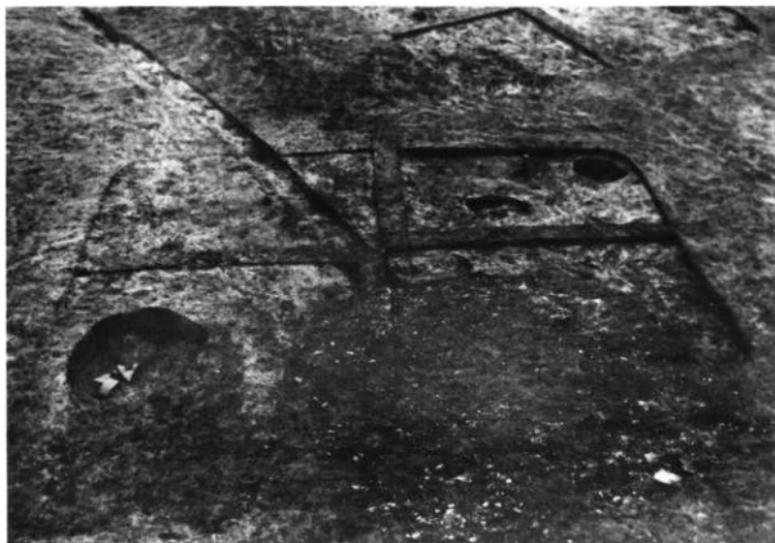
2 T16カマド (南東より)



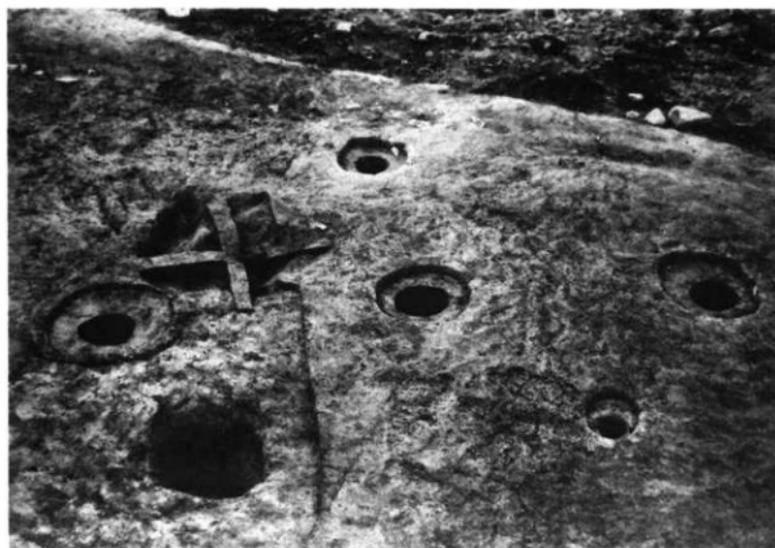
1 T15 (南東より)



2 T15 土器出土状況



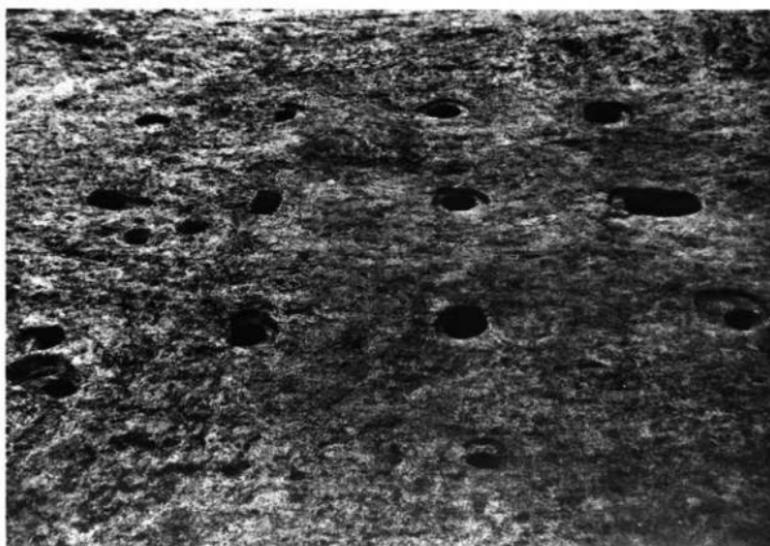
1 T12 (北東より)



2 H1 (東より)



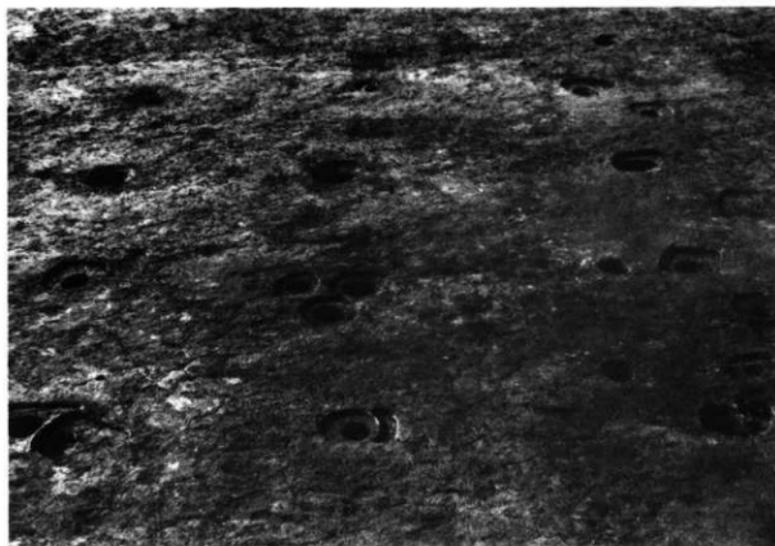
1 H2 (南東より)



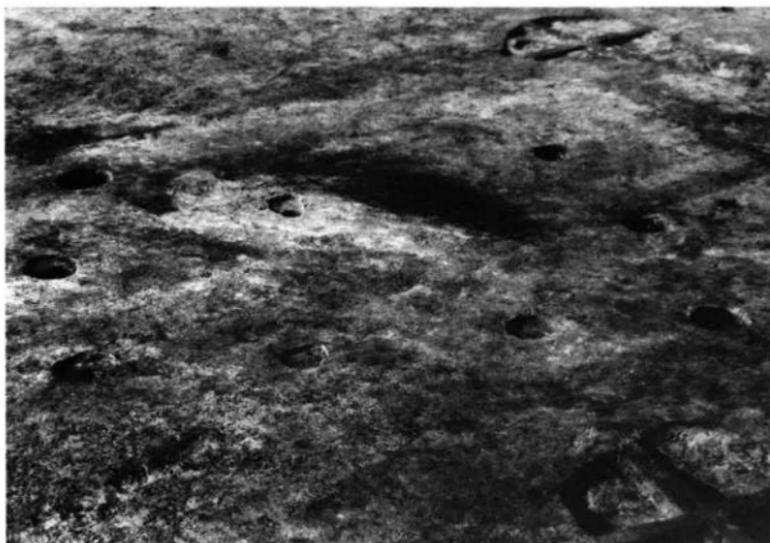
2 H3 (北東より)



1 H4・5 (南東より)



2 H6 (北東より)



1 H7 (東より)



2 H8 (北東より)



1 H10 (南東より)



2 屋外カマド (南東より)



1 SK-6 (北東より)



2 SK--12 (東より)



1

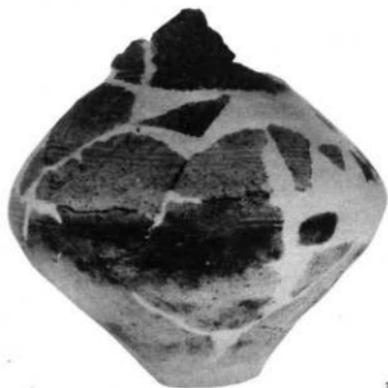


2

出土遺物

1: SX-1 VI層

2: SX-2 III層



3



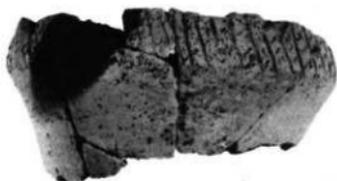
4



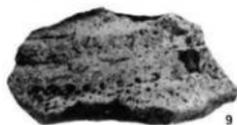
6



8



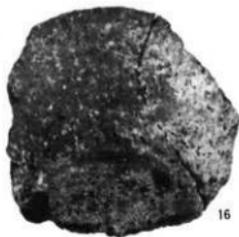
5



9



7



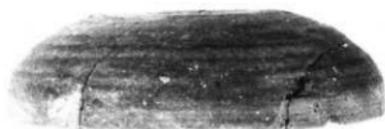
16

出土遺物

3: SX-4 III層 4: SX-2 III層 5: SX-3 III層

6: SX-3 I層 7: SX-3 IV層 16: T9

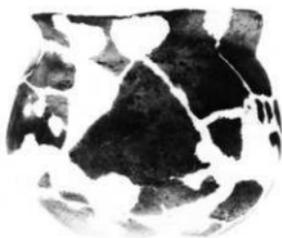
8・9: 不明



11



12



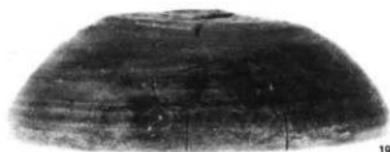
13



14



20



19



18



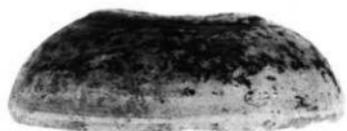
17



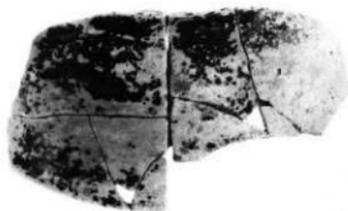
15

出土遺物

11: T1 12, 13: T2 14: T3 15: T7  
17, 19: T15 18: T14 20: T16



21



26



28



25



27



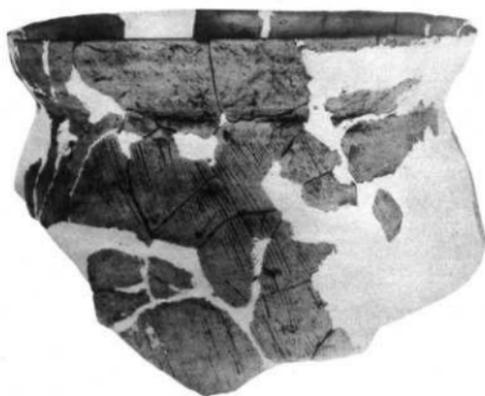
22



24



23



出土遺物

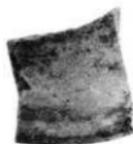
10 : 屋外カマド 21 : SK-4 22, 23, 24, 27 : SK-6  
25, 26 : SK-12 28 : SK-9



29



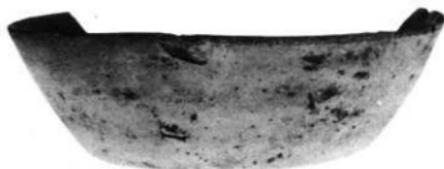
32



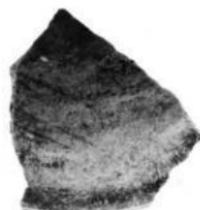
30



35



34



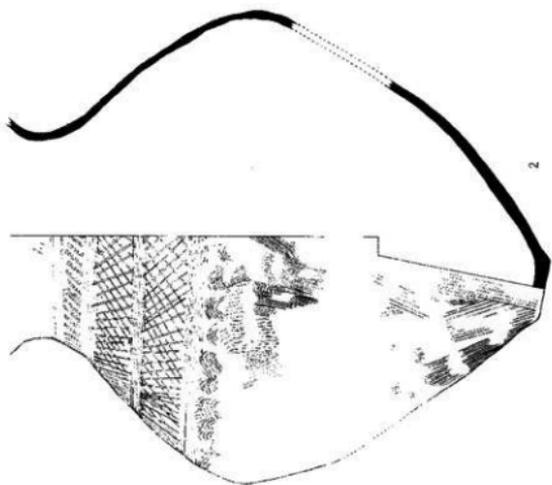
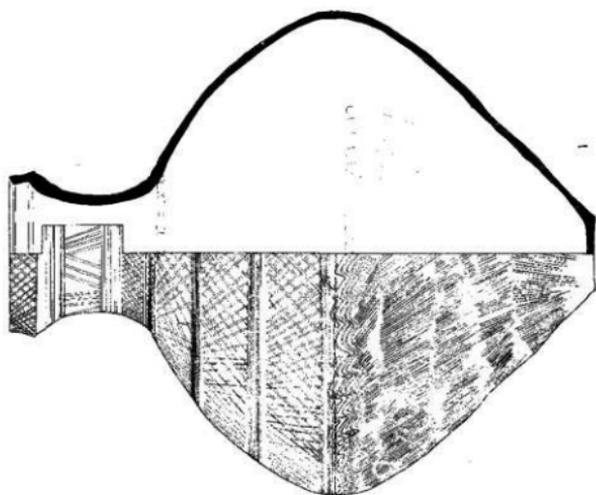
31



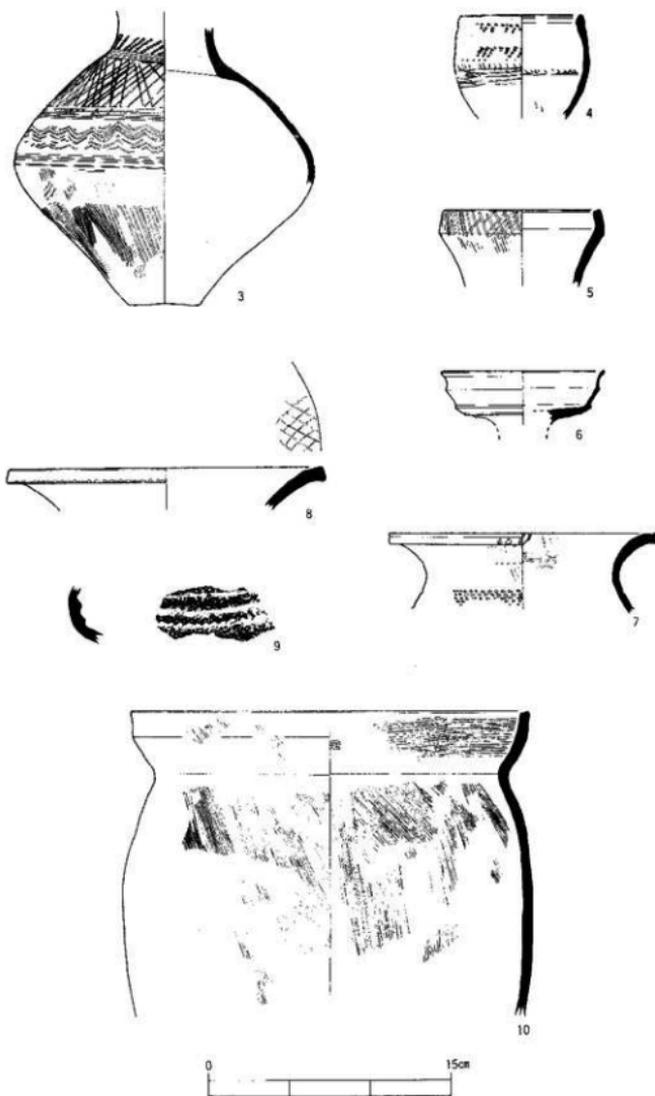
33



36



出土遺物実測図 1: SX-1, 11層 2: SX-2, 11層



出土遺物実測図 3: SX-4, III層 4: SX-2, III層 5: SX-3, III層 6: SX-3, I層  
7: SX-3, IV層 8-9: SX-3, V層 10: 屋外カマド



11



12



14



13



15



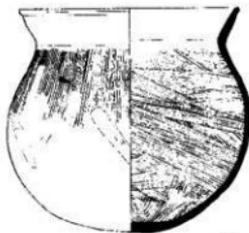
17



16



18



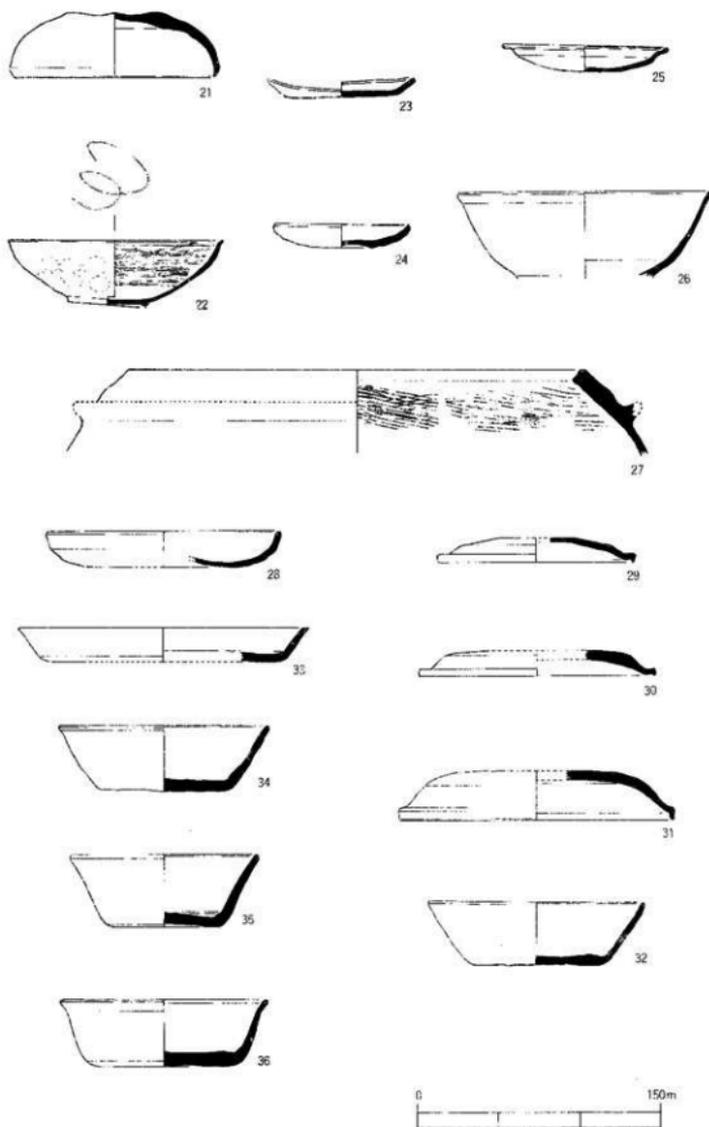
20



19



出土遺物実測図 11: T1 12: T2 13: T2 14: T3 15: T7 16: T6 17: T15 18: T14 20: T16



出土遺物実測図 21: S K-4 22・23・24, 27: S K-6 25・26: S K-12 28: S K-9 29~36: ヒット内



1 遺跡近景 (南から)



2 遺跡近景 (東から)



1 道標



2 道標(右:崎田 左:野村)



1 第1地区 1・Aトレンチ全景（南から）



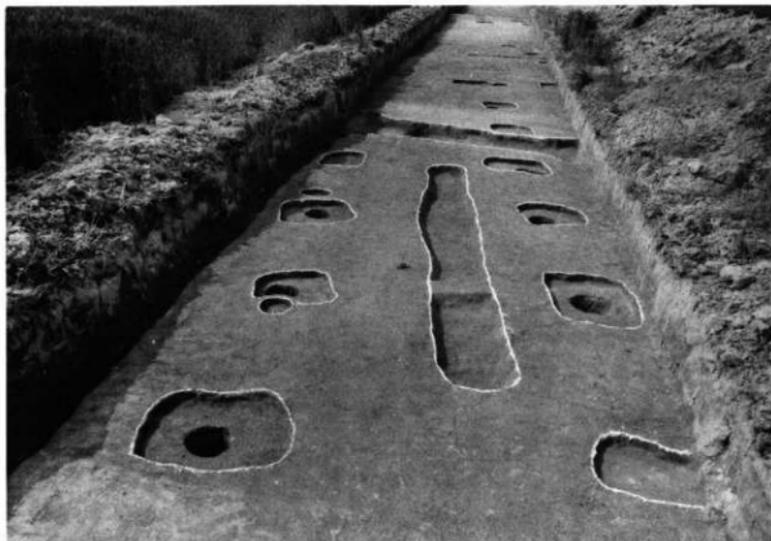
2 第1地区 1・Bトレンチ全景（西から）



1 第1地区 SR1 (自然流水路)



2 第1地区 石敷排水路 (SR2)



1 第1地区 SB1西半(南から)



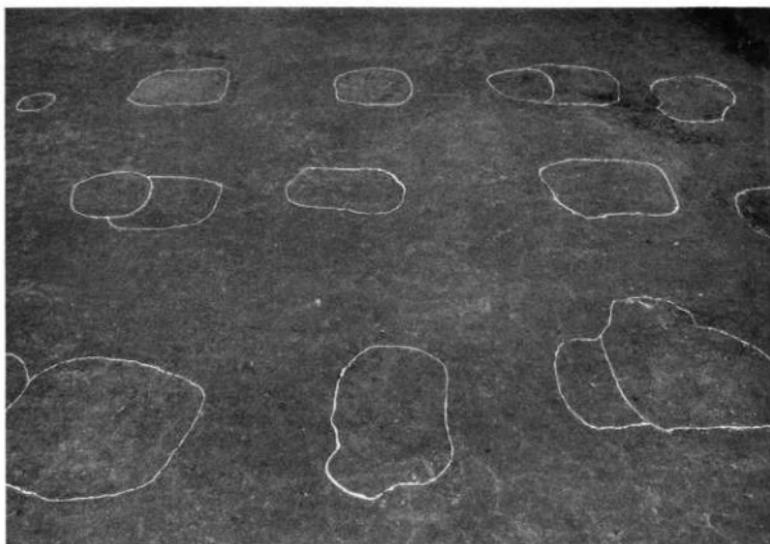
2 第1地区 SB1全景(右:拡張部)



1 第1地区 SB2 (西から)



2 第1地区 SB2 (北から)



1 第2地区 SB5 検出状況 (南から)



2 第2地区 SB6 検出状況 (東から)



1 T15トレンチ (北から)



2 T5トレンチ (南から)



139



154



115



15



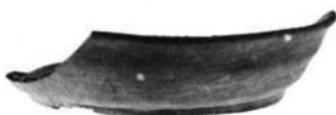
146



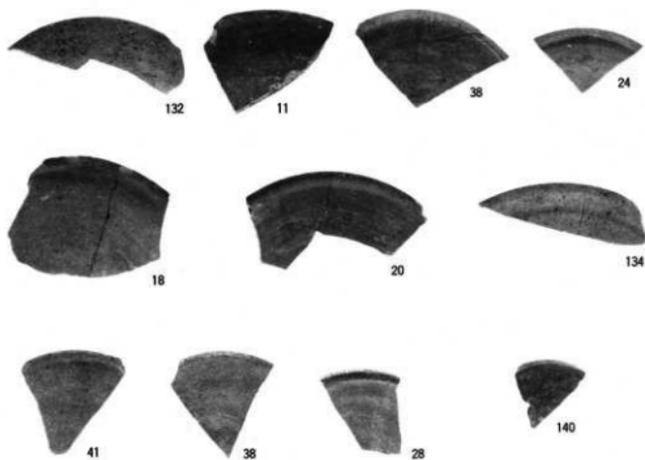
157



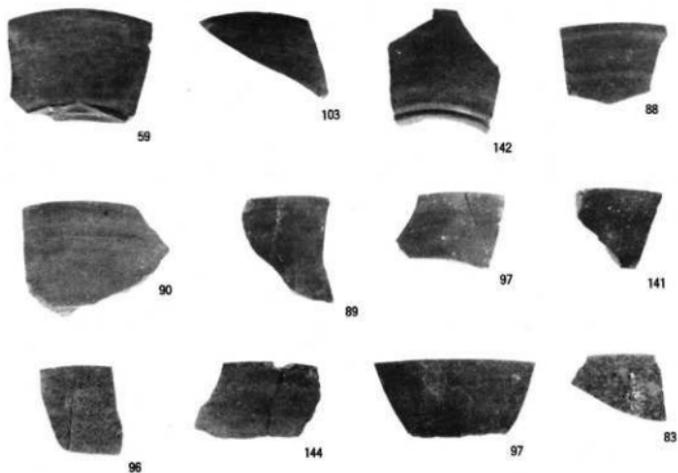
145



155



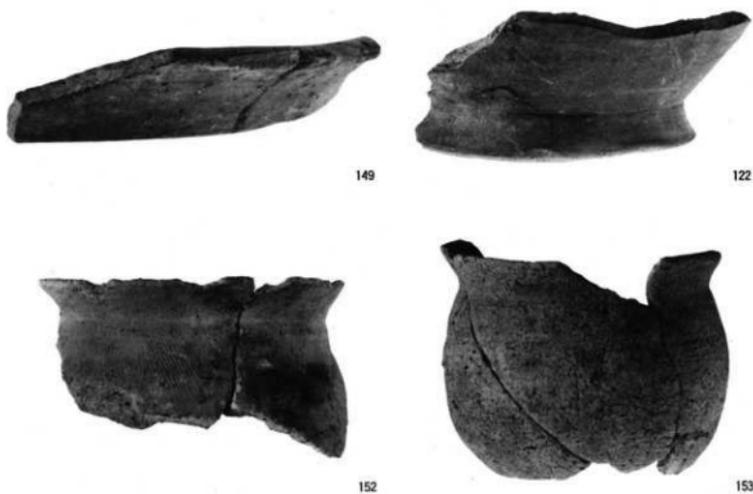
1 出土遺物 (須恵器)



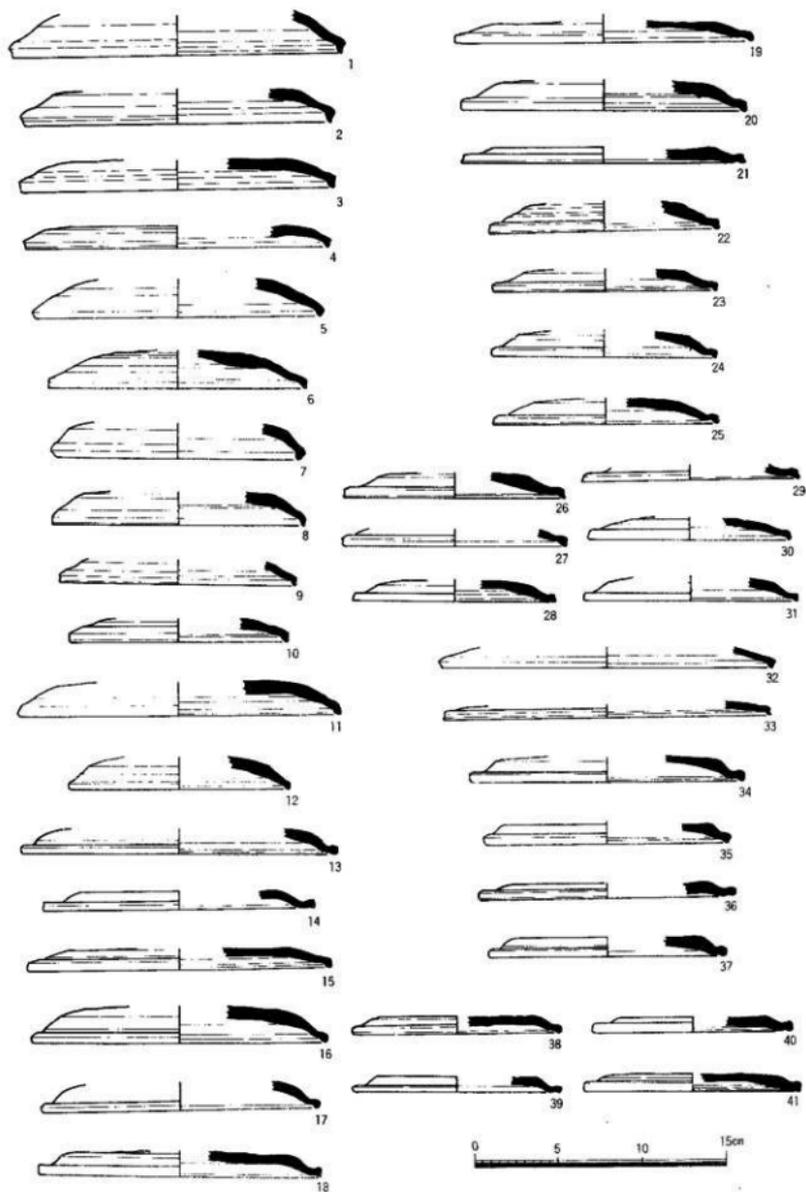
2 出土遺物 (須恵器)



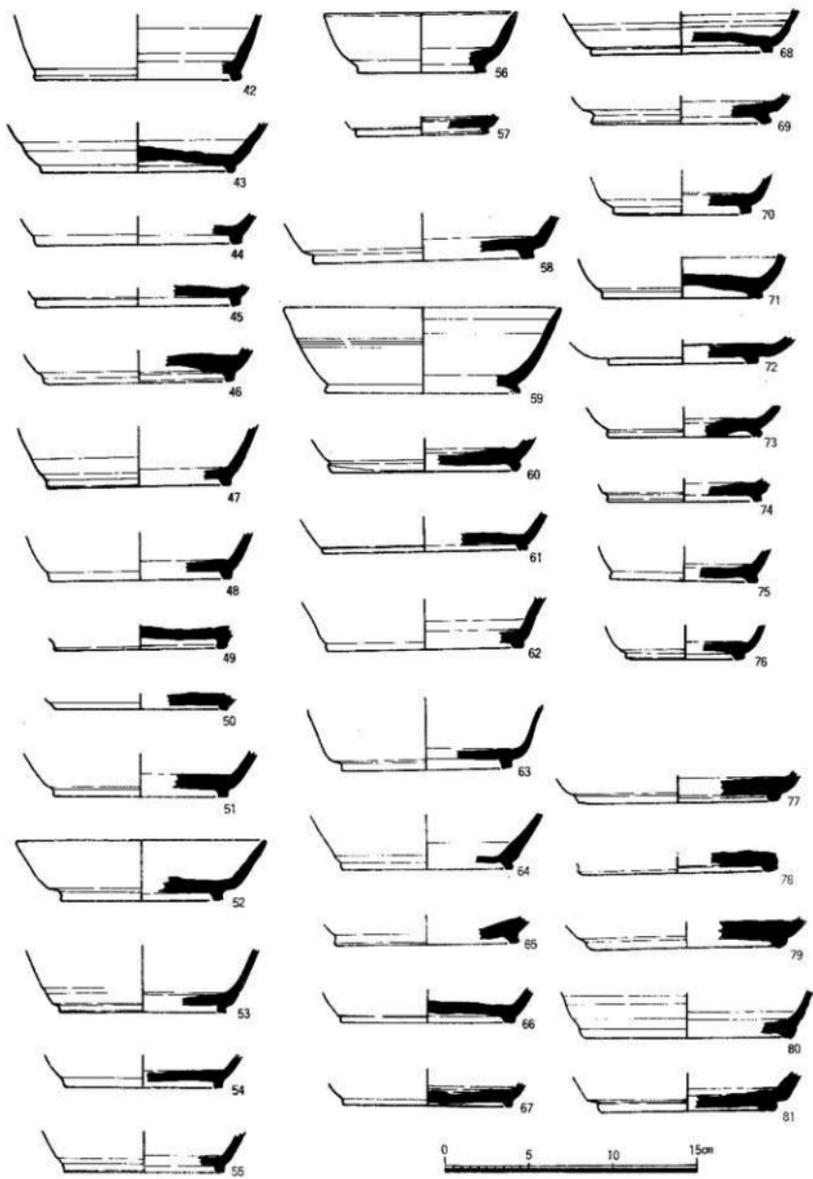
1 出土遺物 (須恵器)



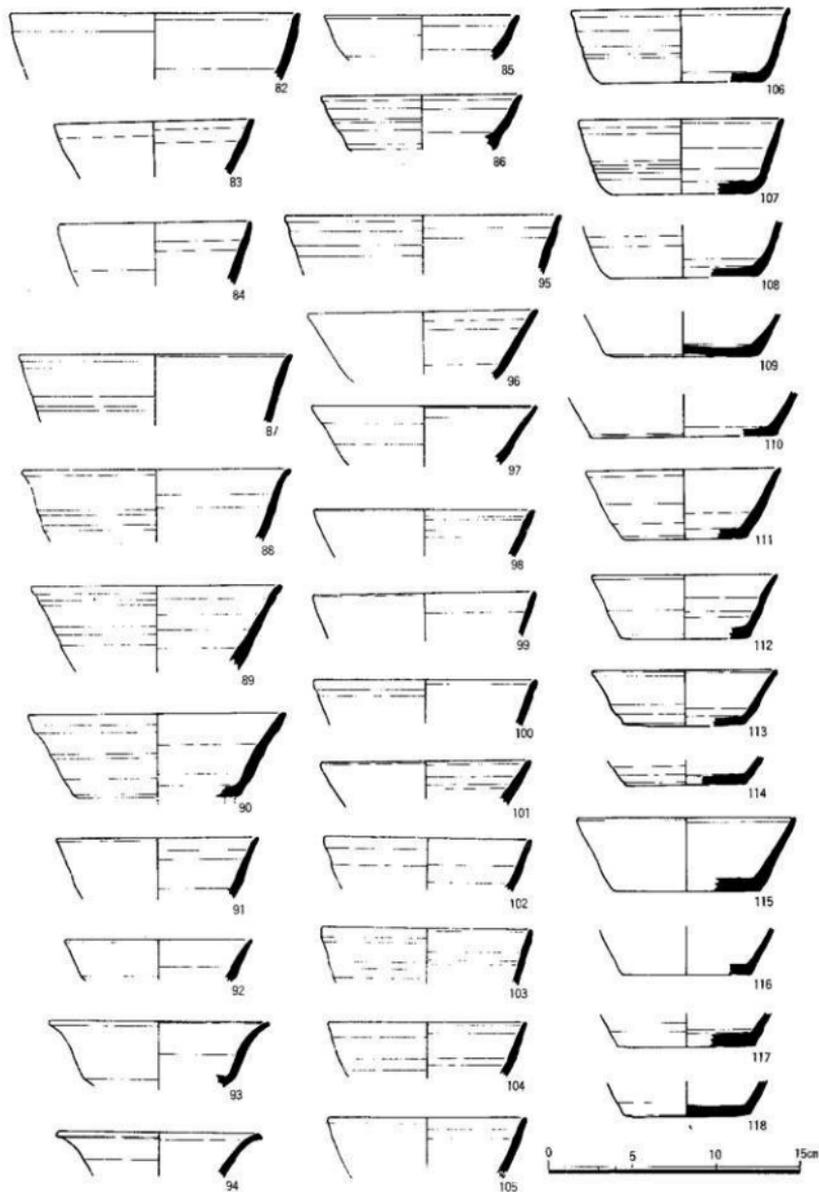
2 出土遺物 (須恵器・土師器)



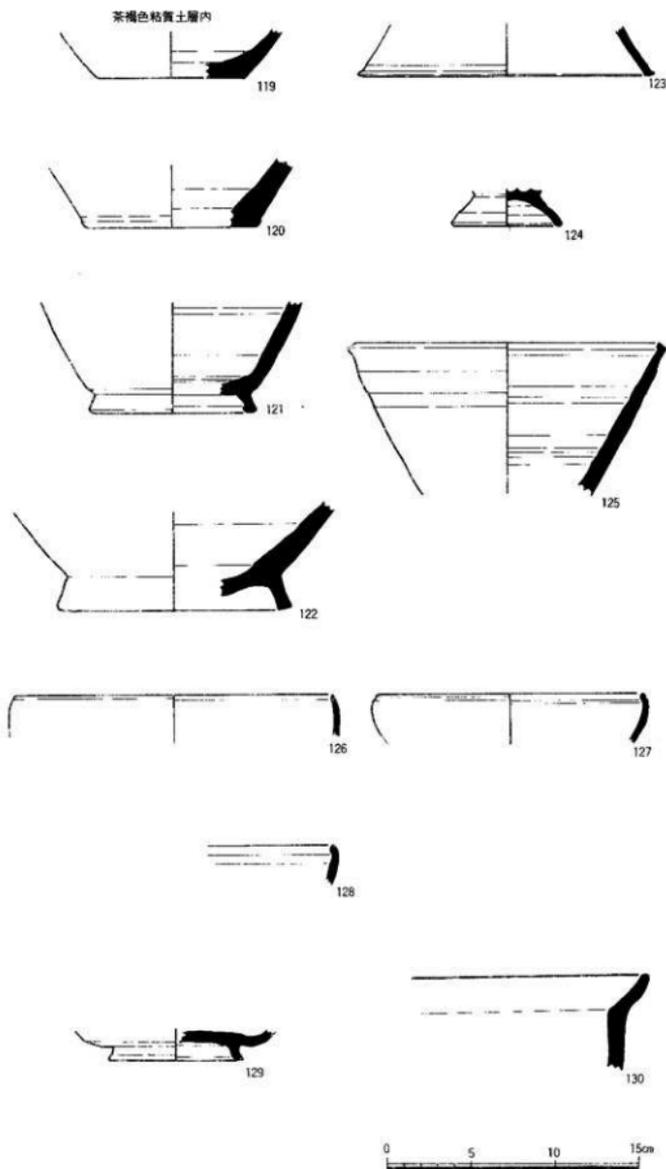
出土遺物表測図(1)

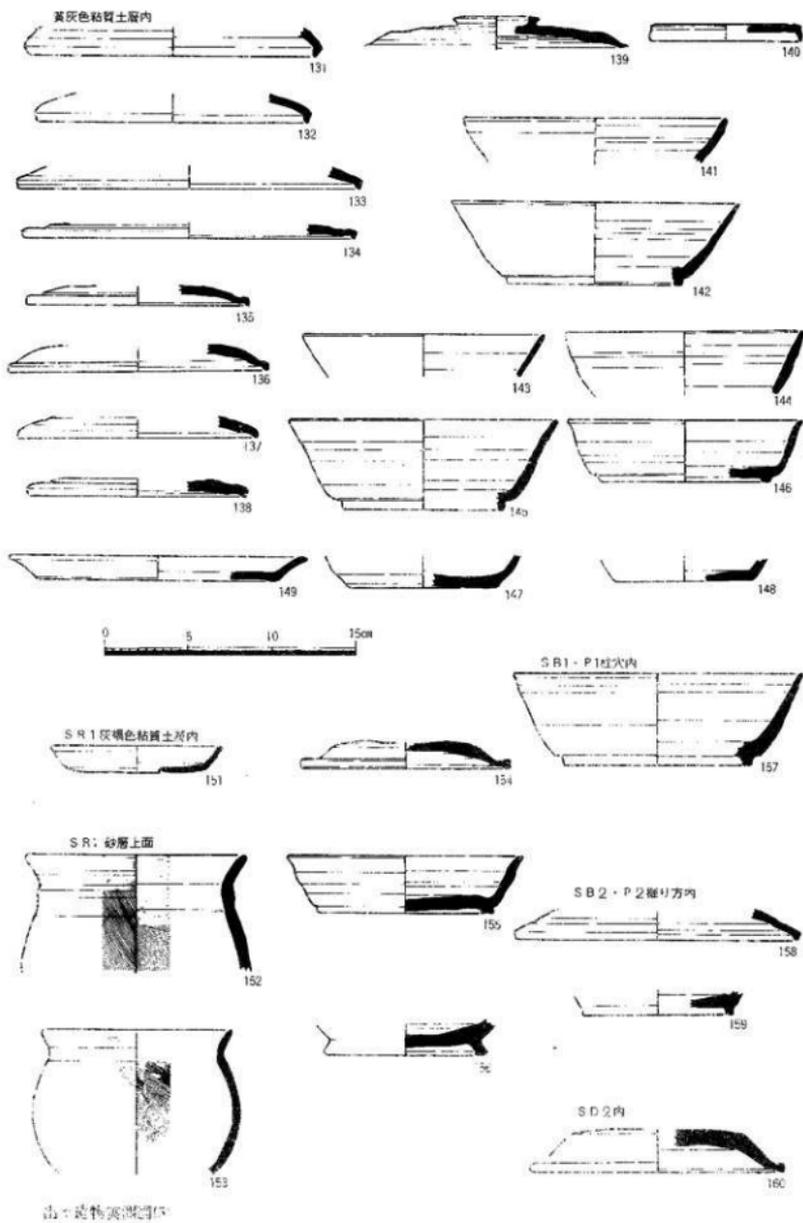


出土遺物実測図(2)



出土遺物実測図(3)







1 T-1トレンチ (東から)



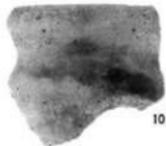
2 T-6トレンチ (東から)



8



2



10



4



1



3



14



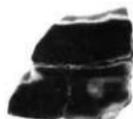
13



12



6



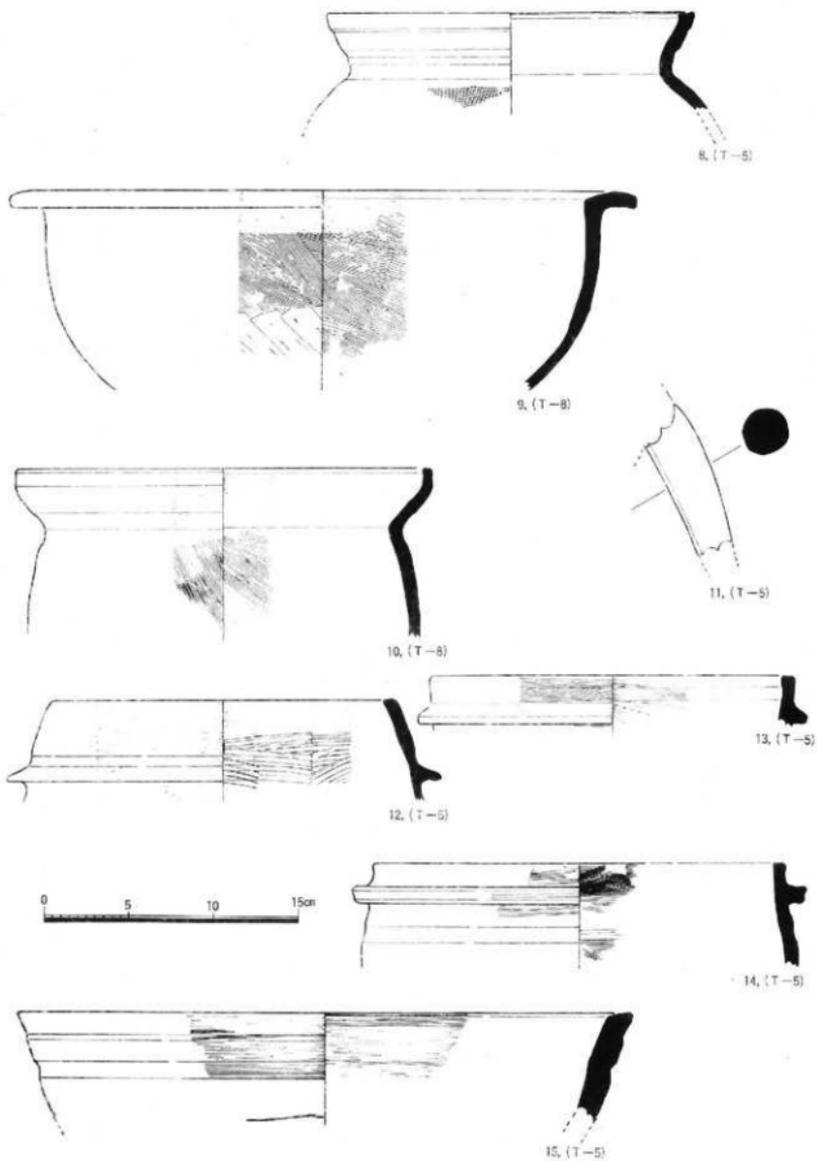
15



5



7



出土遺物実測図



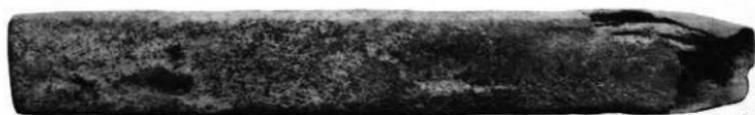
1 調査前 全景 (北から)



2 調査前 北部 (西から)



1 水晶工房跡全景 (南から)



2 水晶工房跡出土遺物 (1 未製品 2 数珠玉状製品 3 のみ状工具)



1 調査後 全景（北から）



2 調査後 全景（北東から）



1 調査後 全景 (北から)



2 調査後 北部 (東から)



1 土塁1 B断面



2 土塁1 C断面



1 土塁2 A断面



2 土塁3 B断面



1 T-2 南壁断面



2 T-7 南壁断面



10



4



16



13



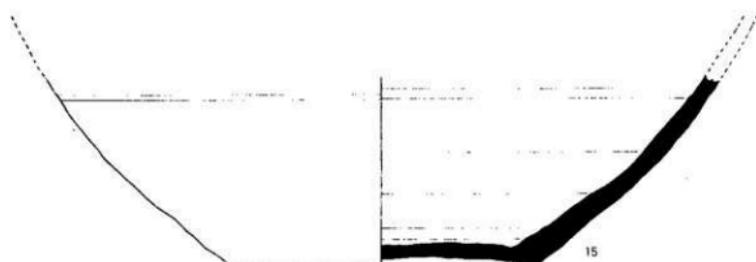
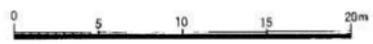
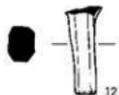
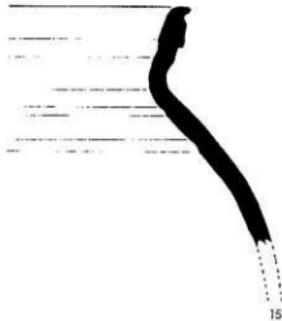
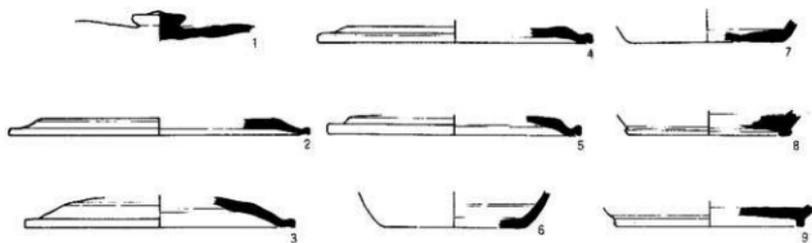
14



11



14



出土遺物実測図 1~9・12 土器1盛土内 11・13・16 土器1埋土内  
10・14:土器2埋土内 15:丁-5内堀底面

昭和57年3月25日

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告 X-5-2

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 有限会社 真 陽 社

京都市下京区油小路仏光寺上ル

TEL (075) 351-6034